334-117

野口保興著

提要 地理汎論 人文學

東京 目黒書店
成美堂書店合梓

明治
44. 8. 19
内交

提要

地理汎論

人文學

例言

一本書は地理汎論(Géographie générale)の大要を記述したるものにして人文學即人生地理(Géographie humaine)に關する各項に亘り地文學(Géographie naturelle)と相俟ちて全部を完成すべきものなり。

一本書は人文學が包括する所に從ひて人類地理、經濟地理、政治地理の三部に分かたる。

人類地理(Géographie anthropologique)に於ては人類の起

源、特質、進化等を說き、生存の狀況、文化の情態と自然的周圍の事情との關係を述べ。

經濟地理(Géographie économique)に於ては地球表面の自然的狀態と吾人の經濟的活動との關係を明にし。

政治地理(Géographie politique)に於ては地理學上より見たる吾人の政治的活動に關する事項を記載せり。

一　本書は地理學的事項に就きて由來を尋ね解明を下だすことを旨とせしものなれば地理學上の三原則たる廣袤、整理、本末の理に基づきしは勿論なるも、余の私見に係る吾人の積成性に據りしこと少なからず。

一　本書は余が研究錄と云はんより寧ろ備忘錄と稱すべきものに就きて取捨整頓を試みたる結果に外ならず、

研究事項の記述解明の間に學者若しくは論者の小傳を挿むが如きは或は蕪雜の誹あらんと懸念せざるに非ざるも余の研究上に於て先哲先輩の指導に負ふ次第の一端を表現するは反りて斯學を研究するものの參考たらんかと信ぜしに因れり。

一　本書は統計表に重きを置きしに拘らず、適當なる材料を得ざるが爲充分なる斷案を下だすこと能はざる場合少なからざるは遺憾に堪えず。

一　本書の參照用地圖は別册と爲すの便に依れるも、刊行あるの日を待ち左記の精圖を供用するの要あらん。

The XXth Century Citizen's Atlas.—J. G. Bartholomeu.

Andrees Handatlas.—A. Scobel.

Stilers Handatlas.—Justus Perthes.
Atlas de Géographie Moderne.—F. Schrader, etc.
Atlas général Vidal—Lablache

一　本書に挿入せし圖畫は頗る僅少にして要求の一部をも充たし得ざるは勿論なれども本書の參考用たるべき圖畫の一斑を示さんと試みたるに過ぎず。

一　本書を著作するに當り參考したる書籍に就きて主要なるものを掲ぐれば次の如し。

Evolution de la Terre et de l' Homme	G. Lespagnol
La Terre	P. Cameda d' Almeida
Dictionnaire de Géographie	Vivien de S.—Martin.
Nouveau Larousse Illustré	Larousse et C.ie
Revue encyclopédique	Larousse et C.ie
Annales de géographie	Vidal de la Blache, etc.
Almanch de Gotha	Justus Perthes
Geographisches Handbuch (1909—1910)	Albert Scobel
Handbuch der Geographie	G. von Seydlitz
Lehrbuch der geographie I. 1908	Hermann Wagner
Meyer's kleines Konversations—Lexikon	Justus Perthes.
Taschen—Atlas	Justus Perthes
Whitaker's Almanack for 1911	Joseph Whitaker
Hazell's Annual for 1911	Harmand Hall
The statemann's Year Book 1910	Macmillan & Co.
Histoire des Religions	P. D. Chantepie.
Histoire Politique de l' Europe	Ernest Lavisse.

Les Lois sociales. G. Tarde.
Comment la route crée le type social Edmond Demolins.
Les Origines du Socialisme Contemporain Paul Janet.
Systèmes coloniaux et Peuples colonisateurs Marcel Dubois.

提要

地理汎論目次

緒言 一乃至一八頁

人文學

第一編 人類地理

甲、人類の地位……一頁
乙、人類の進化……九
A. 活力的進化……一〇
B. 活用的進化……二二
丙、人類の起源……三〇
A. 發生期……三〇
B. 發生地……三九

丁、人類の曙光……二
四ヨーロッパ……四五
アメリカ……五七
日本……五八
戊、人類の現狀……六二
A、始原的文化……六七
漂遊的獵漁……七五
B、半開的文化……八〇
漂遊的牧畜……八七
C、旺盛的文化……九〇
改良的耕種……九六
優秀的農牧……一〇三
己、人類の多寡……一〇七
人口の增加……一一〇
人口の總數……一一八
人口の分布……一二八
人口の密度……一一五
庚、人類の種別……一二八
A、種別の方法……一二八
無形性……一三五
有形性……一二九
B、種別の實際……一四三
形貌別……一四六
皮色別……一四五
自然別……一五〇
日祖別……一四八
辛、種族の記載……一五二
I、黑色人種……一五三
東黑人……一五九
西黑人……一五三
II、黃色人種……一六三
支那派……一六八
蒙古派……一六四
フィン派……一七六
北方派……一七三
無所屬……一七九
III、白色人種……一八四
セム派……一九六
ヤペーツ派……一八四
ハム派……一九八

I. マライ副種……二〇一
インドネシア派……二〇一　マライ派……二〇四
ポリネシア派……二一一
II. アメリカ副種……二一五
北派……二一七　中派……二一九
南派……二二〇
壬、言語の分布……二二五
癸、信仰の分布……二三九
餘論……二六三
天然が吾人に及ぼす影響……二六三　吾人が天然に及ぼす影響……二六八
人類の移住……二七二　大都の出現……二七五
第二編　經濟地理
第一　生産……二八六
甲、原料品……二九〇
I. 陸産……二九〇
A. 林産……二九一
B. 樹産……三〇三
C. 農産……三一三
D. 園産……三二五
E. 獵産……三二八
F. 養産……三三二
G. 鑛産……三三四
II. 水産……三五七
乙、加工品……三六六
I. 製品……三六七
A. 飲食品類……三六八
食料品……三六八　調味品……三七六
貯藏品……三七八　飲料品……三八〇

B. 纖維品類……三八四
木材類……三八四　皮革類……三八六
毘類……三八七　紙類……三八七
絲類……三八九　纖物……三九四
編物……四〇四　組物……四〇七
C. 化學品類……四〇八
冶金品……四〇八　化學品……四一六
D. 完製品類……四二一
服裝類……四二二　器物類……四二四
雜品類……四三三
II. 機械……四三七
A. 學藝用器械……四三八
B. 生業用機械……四三八
生產用機械……四三九　分配用機械……四四〇
C. 工事用機械……四四三

D. 兵備用機械……四四三
三大工業國……四四六
第二　分配……四五〇
甲、交通……四五〇
I. 通運……四五〇
A. 陸路……四五八
道路……四五八　鐵道……四六三
B. 水路……四八〇
帆船……四八一　汽船……四八四
運河……五〇二　商港……五一六
II. 通信……五二四
郵便……五二五　電信……五二八
電話……五三四
乙、通商……五三四

I. 世界的商業……五三六
A. 貿易界の大勢……五三六
貨物の活動……五三七　通商の發達……五四一
B. 貿易國の特狀……五四七
II. 地方的商業……五六一
餘論……五六四
電氣工業……五六四　旅舍業……五六六
金融業……五六七　生業國……五七一

第三編　政治地理

甲、國家……五七六
A. 版圖……五八一
國境……五八五
B. 國民……五九二
國民の素質……五九三　國民の多寡……五九九
C. 主權……六〇八
乙、政體……六一九
A. 政權……六一九
B. 政廳……六二三
C. 政務……六三〇
外交……六三一　兵備……六三三
財政……六三八　殖民……六四三
餘論……六四九
社會の現狀……六四九

提要地理汎論人文學挿圖目次

第一圖　生活の狀態……四四頁
　　發火の方法……四五頁
第二圖　家族……五六頁
　　彫刻家……五七頁
第三圖　岩上の馬狩……六六頁
　　岩下の住屋……六七頁
第四圖　パプア、ポシエスマン、ポーストラリアン、ポトクド……一二八頁
　　ニウビアン、アラブ、ズールー、ベルベル……一二九頁
第五圖　ネグリト……一六〇頁
　　アラウカノ……一六一頁
第六圖　喫人者と犧牲……二一二頁
　　人肉の捕搬……二一三頁
第七圖　請願畫面……二二四頁
　　文手、文顔……二二五頁
第八圖　護符……二四二頁
　　祈願所……二四五頁

第九圖　彫刻……二三四頁
　　繪畫……二三五頁
第十圖　板小屋……二五四頁
　　土小屋……二五五頁
第十一圖　天幕營……二六四頁
　　幕小屋……二六五頁
第十二圖　杙上屋……二七六頁
　　積重屋……二七七頁
第十三圖　平天屋……二八二頁
　　摩天屋……二八三頁
第十四圖　森林、竹林……二九〇頁
　　茶園、茶摘……二九一頁
第十五圖　象の捕養……三二二頁
　　駝馬の飼育……三二三頁
第十六圖　石材掘採……三四四頁
　　坑內作業……三四五頁
第十七圖　撚絲工場……三九四頁
　　製織工場……三九五頁

第十八圖（把籃轎　三把手小車）……四五八問
第十九圖（夏道冬路　地下鐵道）……四六四問
第二十圖（兩鈎式鐵道　索網式鐵道）……四六五問
第二十一圖（「カラブエル」「スクーナー」　五檣大帆船）……四七六問
第二十二圖（外輪式汽走曳船　回轉式快走客船）……四七八問
第二十三圖（高棧橋　遲渡棧）……四八〇問
第二十四圖（國境標石　戰艦）……四八一問
……四九四問
……四九五問
……五一八問
……五一九問
……五八六問
……五八七問

提要 地理汎論

野口保興著

緒言

地理學は其の起源に溯れば古く、少なくも二千年の壽を有ち、其の大成よりも觀れば新しく、半世期を超ゆること多からず、蓋し吾人が蠻期を脫し、少しく智力の發展するを覺ゆるや既に地理的思想は端を開き緒に就きたるなるべしと雖も、地理學として存在するに至りしはギリシア人の盡力に基づきりと爲さざるべからず、然るに斯學の進運意の如くならず、右に折れ左に曲り、彼に偏し此に傾き、恰病軀を提げて迂路を辿るが如き狀況を呈せしことありて、健全なる精神の下に地理學が成立するを見るに至りたるは第十九世

期の中葉なりき、抑、地理學(Science géographique)は科學の一にして現在に於ける地球の形相(Physionomie)を多方面より觀察研究するを目的とするを以て、精探すべき範圍頗る廣く調査すべき事項は複雑を極むるも、吾人の活動場たる所謂土地に關する事項と、吾人の活動即ち人生に關する事項との別ありて地文學即ち自然地理と人文學即ち人生地理とに分かれ、研究事項が汎く世界の全部に亘ると特殊の一地域に限らるるとに依らば地理汎論と地理特論とに分かれ、研究の方法が理性的の解明を主とすると感想的の寫述を旨とするとに基づかに解明的地理と寫述的地理とに分かるべきものなるが故に斯學は雙立(dualisme)せざるを得ざる運命を有せしにや、創設の當時より既にタレース(Thalès)(西紀前第六世期)派の地理學者は汎論的自然地理を主とし、ヘロドートス(Herodotos,西紀前第五世期)派の地理學者は特論的寫述的地理に傾き、ストラボン(Strabon)(西紀初年)は特論的人生地理を寫述し、プトレマイオス(Ptolemaios,西紀第二世期)は汎論的に數學地理を解明したり、加ふるに地理學は攻略、傳道、通商等の影響を蒙り、又一方には他の科學の進歩に伴はざるを得ざりしが爲キリスト教徒の勢力、ゾートン種族の侵移、アラビア人の勃興、蒙古人の活動等に從屬して起伏消長常なかりき、復興期に於ては大旅行の恩惠に浴し、地圖の作成に依り、科學の發展に關連して斯學が得る所ありしは極めて大なりしも亦新舊兩派の學風を同化統一する能はずしてムンステルの寫述的『コスモグラフィア』(世界誌)は四十四版を重ねたるにブァレニウスの解明的『ゼオグラフィアゼネラリス』(地理汎論)の勢力は微弱なりき。

地理の雙立

ムンステル

ブァレニウス

ムンステル(Sebastian Münster)(1489—1552)はヘブライ學者にして數學者なり、インゲルハイム(Ingelheim)に生れ、バーセルに於てヘブライ語の教授たりき、ヘブライ語に關係ある著書少なからず、殊に一五四一年を以て世に公にせられたる『世界誌』(Cosmographia oder Beschreibung aller Lander)は解明と述寫とを兼ぬる文書の添ひたる地圖總覽として大に行はれたり。

ブァレニウス(Bernardius Varenius)(1620—1680)はアムステルダムの學者なり、當時神作と稱へられし『地理汎論』(Geographia generalis)はフンボルト及びリッテルの先導者と爲すに足るの意想を包藏せしも、不幸にして下拙のラテン文にて綴られ、形式の數學的なりしため數回の印行ありて ニュートン の賞賛を得しに拘らず、多くの讀者を得ること能はず、直接世を益すること少なかりき、而して『日本國地誌』(Descriptio regni Japaniae)は地理特

期の中葉なりき、抑、地理學(Science géographique)は科學の一にして現在に於ける地球の形相(Physionomie)を多方面より觀察研究するを目的とするを以て、精探すべき範圍頗る廣く調査すべき事項は複雜を極むるも、吾人の活動場たる所謂土地に關する事項と吾人の活動即ち人生に關する事項との別ありて地文學即ち自然地理と人文學即ち人生地理とに分かれ、研究事項が汎く世界の全部に亘ると特殊の一地域に限らるるとに依らば地理汎論と地理特論とに分かれ、研究の方法が理性的の解明を主とすると感想的の寫述を旨とするとに基づかば解明的地理と寫述的地理とに分かるべきものなるが故に斯學は雙立(dualisme)せざるを得ざる運命を有せしにや、創設の當時より既にタレース(Thales)(紀前六世期第)派の地理學者は汎論的自然地理を主とし、ヘロドートス(Herodotos)(紀前五世期第)派の地理學者は特論的寫述的地理に傾き、ストラボン(Strabon)(紀初年)は特論的人生地理を寫述し、プトレマイオス(Ptolemaios)(紀二世期)は汎論的に數學地理を解明したり、加ふるに地理學は攻畧、傳道、通商、等の影響を蒙り、又一方には他の科學の進歩に伴はざるを得ざりしが爲キリスト教

徒の勢力、ツートン種族の侵移、アラビア人の勃興、蒙古人の活動、等に從屬して起伏消長常なかりき、復興期に於ては大旅行の恩惠に浴し、地圖の作成に依り、科學の發展に關連して斯學が得る所ありしは極めて大なりしも亦新舊兩派の學風を同化統一する能はずしてムンステルの寫述的『コスモグラフィア』(世界誌)は四十四版を重ねたるにブァレニウスの解明的『ゼオグラフィアゼネラリス』(地理汎論)の勢力は微弱なりき。

ムンステル(Sebastian Münster)(1489—1552)はヘブライ學者にして數學者なり、インゲルハイム(Ingelheim)に生れ、バーゼルに於てヘブライ語の教授たりき、ヘブライ語に關係ある著書少なからず、殊に一五四一年を以て世に公になしたる「世界誌」(Cosmographia oder Beschreibung aller Lander)は解明と述寫とを兼ねる文書の添ひたる地圖總覽として大に行はれたり。

ブァレニウス(Bernardius Varenius)(1620—1680)はアムステルダムの學者なり、當時神作と稱へられし「地理汎論」(Geographia generalis)はフンボルト及びリッテルの先導者と爲すに足るの意想を包藏せしも、不幸にして下拙のラテン文にて綴られ、形式の數學的なりしため數回の印行ありて ニュートン の賞賛を得しに拘らず、多くの讀者を得ること能はず、直接世を益すること少なかりき、而して「日本國地誌」(Descriptio regni Japaniae)は地理特

論に資すべきものありき。

斯の如くして地理學は大成するの機を逸せしと雖も第十七世期の中葉以後、第十八世期に於ては各派科學の發達ありて地理學を稗益せしこと頗る多かりしが、殊に傳來地理即ち舊式の地理は改良せられ、數學地理は好材料を收得したり、爾來各派の科學が齎し來れる材料の豊富なりしが爲め光輝燦然として地理學界を照らし古來の迷誤は一時に消散して眞正なる地理學は其の方法と其の格式とを備へて科學界に座席を占むるに至れり、而して茲に達するに途遠く勞多かりしが、功成りて實擧りしは眞にアレクサンデル フンボルト(Alexander Humboldt)及びカルル リッテル(Karl Ritter)の賜なりと云はざるを得ず、人格性情の異れる而も長短互に相助くる兩偉人の地理學界に現はるるありて永年の宿題は解決せられたり。

フンボルト

フンボルト(Alexander Humboldt)(1769—1859)はドイツの博物學者にして旅行家を兼ねベルリンに生死す、科學の研究に熱中し、パラス(Pallas)を慕ひ、フォルスター(Forster)に親み、パリーに於てボンプラン(Aimé Bonpland)なるものと交を結び、共に南アメリカ及びメキシコを探檢したり(一七九九——一八〇四)、歸國の後「新大陸回歸帶地方に於ける旅行」(一八〇五—一八三二)の著作に從事せしが、ロシア皇帝の招に應じてシベリア及びカスピ海附近に科學的旅行を試みて(一八二九)「中央アジア」を記述し、爾來「宇宙」(Kosmos)を公にし、一八四五—一八五一)(各種の現象を觀察するに屢新案の研究法を以てし、氣候學及び植物地理を主唱せしのみならず、地理上の研究に就きて(一)一つの現象を研究するに當りては現象其のものを研究せずして、此の現象と他の自然的若しくは人生的の現象との關係を研究すべし(二)或地方に起れる凡ての現象は之を他の地方に於ける同樣の現象に比較研究すべしとの二大原則を主張適用したり。

リッテル

カルル リッテル(Karl Ritter)(1779—1859)はドイツの有名なる地理學者なり、ゲドリンブルグ(Quedlinburg)に生れ、ベルリン大學の教授と成りて(一八二〇)地理學を講述し、統計學の講座を兼ね、陸軍大學の教務課長に任じ、高等教育會議に入れり、地球上に棲息する活物と地球との間に於ける關係を說きて史學と科學との連鎖を明にせんと欲し「比較地理汎論」を著し、有機と無機との要素間の遷移的關係及び各國人民の經歷を記述したり(一八一七——一八一八)、此の外に「ヨーロッパ」(一八〇七)、「ヘロドートス以前のヨーロッパに於ける人民の歷史」(一八二〇)、「ヨルダン河及び死海の航行」(一八五〇)、「パレスチナと其の基督教徒」(一八五二)、「地理入門と地理學研究法」(一八五二)、等あるも最も顯著なるはリッテル教授が三十七年間(一八二二——一八五八)の精力を盡して著作し得たる「增補比較地理」にして二十卷を出だせしもアジア、アフリカを說き了りしのみにて、大著が完成を告ぐるに至らざりしは遺憾の極みと云ふべし。

フンボルト及びリッテルに依りて近世地理學(Science géographique moderne)は的確に建設せられ、一の科學として生存するに至りしも、新思想の播布、地理學の普及を觀んには之を受くべき世人に相應の準備なかるべからず、フンボルトの研究法に偉なる所ありしも、之に接觸せしは博物學界にして觀察の方法に貢献せしに過ぎざりき、之に反してリッテルは地理學者に影響を及ぼせしこと遙に大なるものありしは事實なるが、傑師の長所を傳ふるに拙にして偏僻を摸倣するの傾向を呈し、徒に原則の美を解きて之を適用するの道を知らざりしが如し、然れども斯る情態は永く繼續すべきに非ず、兩氏が播種せし効果空しからずして發芽期の來るを待ちつつありしに第十九世期の末の三分の一は地理學の發芽に肝要なる事情の備はりしにや大に發展するを見るに至れり。

交通機關の改良は殖民政策の進運と相待ちて踏査精探を促がし地球に就きての知識の增大を來たし、其の結果として第十九世期は復興時代に於けるが如き驚天動地の大發見を實にするを得ざりしも亦地球の表面に甚大なる變樣を現はし、殊に各洲の內陸に就きて詳にする所多かりしのみならず又海洋の內容にも見るべきものあり、而して一面には熱心にして有力なる地理學者出でて斯學の爲め覺醒者たり鼓吹者たるものあり、フランスのエリゼルクリュー(Elisée Reclus)は「地球」(La Terre)を公にし(一八六九)、妙趣に富める大著「世界新地理」(Nouvelle géographie universelle)を二十年間(一八七五—九四)に刊行して世を益せしが、ドイツのオスカルペッシェル(Oskar Peschel)は『比較地理新說』(Neue Probleme der Vergleichenden Erdkunde)を著して(一八七〇)リッテル師の主張を深く而も興味多く記述したり、彼等に依りて地理學は地球表面に關する生命活動の科學と成り以て抽象の學、考證の學たるの陋習を打捨つるに至りたり、加之各派の科學は發展して地理學に援助を與ふることは極めて大なりき、第十九世期の初年以來ヨーロッパ各國を始めとし合衆國、印度、加奈陀、日本等にありては國家の事業として精確なる地形圖並に地質圖の漸次に發行せらるるあり、氣象臺、測候所等の設置漸多くして氣界の研究に統一を見るの端緒を開くあり、進歩したる國々には統計的調査の行はるるあ

りて人生地理に空前の精確を與ふるあり。

斯の如く地理學が幸運の下に漸次發展しつつありし際、世人も亦漸く探檢の妙味を感じ、有益なるを悟り、各國の地學協會の繁榮を來たし、地理學の効力も漸く知れ亘り、殊に先進國にありては地理學の講座は科學の淵源たる大學に設立せらるるを觀たり、蓋し地理學の發育に健全を期せんには之を高等學園に栽培して深くして固き根據を有せしむるに非ざれば成熟したる良好の果實を得ること難かるべし、而して高等教育に於ける地理學講座の開設と相俟ちて地理學の普及發達に資すべきは適當なる教科書並に地圖總覽の刊行なりとす。

ペッシェル(Oskar Peschel) (1826—1875)はドイツの地理學者、歴史家にして、ドレスデンに生れライプチヒに歿す「外國」(Ausland) (一八五四—七一)の發行者にして後ライプチヒ大學の教授となり、地理の歴史、土俗誌、等の著作に當りしが、最要の著書は(Neue probleme der Vergleichenden Erdkunde als Versuch einer Morphologie der Erdoberfläche) (一八七〇)にして「カルリッテル」の結末主義 (Ideologie) を破壊して陸地の形狀間に存する類似性の研究を以て地理學の目的とせんと試みたり。

エリゼルクリゥー(Jean Jacques Elisée Reclus)(1830—1905)はフランスの地理學者なり、ロッパ及びアメリカに旅行し殊に新グラナダに止まること數年なりき、「兩世界雜誌」(Revue des Deux Mondes)上に「世界巡遊」「南北戰爭」等を登載して漸く名を知られ又「ジオアンヌ案内記」(Guides Jeannes)の編纂に從事せしが、「シエラネバダ旅行記」(一八六二)、「地球」(La Terre)(一八六八—六九)を著作し、更に大作に着手せんとせし際、意外の事件は起りて謫流の刑に處せられしが(一八七一)、學者社會の請願ありて追放に減刑せられたり、流涙の身と成りてルガノ、ジュネブ、等に轉住せしが、「世界新地理」(Nouvelle géographie universelle)の大著作に着手し(一八七五)、大赦に逢ひて歸國し、二十年の星霜を積みて全部十九册の完了を見たり(一八九四)、此の外「河系の歴史」「山岳の歴史」(一八八〇)、「南アフリカ」(一九〇一)「中華」(一九〇二)「フランス地理の序」(一九〇五)並に遺稿「地と人」等あり、「世界新地理」の大成に近づきし頃(一八九二)、ブリュクセルの私立大學に於て比較地理の講座を擔任せんとして物議を生じ中止となりしも、其の後、(一八九四)同地の新大學設立の際入りて教授と成り終世、其の地位にありたり、浩瀚なる著作を順序好く流暢に書き下だし、單調に陷らず、虛飾に亘らず、毫も筆に疲勞の跡を現はさず、讀者の快感を誘致し、世人をして地理學の趣味を喚起せしめし効果には偉大なるものありて寫述的地理と地理學の普及に貢獻せしこと極めて顯著なりとす。

現時にありては地理學は成立を完了せしものと認むるを得、蓋しブァレニウスに依りて概要を指示され、フンボルト及びリッテルに依りて充實を施行せら

れたる設計は殆ど完結に達したればなり、地理學の領土は一時博物學の各科の間に分割せられしも、獨立の聲高く領域の回復統一を圖りし際には地理學は常規を逸し攻略的態度に出でて各方面に猛進を試み遂に百科學たらんとするの傾向を示せしとありき、然れども斯る情態は專門的知識の變遷上には往々觀る所にして敢へて異とし奇とするに足らず、されば當今の地理學者間に地理學の範圍を劃定し研究事項に制限を加へんと勸むるものあるは勤勞の節約、研究の分擔、等の理に叶ひて極めて適切なる論議と云ふべし、地理學と地質學との關係頗る密なるも、リヒトホーフェン(Richthofen)は自然地理より地質學專屬の地下の研究を省くべしと主張せしが如きは其の一例なり、然れども地理學上に於て研究すべき事項に斷然たる區劃を與へんとするは寧ろ言ふべくして行はれ難き空論たるの傾向なしとせず、地理學は實に幾多の科學に接觸し、其の間に於ける親疎の關係一ならず、之に恰當の境界を附與せんとす、難事中の難と云ふべきか。

斯の如く地理學の特立を範圍、又は事項に基づきて判定せんこと容易な

らず、而して研究の方法に依るを便とす即ち研究上の三原則に徴すれば直に判然たるに至らん。

第一を廣袤(Etendue)の原則とす、ドイツの地理學者ラッツェルの明示せし所に係りて地球の表面上に於ける現象を廣袤的に研究するにあり、植物學者が植物の形態、生理、分類、等を研究する際には勿論地理學に關係なきも、植物の分布、生存狀態、等を研究するに至りて植物地理と成り、地質學者は火山發生の機能に考慮を運らすも未だ地理學を研究せざるが、火山の分布並に其の理由を尋ぬるに及びて地理學に關係し、統計學者は各種の名數を結合して人口學的事項の調査を進捗せしむる際は本領を出でざるも、土地に關して人口の粗密を觀んとするに至りては地理學の領域に入りたりと知るべし、而して本原則の應用には頗る効果に富めるものありて植物の分布圖を作りて其の生存狀態を知るの一助と成り、火山の分布圖を作りて火山出現の理を悟り、人口の粗密を圖的に表示して人生發達の情況を案出するが如く、地圖の作成が地理學者に資するは極めて偉大なるものなりとす。

整理の原則

第二を整理(Coordination)の原則とす、リッテル及びヴィダル・ドラ・ブラーシュ(Vidal de la Blache)の重んずる所にして或現象の地理學的研究は地球表面の各處に起る同樣の現象に就きて比較研究を遂げたる後、所得の知識を整理整頓して該現象に關する通則を案出せんとするにあり、絶崖の風化、地方風の性質、河水の增減を研究するは地質學者、氣象學者、水利學者の專門に過ぎざるも、同樣の知識を各地に得たる後、風化、氣流、流勢の原則を推定せんと試みるときは地理學とは成るなり。

本末の原則

第三を本末(Causality)の原則とす、即ち或現象を研究するに當りては必ず其の原因に溯り、其の結果を探らざるべからず、斯の如くして地理學は始めて自然的若しくは人生的の科學に關係なき領域を有するに至るなり、斯の如くして地球の表面に關する研究は如何なる事項に關係するものなるを問はず、特殊の徽章を呈するに至るなり。

要するに近世地理學は自然、生物及び人生に關する現象に就きて地球の表面上の分布、原因及び相互的關係を研究するにあり、從て領域廣大にして數多の科學の領域に接觸して境界にも分明ならざるものあり、利害の係はるも實に茲に存す、地理學の特立は研究上の大綱に着眼すれば直に判明するも、地理學は材料の供給を他の科學に仰がざるを得ざるを以て、斯學の發展は彼等科學の進歩に隨伴するの實あるを認めざるべからず、然れども地理學が研究を遂げ好果を呈供して他の科學を裨益し、以て報ゆる所あるは蓋し尠少ならざるべし。

リヒトホーフェン

リヒトホーフェン(Ferdinand von Richthofen)(1833—1905)はシレジエンのカルルスルーヘ(Karlsruhe)に生れ、ボイン地質學院の自由贊助員(一八五六—六〇)として學界に現はれ、「フォラルルベルヒ」の前アルプ并にプレタッツ及びセントカシアンの寫述的地理」(一八六〇)は模範と稱せられ、合衆國に旅行を試み(一八六三)、プロイセン政府の命に依りて遼羅清國、日本に歴遊せし際、清國の內部を地理學的并に博物學的に調査せんと決心し有力なる後援の下に頑强に而も有効に企圖の實行を遂げ得たり(一八六八——七二)、歸國の後、清國より齎し來りたる材料の精査に身を委ね五ヶ年を經て始めて名著「支那」(China Ergebnisse eigener Reisen und darauf gegründeter Studien)の第一冊を公にしたり(一八七七)、續編は漸次に(一八八二、一八八三)刊行ありしも遂に大著述は完成に至らざりしが「附圖」(一八八五)は支那圖に對する革命と云ふも過言にあらざりき、ペッシェルの後を受

けて、イプチヒ大學の地理の講座に就くや精力を傾用して「探檢旅行家指導」(Führer für Forschungsreisende)即ち地相學書に探檢家教訓を添へたるが如き貴重の著作を與ふるに至り、一八八六)、遂にベルリン大學に赴きて著れ高きフンボルト及びリッテルの相續者と成りたり、一千八百七十三年以來地學協會(Gesellschaft für Erdkunde)の會頭と成り終世替はることなかりしが、官吏社會の信用厚く膠州灣事件(一八九八)に資せしこと頗る多く、海洋學研究所(Institut für Meereskunde)の設立(一八九九)に盡瘁し、「東アジアの造山論」を纏め(一九〇〇——一九〇三)たり、知識の深遠にして精確なるに比し多く讓る所なき人格の高崇にして親情に豐富なる彼は子弟以外に交友極めて懇しく外國の學會の如きも敬慕せざるものなかりき。

ラッツェル

ラッツェル(Friederik Ratzel)(1844—1901)はドイツの地理學者なり、カールスルーヘに生れ、藥劑師と成りしが、博物學を研究して新聞記者として各地に旅行し遂に地理學者たるに至れり、普佛戰爭(一八七〇——七一)の後、東ヨーロッパ、イタリア、合衆國、メキシコ、グーバ、等を訪ひ、歸國後ムニヘン大學の地理科教授に任ぜられ、リヒトホーフエンの後繼者としてライプチヒ大學に就職したり(一八八六)、著書に「人類地理」(Anthropogeographie)(一八八二——一八九二)、「國民誌」(Völkerkunde)(一八八五——一八八八)、「政治地理」Politische geographie (一八九七)、「地球と人生」(die Erde und das Leben)(一九〇一——一九〇二)、「海に就きて」(das Meer als quelle der Völkergrösse)(一九〇三)等あり。

キルヒホフ

キルヒホフ(Alfred Kirchhoff)(1838—1907)はドイツの地理學者なり、中等學校の教諭より進みてハレ大學の教授として地理の講座を擔任し(一八七三)、三十一年の後退きて名譽教授と成りたり(一九〇四)、普通教育に深き注意を拂ひし結果有名なる「地理教科書」(Schulgeographie)を公にせしが、殊にドイツ人の殖民教育に盡瘁したり、著書少なからざるが、地理汎論中の「植物及び動物の分布」(一八九九)、「人及び地」(一九〇一)、「ドイツ帝國の保護國」(一九〇二)、「ドイツ國の自然地理及び人生地理の研究」、「吾人の地球に關する知識中のヨーロッパ總論」等あり。

ラブラーシヒ

ブイダル ド ラ ブラーシ(Paul Vidal de La Blache)(1845—　)はフランスの地理學者なり、高等師範學校を出でて近東に遊び、論文二題を提出して文學博士と成り(一八七一)、高等師範學校の教官に任じ(一八七五)、パリー大學の教授に進みて(一八九九)地理の講座を擔當し、フランスに於ける地理學の普及發達に盡瘁して功あり、倫理政治科學士院に入りたり(一九〇六)、著書に「マルコポロ及び其の時代と旅行」、「地球」、「發見小史」、「地圖總覽」(一八九四)、等ありて殊に「フランス地理の研究」(一九〇三)は傑作として知らる。

地理學は一の科學として存立するに至りしが、研究の範圍頗る廣く調査事項が多岐に亘るに拘らず、各部は相互的に關聯し、一定の規準の下に統轄せられて一を爲すべきものなれば斯學の進歩に伴ひ、發展に添ふが爲に探査

講究の事項が複雜なるを認むるも亦地理學に精確なる定義を下だし明確なる區を設くること敢へて難しとせず。

地理學(Science Géographique)は現時に於ける地球の表面上に共存する靜止的又は活動的各種要素の調勢より起る狀態を多方面より觀察研究するを目的とする科學なり、されば地理學は其の研究事項頗る複雜を極むるに拘らず、要するに土地と人生との關係を科學的に講究するにあるを以て土地即ち吾人の活動場に關するものと人生即ち吾人の活動に係るものとに分つことを得るなり、甲者は地文學即ち自然地理(Géographie naturelle)と云ひて純然たる自然的事項を網羅せり、更に分かれて三部を爲す、其の數學地理(Géographie mathématique)は宇宙に於ける地球を論じ、地球の形狀、大さ、位置、運動、水陸の分布等を研究し併はせて地球の全部若しくは一部を表出するの方法(地圖學)を講究し、其の三界地理(Géographie physique)は自然地理の最要部にして地理學の基礎を爲せるが、氣界、水界及び陸界の三界を研究して大氣並に地形の原則を知らしめ、其の生物地理(Géographie biologique)は生物即ち植物及び動物の生存情態に係

はる事項を調査して有機的自然と無機的自然との關係を研究す、乙者は人文學即ち人生地理(Géographie humaine)にして吾人の活動に關する凡ての地理的事項を網羅せるが、分ちて三部と爲せば其の人類地理(Géographie anthropologique)は人生地理の根底にして人類の起源、多寡、特性、特技、等を調査し、吾人と地球との相互的關係を明にせんことを務め、其の經濟地理(Géographie économique)は採取、助成、加工、分配の各業を地理的に研究し、其の政治地理(Géographie politique)は社交の情態、部落の存在、國家の成立、法治の狀況、制度の發達、行政の實際、等を參照して地理學上より見たる吾人の政治的活動を講求す。

- 地理學
  - 自然地理(地文學)
    - 數學地理附地圖學
    - 三界地理
    - 生物地理
  - 人生地理(人文學)
    - 人類地理
    - 經濟地理
    - 政治地理

地理汎論
地理特論

而して研究的事項が汎く世界の全部に亘るときは地理汎論(Géographie générale)と成り、特殊の一地域に限らるゝときは地理特論(Géographie régionale)と成るなり、又地理學は理論と事實との相依り相助くるに依りて大成すべきものなれば理論に傾き事實に偏すべからざるは勿論なるも、或は事實を主として感想的の寫述地理(Géographie descriptive)と成り或は理論を旨とする理性的の解明地理(Géographie explicative)と成ることあり。

提要 地理汎論

人文學

地理汎論人文學は地理汎論の一部にして人生に關する事項を論究するもの即ち人生地理汎論(Géographie générale humaine)なり、土地に對する關係より見たる人類の研究にして地理的狀態、周圍の事情等と吾人との關係を考覈し、自然が如何なる影響を吾人に及ぼすものなりやを探査すると同時に、吾人が進歩し、發達するに從ひ、智力の活動に據りて天運の壓迫を脱せんと試みるのみならず、反りて人力を自然に加へて地球上に新生面を開き、其の形相に如何なる程度まで變改を施しつつあるかを知悉せんとするにあり。

斯の如き調査研究を實行するに當りて必要とする所の各種の材料に就

きては人類の起源、進化、等を人類の博物誌たる人類學(Anthropologie)に尋ね、殊に人類の各派、各群の起源、分布、移住、等を人種學(Ethnologie)に聽き、智力活動の物質的宣示を土俗學(Ethnographie)に問ひ、其の他、史前時代に於ける人類の生存狀態を知らしむる所の考古學(Archéologie)、有史以後に於ける人類の變遷、變化を詳にする所の歴史(Histoire)、各國各地に於ける住民の狀態、各種生業に係はる情況を忠實冷靜に告ぐる所の統計學(Statistique)、等に據らざるべからず、

第一編　人類地理

人類地理(Géographie anthropologique)は人類の地理的研究にして人類の起源、地位、進化、等を說き、人類の種別、多寡、分布、移住、等を明にし、現時に於ける文化の情態に鑑みて吾人の生存(existence)、社交、知識、技能、道義、信仰、等の狀況と自然的周圍の事情との相互的關係を詳にするを目的とす。

甲、人類の地位

人は萬物の靈なりとは古來傳唱する所なれども、其の意義漠として捕捉し難し、抑、萬物とは宇宙に存する物體の總稱なりや、靈とは優れて長たるに足れりと爲すにありや、萬物とは岩石、草木、禽獸の類を云ひて我が地球の表面に存在する物體を概稱するに過ぎざるや、將又日月星辰及び之に從屬する總べての物體をも包括せしむるにや、人とは廣義に依りて劣等の野蠻人乃至優級の開化民を合はせ稱するにや、若しくは卓絶拔群、文化の進みたるものを特稱するの狹意に依るべきにや、蓋し宇宙に存在する物體に就きて、引力(Gravitation)に基づける運行のみを認めんか、天體(Corps célestes)ありて星辰界(regne sidéral)を爲し、引力に加ふるに「エーテル」的動力(Etherodynamie)を以てするも物理的并に化學的の現象を認むるに限らば、鑛物(minéraux)を得て鑛物界(regne minéral)を作り、之を前者に合はせて無機領(Empire inorganique)と唱ふるなり、而して特殊の機構(organisme)を備へ周圍に於ける物質を吸收して自己の生存的

消耗を償ふの力ありとせんか、生物(Êtres vivants)現はれ、有機領(Empire organique)は劃せらる、副次的なるも自動的情態の有無に據らんか、植物(Végétaux)と動物(Animaux)との別を設くるに足らん、即ち植物界(régne végétal)と動物界(régne animal)とを得るに至るなり、而して人類に就きて身體機關の整備を認むるに止まらば二手直立的の高等動物なりと判定するの外なきも、吾人に許容するに改良進歩の根源たる積成力の存在を以てせんか、能力活動の程度顯然として明に、能力進化の情況整然として備はり、植物、動物の二界を設くると同樣に便宜的たるに相違なきも人類界(régne humain)として一界を特立せしむるに無理困難はなかるべしと信ずるなり。

物體
- 無機領
  - 星辰界　引力
  - 鑛物界　引力、變形變質力
- 有機領
  - 植物界　引力、變形變質力、生活力
  - 動物界　引力、變形變質力、生活力、自動力
  - 人類界　引力、變形變質力、生活力、自動力、積成力

抑、生物の生存と云ひ生活と稱するものは生物に具備せる各種機關の合成的機能にして動植物にありては此の機能の統合、此の作用の總和は種類に依りて定限せらるるも、人類に關しては機構に著しき變化なきに拘らず、能力には漸次の傳承を經て積成の實を擧げ、發生の始原より現時に至るまでに原人に發して開化の民に達せしが如き變遷進化を見たるなり。

動物學上に於ける人類の待遇に關する學說未だ定まらず、リンネ(Linnaeus)は哺乳類の一目、靈長類(Primates)の一亞目二手類(Bimanes)の單種智人(Homo sapiens)とし、キュビエー(Cuvier)は特に一目を設けて二手類を置きたるが、機關を主とし外觀より判するときは人類は頗る猴類に似たる所多く、殊に類人科(Anthropomorphes)に屬する「チンパンジー」(黑猩々)「ゴリラ」(大猩々)「オランウタン」(猩々)「テナガザル」(猿猴)に對する差異は至りて些少なりとす、實に人類は彼等に比し、前肢短くして手を爲し、後肢は純然たる足にして全蹠地に接し、行くに直立し殊に腦量に優りたる所あるに過ぎず、要するに人類と猴類との差異を博物學上より觀ずれば人類の爲に特に一目だも設くるに及ばずと爲すは

或は至當ならんか。

チンパンジー(Chimpanzee)「黑猩々」Simia troglodytes)はアフリカの西岸ギネア地方に棲む、體軀人に近く、前肢稍〻短く、黑毛全身を蔽ひ顏は黃色を呈す、攀樹に巧にして枝間を輕妙に飛行するも歩行には前肢の助けに依らざるを得ざるが如し、群生を好み食物を追ひて移棲す、樹上に屋根ある巢を營み怜悧にして能く人に馴る。

ゴリラ「大猩々」(Gorilla gina)はアフリカの西岸、赤道より南北十度乃至十五度の間に棲む、軀幹七尺に達し、前肢長からず、筋力に富めり、毛は黑褐色にして全身に普く顏面は黑色を呈す、牝牡又は親子にて暗黑の叢叢中、樹間又は孤立の絶崖上に居り、人家の附近に來ること稀なり。

オランウタン(Orang-outang)「猩々」(Pithecus satyrus)はスマトラ及びボルネオの森林中に棲む、故に森の人とは稱せらる、身長四尺內外にして前肢頗る長く脾脈を有せず、葉、實又は卵を好み樹枝の間を往來するも遲鈍にして地上を歩行する際は前肢の助けを必要とす、性溫良にして最も能く人に馴れ、喫煙し又は肉叉、小刀を使ひ車に就きて食事を爲し得るに至る。

テナガザル「猿猴」(Gibbon) (Hylobates)に約十種を算す、孰れも印度、馬來地方に棲む、身長三尺許ありて前肢甚だ長く、小脾脈を有し、後肢にて歩行することあるも、攀緣に巧にして樹枝の間に十米突の飛躍を爲すこと稀ならず、スマトラ產の「シアマン」(Siamang) (H. syndactylus)は最大にして身長一一五糎あり、インド產の「ラル」(H. lar)之に次げり。

然れども人類を其の精神的方面より觀察し、其の能力の活動に基づける各種の現象に就きて調査する所あらんか、人類を以て一界と爲すに足るの要素を發見し得べし、蓋し現存せる人類に就きて心理的研究を施すときは智力の發達一ならず、技能樣々にして階の上下の間には著しき懸隔ありて、最高の文明人と最低の野蠻人との間には別目は勿論、別綱を設き、別界を設くるに至る底の差異あるは明瞭なる事實とす、カートルファージ(Quatrefages)は道義(morale)及び信仰(religiosité)を以て吾人持有の性質なりとして鑛物、植物、動物の三界以外に人類界を起こして優越なる地位を與へんと試みられしが、道義、信仰は勿論人類の特有なるべきも尙ほ道理、社交、美妙等の如く吾人專有の能力なるべしと信ぜらるるものあり、然るに此等特性專能なるものはリンネの所謂「智人」(Homo sapiens)即ち智識技能が或程度以上に達したる人類一局部に限り始めて認許すべきものなるかを疑はしむ、現存の野蠻人に就きて推究するときは道理は利害損得に起り、信仰は恩惠恐怖に因みありて、道義は自衞の要求、美妙は快感の紀念に過ぎずと斷ずるに足るものあらん、而して

日日の食物を得るに汲々として小地域に齷齪するものと汽車汽船の便、電信電話の利を提げて世界を往來し、座して百貨の集散を支配するものとを比較し、赤裸々にして男女の雜居するを厭ふの念なきものと善美の粹に成れる禮裝を調へて交際場裡に立つものとを對照し、數を算して僅に四五に至るに過ぎざるものあり、微積の計算を遂げ幾何の溢奥を究めんとするものあり、喃々として小兒の如く少數の單音語に依りて低度の意想を傳ふるのみなるあり、豐富の言語を繰りて自在に意を達し、優秀なる美文に依りて高尚に思想を表出するあり、林中若しくは鄰間に點在して放縱自適、部落を組織せず恰も野獸野禽の如く生存するあり、憲法布かれ、教育の美、自治の妙を擧げ、軍政の嚴格、財務の安固、等を保障する百般の制度の備はるあり、斯の如く文野の間には顯著なる懸隔の存するありて猴類の優者と人類の劣者(原人)との間に於ける差異より遙に大なるものありと爲さざるを得ざるべし。

されば此の偉大なる懸隔を生出せしめたるものを何と爲す、能力の活動即ち活用の變遷進化を促したる積成力なりと思考せらるるなり、蓋し生物中には機關、機能の改良即ち活力的進化に依りて發達したるものあり、能力活動の改展即ち活用的進化に依りて發達したるものあり、甲者は植物及び動物に於て觀る所にして周圍の事情は機能を刺戟し機關の構造に變改を來たして變態進化を實現せしめし爲の其の結果として博物學上に於ける所謂種類變種を夥しく生産し、階の上下に驚くべき懸隔あるを致せり、乙者は人類に限り存する所にして人類が其の始の原人としては最高等の動物たるに過ぎざりしも、彼が固有特有する積成力に基づきて能力の活用に改良發展を施して進化の實を擧げたるが爲の其の結果として文化の上より觀たる所謂野蠻人と開化者との間に幾多の階級を出現せしめたり。

乙、人類の進化

人類の進化を叙するに當り、先づ動物としての進化即ち活力的進化に係はる事項の大要を述べ、次に積成力の効果即ち活用的進化に就きて記する所あらんとす。

活力的進化

活力的進化は一に變態說(Transformisme)と云ふ、生物學上の一學說にして適應(adaptation)の勢力の下に動物及び植物が機構を改造し、變態して新種を發生せしむるに至ると爲すにあり、從て現存の生物は悉く單一若しくは少數の原種より間斷なき遷移に基づき漸次の變化を發生したるものなりと爲すなり、而して此の變態說は進化の理(principe de l'évolutio)を生物に適用せしものにして其の由來甚だ古く、ラマルク說(lamarckisme)及びダーキン說(darwinisme)の如きは特殊の變態論に過ぎざるなり、蓋自然界に於ける秩序と連續とに多少意を注ぎしものが、生存物の變遷と連鎖との情況に就きて考慮を運らすは理の當然にして上古又は中古にありても思想の玆に赴きしは敢へて珍しからざりしも或は偶然の出來事と見遁がし、或は造花の妙に歸し又は不可思議、不可解と打捨てられたり、然るに近世に至り、リンネ(Linnaeus)(一七〇七——一七七八)は理想的成族說(Parenté idéale)を唱へて種類の固定確立を主張し、第十八世期に於けるドマイイー(de Maillet)及びロビネー(Robinet)の如く、近年に於けるアガシス(Louis Agassiz)及びガードリー(Albert Gaudry)の如く變異(mutabilité)傳成(descendance)を認むることなく、現存せる幾多の種類は漸繁的に上昇せる階級に據れりと爲せり、然るにデカルト(René Descartes)(1595—1650)は周圍の事情が生物の個體に影響を及ぼすべきものなるを觀破して事實的成族說(Parenté réelle)即ち傳成說を創意せしが、ビュフォン(Leclerc de Buffon)(1707—1788)は之を確實に唱へて氣候、食物、等は獸類の變態上に關係ありと論じて自然淘汰を髣髴かしたりき。

リンネ(Linnaeus)(1707—1778)はスエリゲの醫者にして博物學者なり、夙に花卉に趣味深く先輩の保護の下にユプサル大學の植物講義を聽き、博物學者アルテディと親交を結び始めて「ホルチウスユプランダカス」(Hortus Upsaliensis)に有名なる植物分類法を記載し、ラポニアを探檢し、オランダに赴きて醫學博士と成り、益友の幇助の下に「自然系統」「植物原理」「植物文庫」「ラポニア植物」等を著したる後(一七三六——一七三八)、フランスを經て歸國し、鑛山學校教官、海軍々令部の醫官、ユプサル大學教授等に歷任して名聲內外に普れかりき、著書數しく枚擧に遑あらず。

ビュフォン(Jean Louis Leclerc Comte de Buffon)(1707—1788)はフランスの博物學者にして有名の文章家なり、理科學士院に入り(一八三九)王園長と成り、十ヶ年を經て始めて博物史の三卷を公にし爾來終世渝ることなく同書(三十六冊)の著作に從事したり、科學者

たるの資には多少缺くる所ありしも新説を唱へ、科學の進歩、普及に盡瘁し奏功に偉大なるありて動物地理學の創建者、進化論の先驅者、地質學の案内者たりき、著書頗る多く就中「地球原理」、「人類誌」、「胎生動物」、「自然の時代」、等最も賞賛せらる。

近世變態説

近世變態説(Transformisme moderne)の創唱者たるラマルク(Monet de Lamarck)(1744—1829)は周圍の事情が動物の生存に影響する次第を述べ、宇宙に對する機構(Organisme)の反應も亦變化の因を爲せりと説き、機關の良否と用不用との關係を明にして機關は機能を作爲せざるも機能は機關を改善すと提言し、既得に係る新性特質の遺傳を認めて用不用の効力及び既得性の遺傳に關する二大原則を創建したるが(一八〇九)、ゼオフロワセンチレール(Etienne Geoffroy Saint-Hilaire)(1772—1844)は組織の統一を破ることなく、周圍の事情は標式に變改(mutabilité des types)を來たすと主張して大に非變態主義のキュヴィエー(Georges Cuvier)(1769—1832)と論爭せしも、根據薄弱にして材料に乏しかりしが爲め説破することは能はざりき(一八三〇)。

ラマルク

ラマルク著して學士院に入れ(一七七八)、「植物總覽」(Encyclopedie botanique)及び「屬種圖説」(Illustration des genres)(一七八三——一八一七)を公にして世人の崇敬する所と成りしが、之より先「ミュゼオム」(パリーにある博物學の高等研究所なり)に入りて「白血動物」の講座を擔當し(一七九三)、「動物論考」(Philosophie zoologique)を著して(一八〇九)進化論の大要を説きたる後、「無脊髓動物史」(histoire des animaux sans vertèbres)を世に公にして(一八一五—二二)自然發生(Génération spontanée)、適應及び遺傳に基づける屬種の寄續(descendance)等を説きて進化論の根底を指示し、其の他、動物地理、植物自然分類等に資せしこと多かりき。

ゼオフロワセンチレール

ゼオフロワセンチレール(Etienne Geoffroy Saint-Hilaire)(1772—1844)はフランスの博物學者なり、「ミュゼオム」の教授と成り、動物園を作り、標本の蒐集に盡力し、ボナパルトに隨行してエジプトに赴き(一七九八——一八〇一)、歸國の後、學士院に入り(一八〇七)、「ソルボンヌ」(パリー大學)の教授に轉じ(一八〇九)、「ミュゼオム」の講座を兼擔せしが失明(一八四〇)して職を辭したり、著書甚だ多く、哺乳獸、比較解剖學等に關せるが、殊に自然哲學に重を置き、大膽なる學説を提出して進化論を主唱せし際、友人キュヴィエーの反對ありて科學史上に職を遺せし有名なる論爭を惹起したりき。

キュヴィエー

キュヴィエー(Georges Cuvier)はフランスの博物學者なり、頭腦明晰强記にして學を好み數學、哲學、行政法等の研究に勵みしが、殊に博物學に熱心なりき、デリシー(d' Hericy)伯爵家に教師たりし際、フェカン(Fecamp)港の濱に棲みて水産動物の研究に從事し、一七八八——九四)報文又は論文をパリー博物學會に寄せて先輩の知る所と成り、就中ゼオフロワセンチレールの推擧に與りて「ミュゼオム」の比較解剖學の講座を擔當し「コ

レージョドフランス」(Collége de France)(パリーにある高等學術研究機關なり)に入り(一七九七)「ミゥゼオム」の教授と成り(一八〇二)、理科學士院の主書を兼れ、爾來數代の主權者より優遇を受け、視學官、參事院議官、派宗局長、大學參事等に任じ、大士動を授けられ、男爵に叙せられたり、著書極めて多く、比較解剖學講義(一八〇〇——一八〇五)、化石の研究(一八二一——二四)「構造に據れる動物の分布」(一八一六——二九)、等ありて悉く枚擧するに遑あらざるが、解剖學、生理學、寫述的動物學及び化石學等多方面に亘りて而も一の可ならざるものなく、殊に顯著なるは形狀及び機關の相互的連鎖に係はる原則を創立して近世科學に對する革新期を劃したるにあるが、ラマルク及びゼオフロワ、センチレールが開始せし變態論 Transformisme)に反對して知友との論爭は當時の學界を大に賑したりき。

ラマルクが傳成の理(Théorie de la descendance)を創唱(一八〇九)せし以來五十年の星霜を經てダーキン(Charles Darwin)(1809—1882)及びラリス(Alfred Wallace) 18 22—　)の新說現はれ、原理の確立を見るに至りたるが(一八五九)、變態進化を促がすの理由に至りては一致するを得ざりき(一八五九)。

イギリスの經濟學者マルサス(Thomas Malthus)(1766—1831)の原則(一定の地域に於ては人間の數は幾何級數的に增加するも生存の材料は算術級數的に增加するに過ぎざれば人間の一部は生產以前に死亡せざるべからず)に基づきてダーキンは生存競爭(Struggle for life)の起るを說き、優勝劣敗して自然淘汰(Natural selection)は行はれ、種類は變異し、新種は發生し、漸を追ひて原種より遠かり、進化の實現はれ、遺傳に依りて既得の性質、既成の種類は保持せらるべしと論じたり、從て各個體は最舊時代以來經過したる漸變狀態を潛伏的に保持し居るべき筈なるに隔世遺傳(Atavism)の出現は之を證し得て妙なるが、最後に收め得たる變態は最有力なるを以て子孫には近新者に似るもの多しとす。

ダーキン(Charle-Robert Darwin)(1809—1882)は學位を得たる年(一八三一)フィンロイ大佐の遠征隊に加はりて南アメリカ及び太平洋の島嶼を五ヶ年間歷遊して豐富なる觀察及び資料を齎し歸りしが、先づ「ビーグル」號征行動物學(Zoology of the Voyage of the Beagle)(一八四〇——四三)「キリペヂヤ」(Cirripedae)(一八五一)を著したる後、祖父エラスムス、ダーキン(Erasme Darwin)の意を繼ぎて一八五九年を以て有名なる「自然淘汰に因れる屬種の起源」(On the origin of species by Means of Natural selection)を公にして新なる基礎の上に立てる進化主義を發表し、爾來幾多の論文、著作に據りて自己の提言を末期(一八八二)に至るまで忠實に辨護したり、「ダーキニスム」(Darwinisme 即ち進化論は當初に於て

頗る物議を招致せしも漸次に贊成者を得て生物學上の新時期を劃するに至れり。

ヲリス(Arfred Russel Wallace (1822—　))はイギリスの旅行家にして博物學者なり、南アメリカに旅行(一八四八——五二)を試みたる後、再び出でてマライ群島に赴き、永年の實驗に基づきて「自然淘汰資料」(Contribution to the theory of natural selection)(一八七〇)を著し「動物地理」(On the geographical distribution of animals)(一八七六)を公にして海陸の變遷と屬種の系統との關係を說き、「ダーヰニスム」(Darwinisme)(一八九一)に依りて自說とダーヰン說との合否を明にせしが、此の外に旅行、經濟、衛生、等に關する著作少なからず。

カーペンター(W. B. Carpenter)(1813—1885)の所謂祖先的紀念(mémoire ancestrale)たる遺傳は胚胎發育の狀態を明にし、**ミュルレル**(Fritz Muller)(1821—1897)はゼオフロワセンチレール及びセール(A. Sarres)(1786—1868)の原則を敷演して個體發生(Ontogénèse)は短期の系譜發生(Phylogénèse)なりとの生成律(loi biogénique)を創定し、而して胚胎學、比較解剖學、古生物學、等に基づける生物の分類は其の系譜樹の復興に外ならざるべしと推斷せらる。

セール(Antoine Serres)(1786—1868)はフランスの解剖學者及び發生學者なり、中央教室の解剖長(一八一四)、と成り理科學士院に入り(一八二二)、「ミュゼオム」の教授(一八三九)に進み、主として腦脊髓の生理解剖を研究せしが、著書に「骨生の原則」(一八一五)、有骨髓動物の腦の比較解剖」(一八二四——二六)、「機構の成形及び破形(一八三三)、「機構發生の原理」(一八四二)、「胚胎作用」、「動物成生論」、「畸形發生論」(一八六〇)、等あり。

カーペンター(William-Benjamin Carpenter)(1813—1885)はイギリスの生理學者にして科學の著作家たり、「通俗科學全書」、「人身生理」、「比較生理」、「生理通論」、「精神生理」、「飲酒の利害」、等を公にし、「解剖生理大辭書」に執筆し、「ライトニング」號及び「ナレンジャー」號の遠征に加はりたり。

ミュルレル(Fritz Muller)(1821—1897)はドイツの博物學者なり、始め醫術を學びしが、ブラジルに移住して農業に從事し、デステロ(ブラジルの一市)に於て數學を教授し、水產動物殊に甲殼類を研究し、ダーヰン說の普及に盡力し、個體發生(Ontogénie)は當該個體所屬の種に關する系譜發生(Phylogénie)の短期に於ける迅速なる繰返なりと唱へ、又昆蟲を研究したり。

ハクスリー(Thomas-Henri Huxley)(1825—1895)はイギリスの生理學者なり、太平、印度兩洋の遠征(一八四六——五〇)に加はり、歸國の後、王國鑛山學校の博物教授と成り、王立大

「ダーヰニスム」が世に出づるや論理の單簡なる、記述の巧妙なる、進化論の旺盛を來たし、イギリスのヘクスリー(Huxley)(1825—1895)、ドイツのヘッケル(Haeckel)(1834—　)、フランスのジアール(A. Giard)を始めとし、幾多の博物學者は翕然としてダーヰンに師事するに至れり。

學に於ては比較生理解剖の講座を擔當し、ダーヰンの進化論に贊成し、高等動物を研究し、殊に「自然界に於ける人類」(一八九一)を以て有名なりき、其の他、博物學に關する著書多し。

ヘッケル

ヘッケル(Ernest-Henri Haeckel)(1834—)はドイツの生物學者なり、イェナ大學の教授と成り(一八六五)、動物學の講座に就きて令名あり、イギリスに赴きてダーヰンを訪ひ(一八六六)大に進化論を贊し、下等動物を研究するが爲に北海或は紅海に旅行し(一八六六——一八七三)、セイワン方面に遊びたり(一八八一——一八八二)、偶然的發生に依れる「モネール」(monères)機構なき單純なる生體を以て始原的生體と爲し、下等生體(Protistes)を設けて進化の基礎と認めたり、然れども後世が多とする所は高等生物の形體及び發生に關する深き研究なりとす、著書頗る多く「機構形體論」(一八六六、五)、「モネール」及び「プロチスト」の研究(一八七〇)、「人類の進化」(一八七七)、「進化の證」(一八七九)、等あり。

然れども研究の歩武を進むるに從ひ論據に薄弱なる所あるを覺りアメリカのコープ(Edward Cope)(1840—1897)の下に新ラマルク論者(Néo-lamarckiens)現はれ、ドイツのワイズマン(Weismann)(1834—)と共に新ダーヰン論者(Neo-darwiniens)起り、甲者は淘汰は變種を作るの力なく、完成の後を支持し得るに過ぎずして、種屬の變異は全然之を活成(Kinetogénèse)に歸せざるべからずと爲し

ワイズマン

コープ

乙者は既成の變異が遺傳的ならずしてラマルク作用は新種の生成を促すこと能はずと斷じ、ヴォグト(K. Vogt)(1817—1898)は(Convergence)に係る研究の結果生物學上の大原則に缺陷ありと斷じ、ルダンテック(Le Dantec)はラマルク主義はダーヰン主義中に包容せらるる所以を說きて兩者の調和を圖りたり。

ワイズマン(August Weismann)(1834—)はドイツの生物學者なり、醫學を捨てて博物學に身を委れ、數年間を旅行に費したる後、フライブルグ大學の助教(privat docent)(一八六三)を經て同校教授(一八六七)に任ぜられたり、新ダーヰン論者(neo—darwinisme)の鼻祖としてワイズマン主義(Weismanisme)を主張し遺傳及び自然淘汰に關する論文に依りて遺傳原形質論を說き、其の他「胚種遺傳論」(Das Keimplasma, eine Theorie der Vererbung)「苗裔論」(Vortrage über Descendenztheorie)等あるも、理論複雜にして玄妙に傾き、實驗を適處に適用せざるを非難するものあり。

コープ(Edward Drinker Cope)(1840—1897)はアメリカの古生物學者にして博物學者を兼ぬ、化石學に貢獻せし所少なからざりしも、生物學の原理を說きて、アメリカの新ラマルク主義の領袖と仰がるるに至れり、活成(Kinétogénèse)に依りて新種の發生を說き合成(diplogénèse)に依りて遺傳を說き、退成(catagénèse)及び盛成(bathmisme)を設けて機局の振否(balancement organique)を明にせんと試みたるが知能の造化力(Archestéisme)に置きたる結果は「生活は組織に先んず」と云ふに陷りしも、彼れの勢苦には偉大なるものあり

て「有機的進化の要素」(the Primary Factors of organic evolution)(一八九六)中に其の概要を記述したり。

ブォグド(Karl Vogt)(1817—1898)はドイツの博物學者にして第十九世期風指の生物學者なり、生地ギーセン大學の教授と成りしも、政爭の結果鄉國を去りてジュネブに赴き、同地の大學に於て比較解剖學を擔當したり、ダーヰン黨與の隨一にして熱心に進化論の普及に盡瘁して著作も少なからざりしが、過渡的假說を以て獨斷的學理と爲すに反對せる獨立獨步の學者なりき。

要するに現時に於ける進化論は機構(Organisme)を以て二勢力の影響を受くるものと認めんとす、其の一は遺傳(hérédité)にして特質特性を常態に維持し、之を靜止の位置に固定せしめんとせり、其の二は適應(adaptation)にして周圍に於ける事情との關係上より既存の性質に異動を促がし變化を發生せしめんとせり、而して此等の異動變化に關する素因(facteurs)には基礎的(primaires)にして直接するもの(光明、溫熱、營養等の如き宇宙的若しくは生物的事情)及び間接なるもの(宇宙的若しくは生物的事情に對する反應)あり、又副次的(secondaires)なるものに遺傳(hérédité)、自然淘汰(sélection naturelle)、兩性淘汰(sélection sexuelle)、生理淘汰(Sélection physiologique)、分絕(Ségrégation)、雜種性(hybridité)、嫌厭性(amixie)等あり、然れども此等の要素に就きて如何なる注意を拂ひて觀察若しくは實驗を爲したりとするも種類の自然的變態を事實の上に於て未だ嘗て捕捉したることなきなり、ドラージュ(Delage)の言へる如く吾人は種類としての價値ある新態を催成し得るのみならず、之を永久に保持するを得るも、吾人は未だ嘗て吾人の干涉なくして自保持し得る力ある新變種の成生を得若しくは觀察したることなく、純然たる事實としては種類に依りて種類の成生せし次第を證定したることなし、故に變態說は如何に正しく、理に叶ひて科學的なるも、純粹なる假說たるに相違なく、彼れの哲學的價値はペリエー(Ed. Perrier)の提言せし如く、種類の造化なく、生命は生命のみにて生成せらるるを以て現存の生物は過去の地質時代に於ける他の異りたる生物より傳成せられたるものと認めざるべからず。

斯の如く進化の細微なる狀況に就きては未だ研究の及ばざる所尠少ならざるも大體に於ては進化は確認せらるるに至れり、而して機構の進化が或程度に達したる後は變態は各方面に向ひて同時に行はれたるが故に高等

て「有機的進化の要素」(the Primary Factors of organic evolution)(一八九六)中に其の概要を記述したり。

ブォグド(Karl Vogt)(1817—1895)はドイツの博物學者にして第十九世期屈指の生物學者なり、生地ギーセン大學の教授と成りしも、政爭の結果鄉國を去りてジュネーブに赴き、同地の大學に於て比較解剖學を擔當したり、ダーウィン黨興の隨一にして熱心に進化論の普及に盡瘁して著作も少なからざりしが、過渡的假說を以て獨斷的學理と爲すに反對せる獨立獨步の學者なりき。

要するに現時に於ける進化論は機構(Organisme)を以て二勢力の影響を受くるものと認めんとす、其の一は遺傳(hérédité)にして特質特性を常態に維持し、之を靜止の位置に固定せしめんとせり、其の二は適應(adaptation)にして周圍に於ける事情との關係上より既存の性質に異動を促がし變化を發生せしめんとせり、而して此等の異動變化に關する素因(facteurs)には基礎的(primaires)にして直接するもの(光明、溫熱、營養、等の如き宇宙的若しくは生物的事情)及び間接なるもの(宇宙的若しくは生物的事情に對する反應)あり、又副次的(secondaire)なるものに遺傳(hérédité)、自然淘汰(selection naturelle)、兩性淘汰(selection sexuelle)、生理淘汰(Sélection physiologique)、分絕(Ségrégation)、雜種性(hybridité)、嫌厭性(amixie)等あり、然れども此等の要素に就きて如何なる注意を拂ひて觀察若しくは實驗を爲したりとするも種類の自然的變態を事實の上に於て未だ嘗て捕捉したることなきなり、ドラージュ(Delage)の言へる如く吾人は種類としての價値ある新態を催成し得るのみならず、之を永久に保持するを得るも、吾人は未だ嘗て吾人の干涉なくして自保持し得る力ある新變種の成生を得若しくは觀察したることなく、純然たる事實としては種類に依りて種類の成生せし次第を證定したることなし、故に變態說は如何に正しく、理に叶ひて科學的なるも、純粹なる假說たるに相違なく、彼れの哲學的價値はペリエー(Ed. Perrier)の提言せし如く、種類の造化なく、生命は生命のみにて生成せらるるを以て現存の生物は過去の地質時代に於ける他の異りたる生物より傳成せられたるものと認めざるべからず。

斯の如く進化の細微なる狀況に就きては未だ研究の及ばざる所尠少ならざるも大體に於ては進化は確認せらるるに至れり、而して機構の進化が或程度に達したる後は變態は各方面に向ひて同時に行はれたるが故に高等

生物に關する變體の發生は案外に速にして、現存の階級には直系的若しくは旁系的なるありて某高等形態に達する系譜的發達に直接せざる幾多の階級の存するあるなり。

人類の系譜的發達に就きて考ふるに原生動物(Protozoa)より環蟲類(Annelides)に達する際にも海綿動物(Spongida)腔腸動物(Coelenterata)扁蟲類(Plathelminthes)蠕形動物等に關係なく、直進して脊椎動物と成るや、節足動物(Arthropoda)軟體動物(Mollusca)棘皮動物(Echinodermata)尾索動物(Urochroda)等を經過せず、陸棲動物の元祖たる兩棲類(Amphibia)は下等の魚類より出でしものなれば硬骨類に携らざるのみならず、爬蟲類(Reptila)鳥類(Aves)を措きて哺乳類(Mammalia)に入りしも齧齒類(Rodentia)食肉類(Carnivora)食蟲類(Insectivora)等の發生を傍觀しつつ原人に到着したるものにして或は現在の猴類(Pithecei)にも緣故の深からざるやに思はるるなり、蓋し原人は局部的機關の發展に着目せずして進化的能力の下に活用さるべき形態を具備せんとして進化したる結果なればなり。

活用的進化　活力的進化の優境に著達したる結果としての原人(Homo primigenius)より漸次に變遷して智人(Homo sapiens)に到れる進化の情況を研究せんには先づ原人其の者の實體實情を想定せざるべからず、然るに原人の形貌に關しては確乎たる證左の存するなきは遺憾に堪えざるも、亦史前時代に於ける人類の遺骨、遺物等に依りて推考し得る所に從ひ、現代に於ける下層種族の形態を參照する所あらば原人と智人との間に存する形貌上の差異には顯著なるものなきを了知するに難からざるべし、抑原人が此の世に現はるるや直立、跛行、上に秀頭を戴き、手に五指を備へ、裸體にして雜食的齒狀 2. 1. 2. 3 / 2. 1. 2. 3 を呈すれども、爪、牙、角等は缺如し、筋力弱く、周圍の事情に對し頗る悲觀するに足るものありき、誰か知らん斯る薄弱なる形體の中に自世界的(Cosmopolite)萬能的なる長所の伏在せんとは、實に原人は進化上の成功者なりしなり、直立の姿勢は威嚴を保ち周圍を展望するに適し、發達せる上肢は取捨攻防に便し、裸體は被覆の必要を感せしめしも、反りて寒暑風雨を凌ぎ易く、雜食に堪ゆるは生存上に利益多しとす、而して此の體形を智人のソレに比するに頭部に多少の變化を覺ゆるのみにして顏面に突鼻、直顎、前視、廣

額現はれ、外耳變小して頸部は臺形を完成し、頭骨の改善を自由ならしめ以て腦量に幾分かの增加を來たしたるに過ぎざるが如し、然るに機能は機關と相俟ちて發達すべきものなりとすれば機關に顯著なる變化の現はれざる以上は機能に偉大なる發展を認むべき筈なく、從て動物的活力に多少の增加ありたりとするも到底原人と智人との間に存する差異を解明するに足らざるべし。

拔群の智惠者

飜りて動物界を展望するに智能が必しも形態の完否に伴ひ、階級の上下に據るものに非ざるの事實を認めん、所謂拔群の智惠者のあるを忘るべからず、猴類は暫く措きて問はざるも、食肉類の犬、長鼻類の象、鳥類の山雀、爬蟲類の「コブラ」(Cobra di capello)等が該當せる群類に對して案外の智惠者たるは世人の熟知する所にして今更に喋々するを要せざれども、吾人の祖先たる原人も案外の智惠者として出現の當時既に他の動物に比し冠絕せし所あり、しは勿論なるべし、然れども動物は其本能に依りて生存し、種類相應の發展を爲すに止まれり、猿智惠、犬智惠、象智惠、等の存するは明なれども、此等動物の智惠に進化の蹟を認むることなし、或は獵犬などの惠智に進化ありと唱ふるものあらんも、飼育法の進化に伴ふ結果に外ならざるの次第を辨へざるに座するのみ、要するに動物の本能には種類に依りて優劣あるも亦種類相應の定限あるは明なりとす、人類に於けるも動物として定限ある本能を備ふるに過ぎざるが、案外の智惠者たる原人は生れながらに發火の妙用水の道、被服棲舍の便、弓矢刀劍の利を知り、吾人は彼等の遺法を默守するのみなるか、惟ふに人類の能力は進化的本能(Instinct involutif)にして漸次に振張し定限の存せざるを以て特色特徵とは爲すなり、吾人は斯る進化的本能を有するが故に現實を達觀して理想を建設し、實在的劣惡を捨てて理想的優良を取らんとは勉むるなり、從て得れば從て望み、所謂隴を得て蜀を望むは吾人の本性にして吾人の發展進步の原由は實に玆に存す、吾人には幸にも道理、自由、羞恥、德想、美想、等のあるあり、吾人は社交、摸倣、等の特質を有し、談話、覆身、搆棲、等の特技を有せり、然れども吾人發生の最初期に當りては人類界に於ける原人の能力活用は恰も動物界に於ける原生動物の活力の如き狀態に

進化的本能

ありて高尚なる特殊性情の効力は極めて微弱なりしなり、而して彼の特質特技の如きは或は吾人の特有專有ならざるやを疑はしむるに足るものあり、蓋し社交即ち共同生存は獸類、鳥類、魚類、等の如き進化の度の稍、高きものに之を見るのみならず、昆蟲類の蟻、蜂、等に著しく發達せるあり、摸倣に巧みなるものは身振的に猿あり、發聲的に鸚鵡あり、鳴禽類に音聲の妙美なるもの少なからずして鳥には能く五情を表出し得るやの感ありて言語の端緒を爲せるかを疑はしむ、被覆は自然的に行はれ、冬衣夏服は羽毛の細粗、色彩に依れるに過ぎざるも、棲處の構作には啻に獸類に穴居、鳥類に營巢、蟲類に成繭を觀るのみならず「トゲウヲ」(Gasterosteus)は藻俵(水草にて作れる俵狀の巣)を作り、白蟻(Termes)は高塔を建て、海狸(Castor fiber)の二階家を造り、「プレリードグ」(Cynomys)の村落を構ふるが如きは殊に著しとす。

是に由て之を觀れば人類と動物との別を立てんには本能の進化、能力活用の發展に據るを可とする次第には明なる者ありて存す、而して斯る進化發展の實を擧げんには積成力(Force accumulatrice)に據れりと爲すの至當なるを

信ず、茲に所謂積成力なるものは吾人の本能の進化、能力活用の發展に資すべきものを細大となく漸次に蓄積して一大團を構成せんとする力を云ふなり、斯して積成したる資料は適當の方法に依りて應用せられ、個人若しくは集團の進歩を誘ふと同時に部族、種族、國民、社會の發展を促し、人類をして文化の恩惠に浴せしめんと勤むるなり、抑、積成の方法たるや吾人及び自然を各方面より觀察し、吾人と自然との相互的關係に鑑みて目下の情態を詳にし、之に基づきて優良なりと認めらるべき新情態を理想的に構成し、其の實現に資すべき材料を集蒐するにあり、而して各自の案出發見に係る材料手段に就きては遺傳、相傳に依りて子孫、緣故者に直傳せらるるものあれども、多くは口演、文書、傳授、見習、等に依りて集團又は社會に呈供せらるるを常とせり、之を受傾したる社會は雙立の原則(Principe du dualisme)(積極、消極、保守、進移、善惡、利害)に鑑み、輿論に從ひ、取捨を決して人爲的に淘汰(sélection humaine)を施し、保管(優勝)若しくは廢滅(劣敗)を宣して制裁(sanction)を加へ、適應を察し以て進運(évolution progressive)を扶翼せんとはするなり、斯の如くして社會集團は傳來の舊資に添

系譜的發生

個人的發生

ふるに新に獲得したる材料を以てし、時代に繼ぐに時代を以てして或は進化し或は墮落(rugression)し、新陳代謝の結果、所謂系譜的發生(Phylogénèse)を遂げて原人時代に比し遙に超越する所ある現代を實在せしむるに至りたり。

積成したる資料を適當に應用して奏功の實を擧ぐると同時に蓄積の事業を永續せしめんには、摸倣の性に基づき敎育の力に據りて、集團員、社會員としての各自に就きて性格資質の改善を圖り所謂個人的發生(Ontogénèse)に留意せずんばあるべからず。

茲に單簡なる代數式 m_a+n_S を用ひて積成の効力が個人に及ぼす影響に大なるものの存する所以を想定せんと試みたり、式中の a は原人の價値を表し、m は賢愚率にして正數又は負數たることありて m_a は某個人の價値を示し、S は積成の高分量にして集團若しくは社會の優劣に從ひて大に消長するものなりと知るべし、n は活用率と云ひて正號又は負號を有し得るも絶對的價格は一より小なる數即ち眞分數と爲すを適當とす、されば茲に相應の優者ありて原人に勝れたること十倍なりと假定し、且積成したる事實の半を利用し得るとせんか前式は $10a+\frac{1}{2}S$ と成るなり、而して其の集團の價値を表はさんには $\Sigma(ma+nS)$ を用ひ、Σ 即ち「シグマ」は總和の意にして某集團を組成せる若干人の各々に就きて $ma+nS$ の持價を算出したる後之を合計すれば該集團の勢力は想定せらるるなり。

前記の二式は全然無意味のものにあらざるべきも亦頗る兒戯的なる所ありて正確の點より見れば毫も價値なきものなること勿論なり、唯概算の法に據りて要領を概括するの一助ともならんかと信じ、茲には掲げたるなり。

因に記さんに、世には英傑、又は大家と稱揚せらるるものの出現するありて、或は政治、攻略、宗敎、等に就きて大に經綸の功を奏し、或は學術、文藝、技能、等に據りて名聲を天下に轟したり、活用的進化より見るときは彼等は實に異常(anormalité)の人物として度外視すべきものなりや將又相應の事由の存するありて發生を見るに至れるやを明にせざるべからず、彼等英傑大家に就きて性格、事蹟、等を研究せんか、時代の要求に促されしあり、蓄積の利用に成功せしあり、又拔群の智惠者、案外の器用者あり、此等數者を兼備せるあり、均しく突發と見へ、偶然の發生に係れるが如き感あるも、自然的若しくは人爲的の事情の下に刺劇を受け、幸運の下に發展を遂げたるものと認むるを至當とすべし。

丙、人類の起源

人類の起源に就きては先づ人類が此の世に出現せし時期を究め、次いで人類が發生したる地を尋ねんとす。

人類の發生期　人類が此の世に出現せしは多くの他の生物に比し後れて甚だ遲かりしは事實なるも、其の出現期の新しからざるも亦事實なりと爲さざるべからず、口碑又は歴史の傳ふる所に依れば人類の古さに關する世期の數は著しからずして、ユダヤ(如德亞)人は三十世期を數へ、漢族は五十世期を算し、エジプト(迷思耳)人は六十五乃至七十世期を以て世界の最舊民たるを誇るも、之を地質學上の一時代に比するときは些時なり少時なりと云はざるを得ざるべし、されば年代學より見たる人類の古さ即ち人類の有史的古さは七千年を超過せざるなり。

有史人類

然り而して吾人の出現が有史以前にありしことは洞察するに難からざりしも、暗黑なる密雲の蔽ふ所と成りて之を窺知するものなく之を探査するものなくして西紀第十九世期に及びしが、狩獵、建築、生業、技術、等の遺物は有史以前より人類の生存せし次第を告知するに至れり。

史前人類

上古の人は原人が可憐なる生活を營みしものなるを認め、ローマの詩人ルクレチウス(Lucretius)の如きは彼等を以て身を被ふに獸皮もなく森林に棲み、山間に穴居せりと爲し、又住域の邊境には牛角を以て猛獸を衝き、欠石を以て之を殺せる原生的の蠻人住めりと想ひしが、ガルバ帝の代にカンクブリオの某湖より石斧を發見せしことありき、ギリシア人は田園の中より石斧を得て雷石(Ceraunics)と名づけたり、爾來迷信は迷信を產み、神話は神話を作りたるも遂に雷石の起源には定論あるに至り『之を疑ひて新說を唱ふるものは狂氣の限り』と第十七世期の人も嘲りたり、然れども第十六世期の末にイタリア人にメルカチ(Mercati)と云ふものありて人類最舊の武器なりと唱へしが、此の種の器物を以て史前人の手に成れる武器なり、又物なりと斷然主張して世の妄想を破らんとせしはジュッシュー(de Jussieu)(一七二三)にして當時のアメリカ土人は鐵器を作るの術を知らざりしが爲の雷石同樣の石器

原人

ジュッシュー

を使用せりと告げ『雷石の起源及び用途』と題せる論文中に於てヨーロッパの往時の住民はアメリカの土人と同程度の文化にありしものにて各種の雷石は彼等の及物若しくは武器なりと云ふを憚らざりしに拘らず、ジュシューの卓見並にマウデル(Mahudel)(一七〇三)及びゴグー(Goguet)(一七五八)の同樣の説も當時の學者間に信ずるものを發見し得ざりき、然れども世は漸進してリンネ(Linnaeus)は人類を動物中に加へて靈長類を置き、ビュフォン(Buffon)は『博物誌』中に人類の單種を説き變種の多きを明にし、ブリューメンバッハ(Blumenbach)も意見を同じうせしかば、第十九世期と成りて、ダンマルクの古物學者テニセン(Thomisen)が自國の古塚墓を發きて或は石器、骨器を得或は青銅器、鐵器を收めて落雷の遺品と爲すの妄を説きしのみならず、此の種の器物を三種に類別して時代の新舊を明にし遂に史前時代を最舊より最新に至るの順を以て石期、青銅期、鐵期の三期に分ち、尚ほ青銅の用は石の廢れに非ずして人工の進化は世界の各地に於て同時に行はれしものに非ずと注意したり(一八三六)、其の後(一八四七)同じくダンマルクの人にフォルハンメル(Forchammer)、ステエンストルップ(Steenstrup)及びヲルサエ(Worsaae)ありて一段の進歩を見しも極新統の前期を出でざりき。

二 前述の如く人工の蹟を確むるに足るの器物を所有するに至りしも、第四紀に於ける巨大の哺乳獸と生存を共にしたる人類に就きて化石又は遺骨を發見し得ざりしが故に第四紀人類の存在はキュヴィエー(Cuvier)を始めとし、學者、識者の容るる所と成らざりき、然るにフランスのブーシェー・ド・ペルト(Boucher de Perthes)は同國のアブヴィル(Abbeville)の附近に於けるマンシュグール(Menchiecourt)を始めとしセンタシュール(Saint-Acheul)、ムーレンキニョン(Moulin-Quignon)の各處並にソンム河の泥砂中に於て偶然的摩擦、其の他の事由に成れる斧鏃樣の石片と認め難き而も人工の蹟の顯然たる石斧、石鏃に交ゆるに「マンモス」(Elephas antiquus)「リノセロス」(Rhinoceros Merckii)「ヒッポポタモス」「河馬」(Hippopotamus amphibius)の遺骨を以てせるものを發見(一八三八―一八四八)し得たるが故に第四紀時代に於て人類は既に此の世に出現しありて前掲の巨獸と生存を共にしたりと提言して之が立證に盡瘁せしが、エドワールラルテ

ラルテー(Edouard Lartet)もサンサン(Sansan)丘に好適の遺物を掘採し得たるを以て(一八五〇)漸次にイギリスの學者間に贊成者を見るに至り、教授ラムセー(Ramsay)は「アミアン又はアブヴィイユの石斧はシェフィールドの刃物と同樣に人工に成りたるものなり」と斷言し(一八五九)、フランスの識者ブーシェー(Pouchet)及びゴードリー(Albert Gaudry)は人工に成れる石斧と巨獸の遺骨との存在狀態より考ふれば人類が「マンモス」等と共に第四紀に生存せしに相違なしと聲言するを憚からざりしも、未だ直接人類の遺骨に出會せざるを憾みたりき、然るに幸なる哉、一千八百六十三年に於てブーシェードペルトはムーレンキニオンの附近、地下四米突五十糎の處に、人工が會て加はりしことなき地層の中に、額骨一片を發見し得たるも、人骨なりや否やの論爭起り、所謂額骨の訴訟は當然事實の勝利に歸せしが翌年に至り同處に於て更に遺骨の發見ありて化石的人類の存在は確證せられたり。

額骨の訴訟

ブーシェードペルト(Jacques Boucher de Crèvecoeur de Perthes)(1188—1868)は文學者にして考古學者を兼ね「大洪水前の人類」の存在を主張して名聲揭り、センジェルメン博物館の

ペルト

中堅たるべき貴重の史前遺物を蒐集して史前考古學の父と稱せらるるに至れり、著書に「遺化」(一八三九—四一)、「ケルト及び大洪水前の古物」(一八四七)、「大洪水前の人及び事業」(一八六〇)、「石の器具」(一八六五)、「無生無死」「形の滅亡」(一八六五)、「人骨の新發見」(一八六五)等あり。

ラルテー(Edouard Lartet)(1801—1871)はフランスの人なり、地質學者にして人類學者を兼ね、サンサンに於て第三紀の遺物を掘採して漸く名を知られ(一八五〇)、地質學會の會頭と成り(一八六九)、「ミッセオム」の教授に任ぜられて(一八六九)大に洪積時代の獸類の復舊に盡瘁せり、「サンサン丘の記」(一八五一)、「ベリゴールの穴窟」等の外、有益なる論文報文多し。

ラルテー

爾來此の種の發見漸く多く、フランスにありてはヴェゼール(Vézere)河に沿へるクロマニオン(Cro-Magnon)、エージー(Eyzies)、ムースチエー(Moustier)、マドレーヌ(Madeleine)等を始めとし、ソリュトレ(Solutré)マスダジル(Mas d' Azil)等に於ける洞穴其の他、イタリアのメントン(Menton)の洞穴內に於て人類の遺骨、獸類の骨片器具、武器、裝飾品、食事の殘品、繪畫等を蒐得したり、又ベルジックはレッスの谿谷就中フルホーズ(Furfooz)に於て同樣の遺品を多量に供し、其の外、ユルテンベルヒのカンスタット(Canstatt)には發掘行はれしが、ヂュッセルドルフ附近のネアンデ

ルタル(Neanderthal)は人類學上有名なる人頭骨を與へたり(一八五七)。

ダンマルクの人類學者は自國の「スコフモセス」(Skovmoses)即ち林沼地(森林の沈下を生じ沼地と變じ樹木は沼底に埋れて泥炭の敷ふ所と成りしもの)の落せし爲の陷の地に於て土饅頭的「キェケンメッヂンゲル」(Kjökkenmeddinger)即ち貝墟を發掘して、殊に食事に緣故ある各種の遺品即ち貝殼、魚骨、灰、炭、碎骨、土器、等を蒐收したるが、イギリス、ベルジック、フランス、等を始めとしオーストラリア、合衆國並に我が國にも同樣の發掘行はれて類似の遺品は得られたり。

一八五三——五四年の冬季に於てシュワイツのツーリヒ湖に非常の減水あり、し爲め泥中に埋沒せる杙の上部に露出ありてケルレル(Dr. Keller)を始め識者の注意する所と成り發掘を行ひしに石器、其の他各種の器具は獲收せられ、所謂湖上市街(Cité lacustre)は想定せられたり、其の後ニューシャテル、レマン、コンスタンツの各湖は勿論、フランス、イタリア、バイイエルンに於ける湖中にも同樣の群杙を湖岸より四十乃至九十米突の處に發見したり、此等の杙上屋、パラフィッチ(Palafitti)(イタリア語にて杙の義なり)は時代を異にし新舊一樣ならず、石期に屬するもの多きも、青銅期又は鐵期に係るものあり、中には有史時代のものありて現にマライ群島、パプアジアには杙上屋に居住するものあり。

斯の如き遺蹟遺品に基づきて人類は第四紀の最舊時代より最新時代まで通じて生存し、洞穴熊「マンモス」「リノセロス」(犀)「タランヂウス」(馴鹿)「オーロック」(Aurochs)等に伴はれ、氷河時代を經、漸次に發展して衣食の道を覺り防寒の法を講じ猛獸と鬪ひ生業を勵みし事蹟には顯著なるものあり。

人類發生の時代を第四紀以前に溯らしめんと試みたる論者は第三紀の末葉乃至中葉に於て既に地球表面の或部には人類若しくは人類の先驅者は生存せりと主張するの理由ありとせり、而して之が立證に供せらるる事實には勿論疑はしきもの多しと雖も亦強も無稽なりとして排斥し得ざるもの少なからず。

本件に關する最初の發見はヨーロッパに行はれ、フランス、イギリス、ポルトガル、イタリア、等に於て人工に成れる石器と認むべき者を亞新統(Miocène)又は最新統(Pliocène)の地層より蒐收するを得たるが、イタリアのブレシア(Bre-

scia)に於て發見せられたる骨片を人骨と爲すは信ずるに足らざるが如し、又南アメリカに於ては最新統の下部に人類の遺骨を得たりと稱するも地層の關係に判然せざる所あり、されば第三紀的人類の生存には疑ふべきの餘地ありてモルチイェー(M. G. de Mortillet)等の一派の學者は第三紀に生存せしは現代の人類に對する先驅者とも云ふべきもの即ちモルチイェーの所謂猴人(Anthropopithèque)なるべしと提言せり、蓋し進化論に基づきて考ふるときは猴類の優者類人猴即ち人猴と人類との間には懸隔甚しきを以て兩者の間に立つべき猴人の存在を必要とせり。

モルチイェー(Gabriel de Mortillet)(1821—1898)はフランスの考古學者なり、史前的研究に熱中し人類學會々頭と成り又代議士に擧げられたることあり、著書あり「史前人類の古さ」(一八八二)「史前博物館」(一八八二)等あり、一八六四年以後「人類史料の蒐集」に就きて四卷を公にしたり。

然るに近時の發見に係る事實に此の點に於て大なる感動を起せしものあり、オランダのハーグの人デゥボワ(Eugène Dubois)はジャバのトリニル(Trinil)と云ふ處に於て河谿に屬する沈澱的地層にして慥に第四紀以前と認めらるるもの即蘭亞新統の上部?の中に於て四片の遺骨即ち臼齒二個、大腿骨一個、頭蓋骨一個を發見したり(一八九一——九二)大腿骨は疑もなく吾人同樣の歩行者、純然たる直立者に屬すること明にして樹上に攀登する猴類の化石に非ずと鑑定せられたり、頭蓋骨に基づきて容重を打算せしに九〇〇乃至一〇〇〇立方糎を得たるが之を類人猴の優者「チンパンジ」の五〇〇立方糎及クロマニョンの人頭骨の一五〇〇立方糎に比すれば恰其の中間にあり、茲に於てデゥボワは人猴類と人類との間に直立猴人(Pithecanthropus erectus)と命ずべきもの生存せりと主張したり、デゥボワが始めて自己の發見をヨーロッパに傳(一八九四)へし際には盛に論難を試みるものありしが、同人が發見に係る遺骨携帶にて西歸せしより以來彼れの提言に贊同を表するもの漸く多く人類の起源に關し一時期を劃するに至らんとするものあるが如し、然れども一面には之を否定して第四期の下層に於て人類と共存せし高等猿猴の遺骨たるに過ぎずと主張するものあり。

人類の發生地

人類の發生期に次ぎて講究すべき問題は人類の發生

地を決定するにあり、即ち人類界は一ヶ處若しくは若干處に發生したる單種の人類より成れるか將又若干處より發生したる數種を包括せるかを判定するにあり。

本件に關しては人類學者は二陣を張れり、多元派(Polygénistes)は口碑、歴史等に基づきて、人類の發生地に若干處ありと認め、各種の人類は並行して進化し、漸次に接觸混合せるの結果、今日の狀態を出現せりと爲せるが、單元派(Monogénistes)は人類の發生を一ヶ處に限り、人類を單種と定め現存せる體軀、面相等の差異を以て土地、氣候等種々なる事情の下に起りたる變化にして若干の人種(races)即ち遺傳的變種を認むるに過ぎず、進化、移住、竒續等に基づきて現狀を解明せんと爲せり、甲者は單簡にして了解し易きも各種相互の關係疎と成りて人類界の眞情を洞察するに便ならず、乙者は人類生存の情態を知悉するに適せんも複雜に失し統括に苦みて或は斯學の無能を嘆かしむるに至るを免れず。

多元主義(Polygénisme)は其の由來甚だ古きも、學説として世に現はれしは大探檢旅行以後なりき、ラペイレール(La Peyrère)(1594—1676)は「前アダム族」(Préadamites)を著して聖書の解釋上より造化に二樣あるべきを主張せし以來(一六五五)、ボリードセンプヴンセン(Bory de Saint-Vincent)(1780—1846)、ブィレイ(Virey)(1776—1847)、デムーレン(Desmoulins)、グリッドン(Gliddon)、ギアトン(Samuel Morton)、ノックス(Knox)等は種類を增加せしめしが、アガシス(L. Agassiz)(1807—1873)は機構の分布と地質的層土(Substratum géologique)との間に密接なる關係ありと提言し特殊の多元主義を發表してエルルスベルヒ(Erlsberg)及びネゲリ(Naegeli)の立論を誘致せり、而して多元論者の主張する所に從へば(一)或地域に於ける最舊の遺族は同地域の主要民族の祖先にして兩族は同じ標式(types)に屬せざるべからず、此の理に基づきてペッシ(Poeschl)及びペンカ(Penka)は淡褐色の大長頭人(grands dolichos blonds)の起源を北ヨーロッパに置き、ブロカ(Broca)及びラニョー(Lagneau)はセルト人をレチックアルプ(Alpes rhétiques)出なりとし、ブロカ及びッビノ(Tubino)は褐色長頭人(dolichos bruns)を西地中海地方の產なりと爲せしが、此等の論者は大人種の原地產主義(autochtonisme)を主張せり、(二)大人種間の雜合生(métissage)

は齎續せざるも固定性を有せず、是原種若しくは舊種の自衛に基づくものにしてエスパニア、ギリシア、エジプト、其の他ヨーロッパ人の殖民地に於て目擊せられたる事實なりとす、されば假に一歩を讓りて現在の主要なる人種間に系譜的關係ありとせんも、現代の動物界成立以前即ち極新統(Pleistocene)以前に溯りて之を求めざるべからず。

アガシス

アガシス(Louis Agassiz)(1807—1873)はシュワイツの博物學者なり、始め醫學を修めて學位を得(一八三〇)、ノイシャテルに於て博物學の教授に任ぜられ(一八三二)、キュヴィエーの勸誘に基づきて深く魚類を研究し(一八三三——四二)、又氷河を探究したり、アメリカに渡りて大に功を奏し遂に止まりてケンブリッヂ大學附屬科學院の動物地質の講座を擔當したり、彼この自然法は各屬、各族、各標式は造物者の特殊創意に據れりと爲すにあり、「分類論」(Essay of classification)、其の他著書多し。

單元主義

單元主義(Monogenisme)も亦其の由來極めて古く、東方に起れる宗教は概ね此の主義を奉じ、民族の多數も口碑に之を傳へて今日に至れるが、第十七世期に於て多元主義が形式を整へて出現せし以來、ビュフォン(Buffon)、リンネ(Linnaeus)、キュヴィエー(Cuvier)、ブレンヴィル(Blainville)、ミュルレル(Müller)、フンボルト(Humboldt)等の之を贊するありて殊にカートルファージュ(Quatrefages)は(一)人類的雜種の齎續性、(二)白、黃、黑の三種が熟れも中央アジアの山彙より產出せしが如き踪あること、(三)言語に關はる三標式も同一の地方に於て混淆接觸し居ること、(四)移住と生存狀態とに依りて變種の出現を解明し得ることの四條件を提げて巧に單元主義の防衛を試みたり。

カートルファージュ

カートルファージュ(Jean-Louis Armand de Quatrefages de Bréau)(1810—1892)はフランスの博物學者なり、醫學士、理學士と成りし後、ツールーズ大學の代理教授に任ぜられしも(一八三三)パリーに出でて雜誌「兩世界」の寄稿者たりし傍ら研鑽する所ありしが、其の効空しからずして「齧齒類の動物的性情」を提出して理學博士と成り(一八四二)、爾來名士に交り地中海及び太平洋の沿岸に旅行を爲し、高等中學「ナポレオン」の教授に任ぜられ(一八五〇)、二ヶ年を經て學士院に入りたり、「ミュゼオム」の解剖學及び人種學の講座に若くや(一八五五)、今名漸く聞え、進化論者と唯靈論者との論爭の際には穩健なる態度を以て巧妙なる人類單種說を支持したり、著書報文頗る多く、就中「人種の單一」(一八六一)、「ポリネシア人と其の移住」(一八六六)、「人類史」(一八六七)、「ダーヰン及び其の前驅」、「フランス人」(一八七〇)、「Crania ethnica」(一八七三——一八八二)、「人類」(一八七七)、「化石人と野蠻人」(一八八四)、「俘虜」(一八八七)、「人種史」(一八八九)、「進化說」(一八九二)、等あり。

斯の如く兩說相對峙して未だ歸一するに至らざるが、各種の生物は之が發生に必要なる事情の統合ありて始めて現出するものなりとせんか、發生地を一ヶ處に限らざるべからざるの理由なく又博物學、殊に動物學上より見たる人類に數種を設くるの必要なしと判ずるは主として吾人の有形性、就中形體に關する進化の理に基づけり、然るに吾人特有の積成力に據りて人類界(Règne humain)を置きたる以上は種族國民の優劣高下は主として此の積成力の効果即ち文化の度合に鑑みざるべからず、體軀相貌に係はる外觀性は頗る微弱と成りて人類界に若干の原種を設くると人類を單種に限りて若干の人種を置くとは地理學上重要視すべき問題と思考するに及ばざることと成るなり、又相似(ressemblance)及び奇續(filiation)に重きを置きて人類の單種なるべきを主張するものあるも民族部族等の系統を探求するに便なるのみならず寧ろ必要ならんと思考せらるるも人類を概括して單種に纏めんとするには或は自縛自縛の弊に陷らんことを恐るるなり。

發火の方法(マンモス期)

生活の狀態(マンモス期)

用火の方法

用火の歴史は原始時代の初期に遡らんも、其の起源は石器等の遺存、火制、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝも、最古き人類の土民間に遺存せる風俗、習慣、其の他に徴して、其の起源は石器時代の初期に属し、火の利を悟りしこと、火山、野火、噴火等の自然現象、日光、電氣、摩擦、火の工風は漸次に発見せられたるに依りて明示せらるゝ

丁、人類の曙光

人類發生の時期に就きては或は之を第三紀始新統(Eocène)亞新統(Oligocène)甚新統(Miocène)最新統(Pliocène)に潮らしむるあり、或は之を第四紀即ち極新統(Pleitocène)第一水期(Période glaciaire)第一解氷期(Période interglaciaire)第二水期、第二解氷期、第三水期、氷後期(Période postglaciaire)の六期に分たるに限れるあり、而して人類の古きには未だ定説あるに至らざるも、史前時代が意外に永く數萬年以上に亘れりと爲すに一致せり又人類が單種なりや多元なりやに就きての論爭も未だ歸着する所あらざるが、吾人の各地に分散して移住轉居するに及びて周邊の事情に幸なるあり不幸なるありて或は進みて優秀の地位に達せるあり或は劣卑の境遇の中に蠢動するに過ぎざるあり、從て文化の度一樣ならずして之に關係ある遺蹟遺品に懸隔差等の存するは理の當に然るべき所なりとす、易に就き難を捨つるの通則あるに拘らず、體力、氣力、智力の均しからざるの結果、進運一ならずして、經歷を異にする住民、種族は現ばれたるなり、されば妥適の石材に豊富なるが爲め石器、石具の製作に長せるも金屬の使用に迂なるあり、夙に用

石の不便なるを覺り進みて金屬抽出の法を發明するに至れるあり、或は石器の製作に著しき進歩の跡を認めざるに忽然として金屬器の出現ありし如く判ぜらるることあらん、要するに史前の人類を考査するに當りては程度に於て低く範圍に於て狹からんも生存上の要素並に其の相互的關係にありては現今の人類を研究すると同樣の注意を拂はざるべからず。

史前時代に於ける人類の地理的研究即ち史前地理に就きては地方に從ひて精粗に甚しき懸隔ありて現時に於て知悉せる事實に就きては未だ統合して記述を試みる能はざれば、史前的研究の最も普き西ヨーロッパ殊にフランスには專攻の學者少なからざりしのみならず、掘採蒐收したる材料に豐なれば主として同國並に之に隣接する數國に亘る史前地理の大綱を記述し併はせてアメリカ及び我が國に關するものを掲示せんとす。

西ヨーロッパ

地質學上より見たる現代は人類の出現したるを以て特徴と爲すべき第四紀即ちイギリスの地質學者ライエル(Sir Charles Lyell)(1737-1895)の極新統(Pleistocène)中の最近期たる氷後期(Période postglaciaire)に當れるが本紀の始めに於ては地理學上重要視すべき各種の現象を見たり、地殼は大西洋の陷落、優勢なる高山の成生等の如き第三紀の大動搖の後を受けてアドリア及びエーゲの二海は現はれて地中海は完成し、アジアとヨーロッパとの陸地的連絡は破れて地中海と黑海との相通ずるを見、氣候は轉變して降水非常に多く、高山の積雪は巨大なる氷河發生の基を爲し、氷河は原谿を逸出して侵勢を遠き地方にまで及ぼせしが、其の第一進走は第三紀の最新統に屬するも、第二進走は最も廣大にして其の遺跡は北半球の各處に殘存せるがヨーロッパにありては大氷層はスカンヂナビアの北部より大ブリタニア群島、北ドイツの平野、ロシアの西部及び北西部、バイエルン、シュワイツ、ローヌの河谷(リヨン地方に至る)に達したり、又河流の勢力强大にして或は浸蝕して谿谷を作り或は土砂を盛に搬送して厚層の土を沈積したり、斯の如くして第三紀の終(最新統の上部)より第四紀の始(極新統の下部)までは結氷盛なりしも、其の後氣溫高き第二解氷期と成り、太古象期(Age de l'éléphant antique)に入り太古象(Elephas antiquus)、南方象(E. meridionalis)、二角犀(Rhinoceros Merckii)、大河馬(Hippopotamus

major)等の生產ありて人類も世に現はれ、第三氷結期は氣候濕潤にして溫度低かりしが綿毛「マンモス」(Elephas primigenius)、犀鼻犀(Rhinoceros tichorhinus)、原牛(Bos primigenius)、原馬(Equus caballus)、「オーロック」(Aurochs)(Bison europeus)、馴鹿(Cervus tarandus)、「ヒラン」(大角鹿)(Cervus alces)、愛蘭鹿(Cervus megaceros)、穴窟熊(Ursus spelæus)、穴窟「ハイイナ」(Hyena spelæa)、穴窟虎(Felis spelæa)等出でて「マンモス」期(Age du mammouth)を爲し、雜草繁茂して廣大なる地面を蔽ひ、處々に「ツンドラ」(Tundra)の存在を認めたり、其の後氣溫稍〻高く氣濕大に減じて馴鹿期(Age du renne)と變せしが、氣溫更に高く氣濕再び增して現代の狀況に接近したるを以て「マンモス」及び馴鹿は「グロ」(Gulo borealis)等と共に緯度的移住を爲して極北方面に去り、「モルモット」(Marmotte)(Arctomis vulgaris)及び「シャモワ」(Rupicapra europea)は標高的に轉住して高山に逃れたり。

斯の如く無機の世界に於ける變狀は生物界の變態を生じ、動物も其の期に從ひて其の要種を變改し人類も此の間に存在して盛衰を異にせり、蓋し四圍の事情に變化ありて獸類に南下若しくは北上するものあらんか、之れに依りて衣食せる人類には運命を同じうして北に去るあり南に赴くありて未だ幼稚期を脫せざりし獵人(長頭種)社會は根底に震動を受けて土崩瓦解し、殘存の住者は容易に後着の優秀者(亞廣頭種)に混合同化して世は牧養の社會とは改まりたるならん。

現今行はるる時代別に從へば史前時代を石屬時代(Age de la Pierre)と金屬時代(Age des Métaux)とに大別し、石屬時代即ち石器時代を更に碎石期(Age de la Pierre éclatée)即ち原石器時代(Période éolithique)、刻石期(Age de la Pierre taillée)即ち舊石器時代(Période paléolithique)、研石期(Age de la Pierre polie)即ち新石器時代(Période néolithique)の三期に分ち、金屬時代即ち金物時代に銅期、青銅期、鐵期の三期を設く、蓋し掘採し得たる燧石器に就きて工作の蹟を究めんか、眞に其の程度に高低の存するを認めん即ち原人が自然界に缺ける石及び割石を拾採し又は石塊を火に懸けて割り、打碎きて用途に當てたるに始まり、漸く進みて石塊を割り使途に適する石片を刻、製し、終には之に研磨の工を加へたり、而して自然銅に意を注ぎて始めて金屬の用を知り、青銅を使ひて銅錫合金の妙を悟り、

石器時代

金物時代

更に進みて製鐵の法を案出するに至りたるなるべし。

(ii)碎石期即ち原石器時代は地質學上の第三紀の亞新統若しくは最新統に相當すべく認めらるるが、現時の人類と同樣のものが生存せしにや將又猴人(Anthropopithèque)若しくは原人と稱する先驅者ありしにや明瞭ならざる所あるも、オッタ(Otta)ボルトガルにありに於けるリベイロ(Ribeiro)、ピッイクール ニー(Puy-Courny)フランスにありに於けるラーム(Rames)、ッネー(Thenay)仝上に於けるブールジョワー(Bourgeois)等の研究に依れば燧石を碎き割りて掻取器(Grattoirs)樣の品數種を作りたる者の存在せしは事實の證する所なりと云ふを得るなり。

(b)刻石期即ち舊石器時代は第四紀の洪積時代の末より沖積時代の始めに當れるが、石器工作上に關はる發展に基づき、舊より新に赴くの順に從ひて更にシェル(Chelléen)期シェル(Chelles)はフランスのセーヌ、マルヌ(Seine-et-Marne)縣にあり アシュール(Acheuléen)期(サンタシュール(Saint-Acheul)は同國のソンム(Somme)縣にあり ムスチエー(Moustérien)期ムスチエー(Moustier)は同國ドルドーニュ(Dordogne)縣にあり ソリュトレ(Solutréen)期ソリュトレ(Solutré)は同國ソーネ、ロワール(Saône-et-Loire)縣にあり マドレーヌ(Magdalénien)期マドレーヌ(Madeleine)は同國ドルドーニュ縣にあり の五小期に分たる。

シェル期に於ては砂泥の中、アシュール期に就きては砂礫の中即ち兩小期極新統の第二解氷期以前にありては河流の沿岸に燧石、硅岩、硬質石灰石、等を材料とせる「オルモンド」形の刻製的斧、掻器、打器、圓盤、等を拾採せしも未だ人骨を發見したることなし、共存の動物には熱地生の古象(Elephas antiquus)、二角犀(Rhinoceros Merckii)、大河馬(Hippopotamus major)、等ありて當初は第二氷結期までは氣候濕潤にして寒氣も強かりしが、漸次に溫暖を加へ「ツンドラ」は變じて「ステップ」と改り、此の兩期に於ける人は平野の沿流地に獵漁を營み枝條の蔭に接息せしものの如く察せらる。

ムースチエー期に至れば人工漸く進みて武器、及物を改良して强敵を防ぐに便し、猛獸を獵獲するに利せり、然るに氣候は寒威を加へたれば洞穴又は窖窟に居を占め、綿毛「マンモス」(Elephas primigenius)、「ランジフェラタランヂゥス」(Rangifera tarandus)現時の馴鹿より得たる獸皮を綴りて被服を作り馴鹿、其の他、原牛(Bos primigenius)、原馬(Equus caballus)、等の肉を喫ひ、窖窟に接める熊、豹、虎、「ハイイェナ」、等と鬪ひたり。以上の三小期はフランス以外がヘミア、ドイッ、ベルジック、イギリス、等に共通なり

カンスタッド(Canstadt)化石的人骨が始めて發見せられたる付名にしてユルテンベルヒのスツットガルト附近にあり人種はヨーロッパ最古の住民たり、カンスタッド及びネアンデルタル(Néanderthal)の頭骨共にスピー(Spy)の骸骨等に依りて推斷せられたるが、身長短くラップに近く、頭大きく胴太く前肢短く手足大きくして厚し、頭は著しく長く後部に延び上下に偏平にして幅狹く、額低くして後退し、眉骨凸起し、眼窩大くして圓く、下顎骨強く前進せり、要するに姿勢骨格等を合はせ考へ現時の人と類人猿とに比するに後者に近似せる點少なしとせず、而してムスチエー、スピー、ブルダン等の遺蹟に依れば第四紀の上部の下層と時代を同じうすと斷ずるを得べし。

ソリュトレ期に於ては氷河は退きて氣候は稍穏和と成り「マンモス」は去りつつありしも、馴鹿は尚ほ多く、鳥、兎も少なからざりき、捕馬は盛に行はれ、ソリュトレ、マントン(Menton)等の遺蹟は石鎗、石鏃、石銛等に關する燧石細工の進歩を示したり、而してマドレーヌ期に入りては馴鹿の骨及び角を用ふること漸く盛にして鎗の穂先、齒緣鏃、刀劍、針、鉤、研具等に製し、食物は馴鹿を主とし、交ゆるに兎、栗鼠等を以てせしが、魚類も亦加へらる、穴窟に住み、貝殼、齒、牙片等を用ひて裝身具を作り彫刻を施して美術の端緒を示し、遺骸を埋葬又は火葬して禮儀の觀念を實にし以て生活の狀態漸く豐に、文化の曙光を認めたり。

クロマニヨン(Cro-Magnon)巴黎所在地の名、フランス國ドルドーニュ縣にあり人種はクロマニヨン、マドレーヌ、マントン(Menton)等に於て拾收せられたる殘骨、遺骸に依りて復回せられたるが、尚ほ前種の如く長頭なりとするも、眉骨稍、鈍く、眼窩の縱徑短く、額骨は長く廣し、顎は突進せるも猴に似たる所大に減じ、身長も男子一八五糎、女子一六六糎にして骨格逞しく姿勢も前者に優れる點多し、殊に描畫の技に巧にして馴鹿、熊、等の骨の上に彫刻を施して熊、馴鹿、等の圖を現はせり、本種は馴鹿期の終まで存在せしが、漸次に北方若しくは南方に移住せしものありて、殘餘のものは後徒者に混合同化して其の跡を絶てるが如くなるも、隔世遺傳に依りて時に出現することあるのみならず、カナリア群島のゼワツチョス(Geruchus)は本種の後裔なるべしと云ふ。

(c) 研石期即ち新石器時代に入れば氣候は乾冷を捨てて現今同樣と成り「マンモス」はシベリア方面に逃れて將に絶滅せんとし、馴鹿は北に去りたる頃アジアより來侵したる短頭種族は文化の度稍、高く、先住の長頭種に威壓を加へしが、平和の中に同化行はれ雜種は出現したり、エスケルライヒ、ドイツ、シウロイツ、フランスと等に於ては短頭的種族と長頭的種族との遺骨を發見せしもロシア、イギリスに於ては長頭的頭骨を拾採せしに過ぎず 蓋し新來の種族は遙に優秀にして產源に富めり、山羊、綿羊、乳牛を養ひ「チース」を製し、小麥、大麥を作り、林檎、梨を栽え、野牛(Urus)「オーロック」(Auroch)野猪を獵獲し、魚類を網漁せり、

而して本期に於ける石器には研磨を加へたるものあるを特徴とせるが燧石にて作りたる斧には全面若しくは片面に研磨を施し鹿角を柄と爲せり、其の他研磨せざるものに石刀、石鏃、石劍等ありて細工の巧妙なる、工作者の技量を表示して餘りあり、鹿角製の品には銛、鈎等あり、土器は半燒的の粗物多きも中には幾何的圖樣を刻出せるあり、亞麻絲を紡績して織物を製し、貝類、眞珠、「トルコ」石、頁岩、石灰石、豚齒等を用ひて頸飾、腕飾等を作りたるが稀には發見第一の金屬たる黃金を用ひて裝身具を製せしやに信ぜらる、斯くして原料及び加工品は貨物と成りて交換を催し獨木舟の航行を促がせり、又居住に就きては庖厨の遺物(Kjekkenmoeddings)にて指示せらるる陸上屋の外に杙上屋の建設もありて各處に湖上市街(Cités lacustres)の現出するを見たり。

遺骸の埋葬に關しては新石期人は天然の洞穴若しくは人工の窖窟を用ひ火葬も行はれたり、人工的の墓處には「チュミュルス」(tumulus)あり、土窟を掘りて覆ふに多量の土を以せし「ドルメン」(dolmen)あり、廟と廊との二部(縱石は樹立して柱と壁とを兼ね、横石を載きて屋蓋と爲し、廊口は一の動石にて閉さる)より成り、全部は土礫にて蔽はれて「チュミュルス」狀を爲せり、又「メンヒル」(menhir)は地上に樹立せる巨石(二十米突以上の高さに達するありにして端末に於て圓形若しくは方形の圍周(Cromlechs)を爲せり、共に史前時代の紀念物と考へられ、大石的建物(monuments mégalithiques)と稱せらる、而して頭蓋骨の小片を穿取し之を携帶して紀念若しくは信仰の具と爲せしものの如く推せらる。

金屬期即ち金物時代は先史時代と有史時代との連絡に當れる過渡の時代なり、分かれて青銅期及び鐵期を爲せり。

(d) 青銅期は新石期に密接し、鐵期は既に歷史の曙光を受けたりき、ベルツロー(Berthelot)がエジプト及びカルデアに於て研究せし所に從へば吾人が金屬を使用するに至りしは自然銅の美なるに促されしに起因し、銅に混ずるに錫を以てするの便を知りて青銅器を作れりと云ふに理由あり、原料は東方よりの輸入に係りて石型を用ひて鑄造せしが、漸次に鍛冶の術を發明するに及びたるが如し、該器には小劍、短刀、斧、剃刀、厨刀、腕環、飾針等ありて石器、骨

器と併び行はれ、被服の製作漸く進みて合羽、肌着、冠物、等は、作られ、土燒の釦、鈕杯、盤、等に見るべきものありて革靴も製造せられしが如し、獵漁は大に改良せられ、馬驢の飼育、家禽の飼養加はり、耕種發達し、住屋は湖上若しくは丘上に建設せられたり。

(c) 鐵期に至れば青銅器は廢るることなきも鐵器の出現は一大革新期を爲して百業の發展を促し、就中武器、及物の製作は大に進歩增加し、及渡、八十乃至九十糎の刀劍は普通と成り、斧、鎗身、鏃、等にも樣々ありしが、原料は當初に於てはアフリカ方面より來りしやに判せられ、製鐵炉は小形にして木炭を用ひて火力を得たるは慥なる事實と認めらる、杙上家屋は漸く減少し、綿羊、毛にての製織行はれ、通商航海の途も開かれて各地の居民間に於ける交通は漸く頻繁と成りたり、鐵器の研究は寧ろ考古學の所領たるべきものありてハルスタッド(Hallstadt)オーストリアにあり、初期の鐵器に就きて判然たる遺蹟を與へし地時代には中央ヨーロッパ最繁昌なりしが、イタリアが鐵器を知りしは西紀前第十二世期頃にしてスカンヂナビアが該器を使用し始めしは同第五乃至第三の世期以後なりき。

彫刻家(馴鹿期)

家族(馴鹿期)

アメリカ

新舊兩大陸の連絡に關しては從來アメリカとアジアとの間にベーリン地峽の存せしことを認めしのみなりしも、近年の研究に依りてアメリカとヨーロッパとの間にもイギリス＝イスランド＝グリーンランドの臺地のありし次第を想定せらるるに至りたるが時代は勿論第四紀の中葉以前と爲さざるべからず、從てアメリカに特殊の人(Homo americanus)の地產なき以上、住人の出現は前記の時代以前と爲さざるべからず、合衆國ニュージャーシー州のデラエーアの河谷に於けるトレントン(Trenton)、其の他より採拾し得たる打碎的石器(石材は黑曜石を主とするなど多少の差あり)は西ヨーロッパのセンタシャール(Saint-Acheul)及びシェール(Chelles)の標式に酷似せり、尙此の外、始原的工作品の遺物は北アメリカの氷期及び前氷期の遺蹟、カリフォルニアの砂金層、メキシコの第四紀層等より發見せられ、ブラジルにありては現存せざる動物の遺蹟と共に人骨及び石器を、アルヘンチナのパンパに於ける第四紀層より人類の遺蹟を發掘し得たり、此等の遺蹟、發掘品に依ればアメリカの第四紀人は短軀にして頭骨は長く上部に向ひて突起せり、現存のボトクドス(Botocudos)、フエゴ(Fuego)人等は此の第四紀人の後裔と

アメリカ

新舊兩大陸の連絡に關しては從來アメリカとアジアとの間にベーリン地峽の存せしことを認めしのみなりしも、近年の研究に依りてアメリカとヨーロッパとの間にもイギリス＝イスランド＝グリーンランドの臺地のありし次第を想定せらるるに至りたるが時代は勿論第四紀の中葉以前と爲さざるべからず、從てアメリカに特殊の人(Homo americanus)の地產なき以上、住人の出現は前記の時代以前と爲さざるべからず、合衆國ニウージャーシー州のデラエーアの河谷に於けるトレントン(Trenton)其の他より採拾し得たる打碎的石器(石材は黑燿石を主とするなど多少の差あり)は西ヨーロッパのセンタシュール(Saint-Acheul)及びシェール(Chelles)の標式に酷似せり、尙此の外、始原的工作品の遺物は北アメリカの氷期及前氷期の遺蹟、カリフォルニアの砂金層、メキシコの第四紀層等より發見せられ、ブラジルにありては現存せざる動物の遺蹟と共に人骨及石器を、アルヘンチナのパンパに於ける第四紀層より人類の遺蹟を發掘し得たり、此等の遺蹟、發掘品に依ればアメリカの第四紀人は短軀にして頭骨は長く上部に向ひて突起せり、現存のボトクードス(Botocudos)、フューゴ(Fugo)人等は此の第四紀人の後裔と

認めらる刻石器的程度の彼等は或は森林藪叢中に奔走して狩獵を專とし或は海岸に棲居して漁獲を主とせしものと思はるるが、介墟(shell-mounds)は兩アメリカの沿岸地の各處に普く、長丘(Paraderos)はアルヘンチナに存し、各種の土丘(mounds)はミシシッピの流域に多く、岩窟は「カニョン」の滸に築かれたり、北アメリカにありては土丘築造者(mound-builders)は岩窟棲居者(Cliff-dwellers, falaisiers)と共に玉蜀黍の栽培に農業の端緒を見しに過ぎざりしが、現時のメキシコ、中央アメリカ、ペルー等に當れる地方には文化の度の稍高きもの幷にコロンビア其の他の南部の地に半開の域に接せしものの存在せしはアメリカ發見當時の情況に徴して明なり。

日本　我が國土はアジア洲の東方に於ける島嶼と半島とより成れるが、島嶼部は同洲沿岸島嶼の要部に當り、臺灣島及び琉球(中央九州、四國、本州、十州、樺太、南等)千島の三彎を包括せり、而して此等の島嶼は原來大陸の東緣の地たりしも、第三紀の頃、地盤の陷沒ありし結果、日本海を始めとし、內海、海峽現はれ、之が爲め大陸の絕東部は離隔せらるるに至りしが、北の方間宮海峽に於て最も近く、南の方臺灣海峽にありては澎湖群島を挾み、中間に於ては對馬島に隔たる東西の兩水道を以て朝鮮半島に近接せり、斯る海陸の關係は北上せる黑潮暖流及び南下せる樺太、千島の二寒流と相俟ちて人類の來往移動に影響を及ぼせしこと蓋し偉大なるものありしならん、我が國土內に於て特に發生したる人類の有無は暫く措いて問はずとせんか、史前時代に於ける來住者に就きては東北口(千島口)、正北口(樺太口)、中口(朝鮮口)、南西口(臺灣口及び南口)の五口の孰れに依りしか留意せざるべからず、抑人類が西アジア方面に發生したる後、各方面に向ひて移動移住を試みたりとせんには、アジアの東方東邊に到りたる後、操舟するの術を知るまでに進歩するを待ちて始めて渡り易き地點よりして對岸の島嶼には達せるなり、又風向、海流に從ふときは意外なる遠距離の地に誘致せられ漂着するの事實を見ること稀ならず。

我が國土に往時居住せし人類の跡を尋ね、現住者の起源を探るに當り、我が帝國發達の沿革に鑑みて中域(本州、四國、九州)北域(十州、千島、樺太)南域(琉球、臺灣)に分ちて記述すべきものと信ずれども本書に於ては中域に關するものを記載するに止め

んとす。

中域に於ける人類の遺蹟に就きて考ふるに、塩坩又は土瀝青の中若しくは熔岩の下に多少の遺物を發見したる事實あるも、遺物包含層は主として冲積時代の黒土若しくは砂地に屬するを以て、本域に於ける住人の出現は第四紀の中葉以後、寧ろ同紀の末と認むるを至當なりとす、而して當時の氣候を案ずるに南北の間には勿論多少の差異は存すべき筈なるも、氷河の跡を認めざるより推すれば降雪は或は少なからざりしならんも寒冷の地と稱すべき底のものに非ざりしとするを妨げざるべし。

本域に於ける史前住民に就きては北派の土蜘蛛あり、南派の熊襲あり、中派にアイヌ及び大和種族あり。

土蜘蛛(terricoles)はアイヌの所謂コロポクル(koro-pok-guru)にして本域最舊の住人、北來の土著なりと信ぜらる、現存のギリアク(Ghilak)(樺太)、ヘルメン(Helmen)(カムチャツカ)、ウナンガン(Unangan)(アレウチ)、エスキモー(Eskimo)(アメリカの極北の沿岸地)等に似たる所多く、穴居すると土器を製するに巧みなるとを特

徵とす、殊に土偶を作るを好みたるにや、此の種の遺物多きが爲め史前時代の種族には稀に見る所の風俗誌を遺し往きたり、食物は貝類を主とし交ゆるに獸肉、草葉、果實等を以てせしが、人肉を啖ひし跡あり、衣服には上衣、下裳ありて獸皮、編物、織物にて之を製し、頸飾、耳飾、冠、物、履物等を用ひたり、生業に關しては漁獲を重じ、狩獵之に次ぎ、草葉木實を摘採し、犬を畜ひ、石器、土器、骨器、牙器等を作り、絲類、編物、織物を製し、域內の通商を勵みたるの蹟あり、住域は四國、九州にも亘りしならんも中心は本州の北部たりしが如し、アイヌ、熊襲、天孫族に接せし際、稟性の溫和にして頑强ならざりし故にや多くは混同し同化し、北方に移り去りたるものの如きは少數なりしならん。

アイヌ(Aino)は形貌、言語、風俗等より觀るときは全然孤立の小種族にして現存の人類中之に近似せるものを發見すること能はず、往昔の住域は本州を始めとし、其の他の地にも亘りしと云ひ、人口も少なからざりしならんも優勢なる大和種族に接觸したる結果或は混同を甘受して其の特立性を失ひ或は抵抗を試み敗走して北地に去れり、而してアイヌの起源が本州島に存

熊襲

大和種族

せずとせんか之をロシアの沿海州方面に求めざるべからず。

熊襲は一に隼人と稱せらる、性頗る慓悍にして黥面文身、南來の蕃人にしてマライ亞種に屬するならんも、インドネシア派なるかマライ派なるかは未だ判然するに至らず、從てマライ群島（ルソン、ビサヤ、ボルネオ等）より來りしや又は臺灣を經たるや疑れとも定め難きも、數次の漂着に依りて九州島の南端方面に移住の實を擧げ漸次に發展して同島の南半に據り尚ほ北上を試みしも超絶せる大和種族の北半を占有せし爲の服從同化するの止むなきに至れり。

大和種族は高天原族、又は天孫族と稱せられ、高天原より朝鮮半島を經て本域に渡來ありし如く推考せらる、前の三者に比すれば文化の度遙に高く土蜘蛛を從へ之を同化し自己の言語を習用せしめ、南の方熊襲を征し、北の方アイヌを伐ちて漸次發展し、一大國民を出現せしむべき基礎を固めたり。

戊、人類の現狀

人類が此の世に出づるや、當初は比較的狹隘なる地域内に漂遊して獵漁に從ひしが、漸次に繁殖して員數の增加するや、生活上の不便を悟り、住域の擴張を圖り山谿を越え、河海を渡り、寒に耐え、暑を忍びて隨處に移住し、各地に散居するに至れるが、氣候、地勢、等の如き自然的狀態幷に動植物の影響の如き共存的事情の下にありて或は犬を伴ひ、馴鹿を誘ひて馴養の端を開き或は草根木實を採取し悲いて耕種の緒に就きたり、茲に於て居住に漂遊式と土着式との二樣現はれ、永き年月を經るに及びて氣質、風俗を異にせる牧民、農民の二派を生じ、更に進みて農牧の共同、商工の分業を釀成したるなり然るに一面には家族、親族の如き所謂血族は相集りて氏族を爲し、部族を作りて一地方に於ける共存の利を收め、更に一轉して氏族を組織し、邁進して國民を完成せんとは勤むるなり。

茲に云ふ類を以て集まると、而も集團は亦克く類を作爲せり、氣質習慣に類似する所あらんか、相集まりて團結するに至ること珍からざるが又一家に家風ありて一鄉に鄉風の備はるものあるは世人の知る所なり、氏族に特質あり、部族、民族、等に特徵あり、進化せるあり墮落せるあり、一上一下して方向

の定まらざるあり、昇らず降らず、滯留の狀態にあるあり、其の由來を尋ね、其の起因を探らんか、千狀萬態の現はるるありて捕促し難く、策の施すべきなきかの嘆あらしむるも、系統を立てて觀察を下ださんには又解決の不可能ならざるを推するに足るものあらん、先づ講究の目的と成れる氏族、部族、民族等に就きて素質、原性を明にし、次は之に影響を及ぼせる周圍の事情を詳にし、而して兩者の間に於ける相互的關係の輕重厚薄を認識して所謂積成の事實が如何なる範圍、如何なる程度に於て現存するやを判斷するにあり。

各氏族、部族、民族、等に關する素質、原性に就きては活動に因あるものを主とし、雙立の原則に基づきて積極的の勤勉、篤志、強行、深慮、整頓、等に對して消極的の懶惰、薄志、弱行、淺慮、亂雜、等を擧げ、以て其の孰れに該當せるやを明にし併はせて缺陷の有無、特情を詳にするにあり。

周圍の事情に就きては自然的と人爲的との二者あり、甲者には氣候に屬する寒、暑、風、雨、等あり、土地に關する起伏、高低、肥瘠、等あり、河流、沼湖、海灣、等あり、山地、高地、低地、等あり、林地、草地、不毛地、等あり、其の他、地震、火山、等あり、生物産源、等あり、乙者には他の氏族、部族、宗族、等との關係上、同情的の共同、援助、誘掖、憐憫、等あり、敵對的の競爭、威壓、迫害、侮蔑、等あり、道義、宗教、等あり、生業、制度、等あり、移住、雜居、等あり。

而して兩者の間に於ける相互的關係の程度、狀況、等を認識したる後、樂觀的不滿に基づき、積成力に據り、其の効果を收めん爲に實施せる適應の情態を摘察して進化の高低を推し、悲觀的不平に齷齪して積成するに至らざるか又は積成の効果を收むるに遑あらずして遂に退化墮落の現はるるを見るなり、又積成の應用、適應の可否、一樣ならずして進退に常なく積成するの餘力なく又墮落せしむるの原因なくして停滯固着するあり。

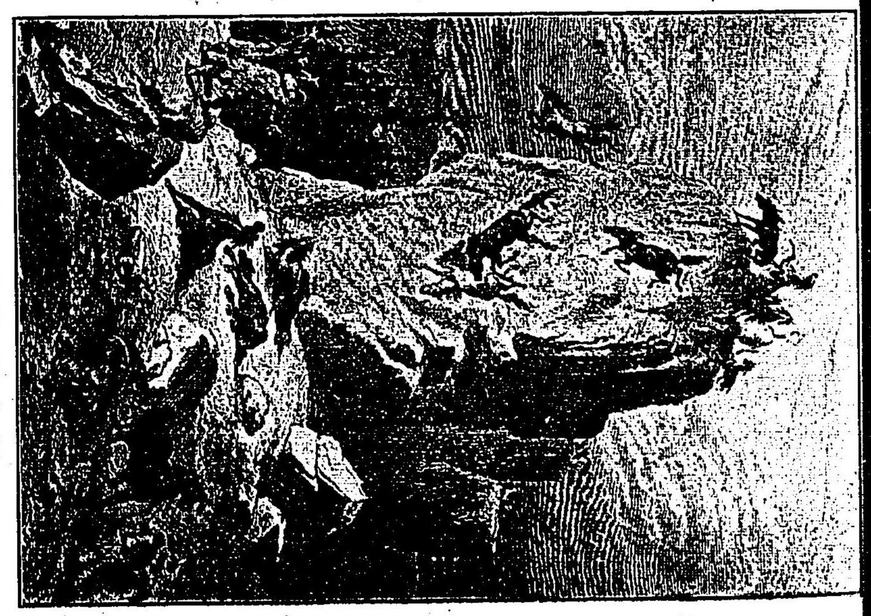
斯の如く積成の情態均等ならず、効力の發動樣々にして所謂文化は進度を異にし、程度を同じうせず、人類界は現狀を呈するなり。

吾人は生存場裡に對し密接なる關係を有するものにして自然の律令(lois naturelles)は吾人の生存に就きて物質的方面に限らず、社交的方面をも制御し吾人の就業上若しくは活動上に於て特殊の方法を强用せしむることあるに

も、吾人は又如何なる境遇に居りても屈從を完うすべく迫らるることなし、如何に自然が吝嗇にして些少の恩惠をも惜みて止まざるが如き場合に於ても吾人は食料、其の他の需要、希望を充たすべき材料の幾分かを蒐集し得たるなり、現時にありては純然たる野蠻人なきも亦未だ完全なる開化者を見るに至らず、人類中に存する各群は均等なる文化に浴することなく、一端には最單節なる生活を營める所謂原人に近き天然人(Naturvölker)ありて他端には高度の文化に達せる開化者(kulturvölker)あるが、兩者の間には夥しき中間的標式は存するなり。

されば現時に於ける人類の狀態に就きて解明を下ださんと試みんには積成と適應との合成効果たる文化の進度に基づくを至當なりと信じ、現存の人類を始原、半開、旺盛の三級に大別し、生存資料中の最たる食物を獲得するの方法に獵漁、牧畜、耕種の三者ありて單行若しくは併行せられ、發達の程度一樣ならざるのみならず、惹いては居住の狀態にも影響を及ぼして漂遊式、土着式の現はるるあれば之等に據りて六階を設けたり。

岩下の住屋(馴鹿期)



岩上の馬狩(馴鹿期)

旺盛的文化(上級)	半開的文化(中級)	始原的文化(下級)
第六階	第五階	第四階	第三階	第二階	第一階
殷大的商工	優秀的農牧	改良的耕種	漂遊的牧畜	鋤鍬的耕種	漂遊的獵漁

尙各階に就きて考ふるに獲物、作物、着衣、住屋、等の物質的發達に限らず、道義、信仰、制度、技能、學術、等の進歩に察して、若干の段を置くべきは勿論なれども、亦細微に過ぎんことを恐れ、茲には二十有餘の部族、民族、等を列記して階段の意を表示せんと試みたり。

始原的文化

始原的文化の人類に就きては獵漁のみに依れるものと多少の耕種を兼ぬるに至りたるものとの二階を設けたり。

(一)漂遊的獵漁　天然が甚だ繼しくして吾人に對し反抗的態度に出づる地方にありては獵漁が主要なる產源なりと云はんより寧ろ唯一の利源たること常なれば不毛の沙漠、氷結の「ツンドラ」、密蔽せる「セルバ」、離隔せる孤島、等には住人稀小にして積成の便なく、生存の狀態には慣むべきもの多く、人智の

發達には見るべきもの更になし、或は廣漠たる境域内を漂遊し或は狹隘なる小區域の中に幽閉せらる。

本階に屬する人類の中に殆ど獵漁に限れるオーストラリアの土人、アンダマン列島のミンコピー、アフリカのボシェスマン、アメリカ南端のフエギアン等あり、獵漁の稍進歩せるのみならず、犬を馴養し又は馴鹿を飼育して牧畜の端緒に就けるエスキモー、ラップの如きありて本階中に上段を占む。

オーストラリア土人が人類の最下級に止まりたるは生存の資料に乏しき地に孤立して窄積成の實を擧ぐること能はざりしに因れり。

ミンコピーは性愚にして欲望の單純なるにや列島に渡來したる後、自然的若しくは人爲的の刺戟を受くることなく、貝類、魚類を豊食し、而暖衣の要なく、棲舍の便を求むることなく、積成の念に乏しくして今日に至れり。

フエギアンは大陸より渡來したるものにしてパタゴン(Patagons)の追ふ所に係れりと認めらる、人類の進化に資すべき材料を缺如せる寂寞たる島地にありては墮落せざらんと欲するも得べからず。

ボシェスマンは太古の代にはアフリカの南部にありて廣大なる地域を占めしも、黑人に苦められ白人に逐はれ、禽獸に均しき待遇を受け、墮落に墮落を重ねて今日見るが如き可憐なる狀態を呈するなり。

エスキモーは北方派(Hyperboréens)に屬する他の種族と同樣に北極洋の沿岸に住みて獵漁に從事するが、獵具(鎗、弓、矢、等)、漁具(網、鈎、銛、等)、漁舟、等には稍見るべきものあるのみならず、犬を馴養して橇用に供し、アラスカに住めるものは馴鹿の飼育を知れり、生存狀態の佳ならざる彼等は接觸せる他種族の影響を蒙り易き弱點あるに拘らず、幸も進化の跡を認め難き底のものに非ざるが如し。

ラップはフイン派に屬す、住地に從ひて生存の情態を異にせるが、性單純にして、律義なるも蒙昧、親切なるも怠惰なり、而も接觸せる優種族の誘掖するあるが爲にや人口は增殖し、生存狀態にも進歩の跡を認む。

オーストラリア土人が人類界の最下階にありと認めらるるには實に正むを得ざるものの存するあり、大陸内部の山間、多少の濕氣水分ある地に棲息するものに

就きて寫述を試みんに、土地の抽象たるが如き彼等は食物の探求に汲々として日も尚ほ足らざれば、智力の發達極めて鈍く、現に極端なる採取時代にありて僅に半野犬「ダンゴ」(Dingo)を伴伴するに過ぎずして獵漁の產たる「カンガルー」「ヂンバット」「オッサム」、魚類、介類、等を主とし草を摘み、根を掘り、實を拾ひて不足を補ふを常とすれども、食するに物を選ぶの餘裕なき場合には眞に雜食動物たるの實を表はし、蜥蜴、蛇、蟻、幼蟲、鼠、等を喰ひ「イウガリ」の海綿狀根を吸りて渴を癒することあり、食料に豐なる際には暴食して身を害するに心附かざることあるも、乾燥期の永きに失するときは虛脫に陷りて遂に永眠するに至る、又熱心なる人肉啖に非ざるも之を實行する際には美味として飫くを知らざるが如し、北部の暖地にありては男女とも四季の別なく赤裸々なるも、中部及南部の地にありては獸皮を縫綴して肩掛に作りて寒氣を凌ぎ、叢叢の中「スピニフェック・ス」の間を行くに前掛と爲して刺傷を避け、獸毛を小束に纏めて腰、胸、背、等の裝飾に充つ、又黃色の細棒を鼻柱に貫き、缺きたる介殼にて皮膚を刻み傷痕にり依て文身す、不潔は彼等の厭ふ所に非ざるのみならず、毛髮に生ずる寄生蟲を狩りて娛樂に供すと云ふ、洞穴の中、岩塊の間、枝條の蔭に棲むもの多きも亦葉附の枝にて「ミッタ」(mitta)と稱する半球狀の小屋若しくはパプア式の草屋を作るものあり、武器には鉤(穗先は骨、堅木稀には石にて作らる)、石槌、石斧、等あるが、飛道具には「ブムランゲ」(bermerang)(飛去來器)及び「ブオンメラ」(Vommera)ありて防衛具には木製の楯あり、女子は植物性の纖維にて絲を繞り網を作り袋を製し「カンガルー」の骨の針を用ひて縫物を爲す、男子は概して樂樹に巧みなること猿の如しと稱せらるるも、操舟の技に拙にして僅に北岸の男子の弱木舟を作るものあるが、海岸を距ること數粁以上に航行を試みることなし、娛樂を好み、舞蹈(Korrobory)、投鎗、水潛り、等に熱中するが、繪畫、彫刻に對しては案外の趣味を有するに似たり、恐怖の念甚だ強く死、病、不幸、等を以て惡魔の仕業と信ずるを以て伏魔の任に當る妖術師の符呪行はる、婚禮葬儀の一端は開かれ、相應の制限、順序、等の備はるに拘らず、生存困難に基づくにや殺兒の惡習ありて保生の子女には注意を加ふ、女子は男子の所有物、奴隸たるの實あるを見ると同時に男多女少は爭鬪掠奪の因を爲せり、又小部落には酋長なきも、若干の氏族より成れる部族には長ありて各氏族は必ず「ルプレ」(長老)を戴き元老會を設けて之が制裁を仰げり而して各氏族には男子部と女子部との別ありて各、名稱を異にするを例とせるが、ニウーサウスエールスのカミラロイ(Kamiraloi)部族の如きは四氏族より成れるが故に男子部としてイパイ、クンボ、ムリ、クピの名あり、女子部としてイパタ、ブタ、マタ、クピタの名あり、且此等四氏族の「コボン」(Kolong)(守本尊?)即ち氏物は「カンガルー」「ガボッスン」「イグアス」「エミュー」なり。

ミンコピー(Mincopi)はアンダマン列島の土人なり、總數は約五千人ありて九部族を爲せるが、其のボギンギギチ(Boghingligiti)最も有力にして南部を占む、體軀微小(一四三糎)頭丸く、眼小さく、鼻潰れ、顎骨突進し、髮は羊毛狀を有し、皮膚は炭黑色を呈す、男女とも赤裸々にして單簡なる線條的刺墨を爲し、貝類を主食し、弓、矢、獨木舟、網、土器、等

を製し樹に巧みなること驚嘆するに足るものあり、獵漁を業として各處に轉移し、條枝を用ひて粗末なる小屋を作れり、性愚直にして爭鬪を好めるも、人肉を啖ふが如き惡習なく而も怒り易く慘酷なる行爲に出づること稀ならず、又信仰心の痕跡だも認むることなし。

フエギアン

フエギアン(Fuegians)即ちフエゴ人はアメリカの南端に於けるチエラデルフエゴに棲めり、體軀稍〻小さく(一五二糎乃至一六六糎)頭部は蒙古式に似たる所ありて胴部の發達頗る好く上肢長く下肢短し、貝類を生食又は煮食し、交ゆるに魚、鳥獸の肉を以てするも稀ゆるの甚しき時は人肉を啖ふことあり、斯る場合には老婦を先にすと云ふ、氣候の凜烈なるに拘らず被覆として海獸又は羊駝の毛皮一枚を携ふるのみ群嶼の間を往來して生存に苦辛する彼等は樹皮を繼ぎ合はせて作りたる長四五米突、幅一米突の小舟に命を繋ぐと云ふべきか、數疋の犬と共に一家同乘して隨處に漁獵を試み、獲物あるの間は其の地に滯留し條枝を束ねて圓形の小屋を構へ或は深さ數尺の竪穴を掘り海獸の皮又は粘土を屋被と爲し、中央に天窓を設けて煙出しと出入口とに充つ、女子は貝を拾ひ、保舟操舟の任に當り、男子は石鏃を備ふる矢を用ひ若しくは投石に依りて鳥獸を獵獲せんと勤む、信仰の跡なも認め得ざるも性質溫和にして恐怖の念强く克く辛苦に耐ゆ、而も獵漁の地域に就きて爭鬪を惹起

ボシマン

ボシマン(Bushmans)は一にボシエスマン(Bujesmans)と云ふ、アフリカの南部、オランイエ

河の中流の地に棲みて人類界の最下級に屬せり、生存の爲に苦辛を重ね、苛酷なる氣候との惡鬪に慣れし彼等は頑丈なる體質を備ふ、四五日の絶食後に獲物あらんか直に之を暴食す、五人にて一時間に肥へたる山羊一疋を又は半夜に大なる「クアッガ」を啖ひ盡し、滿腹に疲れて寢に就き饑渴の再び迫るに非ざれば起ることなし、野草の鱗莖塊根のみを用ひて數月を過ごし、白蟻、蜥蜴、蛇を得て快哉を呼ぶことあり弓矢は彼等唯一の工作品にして狩獵は彼等唯一の作業なり、親族間の關係極めて疎にして逃ぐる妻を追はざるも弱者の婦を奪ふこと珍からず、困難の際には老者を遺棄するに憚る所なし、戀々たるべき資質の備はらざる土地を所有せんと固執するの理なくして隨處に巢棲若しくは溝住し、羞恥の念の存するに拘らず僅に腰部に一片の皮を纏ふのみなるも、美想の殘れるにや頭髮に羽毛、骨片を結び附け、岩石の表面に描畫を爲すと云ふ。

エスキモー

エスキモー(Eskimo)はアメリカの赤皮の所謂「生肉喰ひ」にして同洲の北岸一帶の地に住み、陸上にあるときは熊、馴鹿、犬、等の毛皮を着せるも、海上に出づるときは皮革若しくは魚鱗にて作れる上着を被り、木製の遮光器を用ふ、住屋は季節に依りて異れるが、夏季には「セイウチ」「ホット」、等の海獸の皮にて覆ひたる幕屋の下に棲み、冬季には地下若しくは雪下に窖窟を作りて穴居し、毛皮附の褥を腰掛又は寢具に用ひ頁岩製の大盤中に魚油を注ぎ之に點火して光熱を採れり、獵漁に巧なる彼等は海上なると陸上なるとを問はず巨獸猛獸と鬪ひて之を獲得し、生存の資に供せるが

漁舟に二種あり、數人乘りなる「ウミアク」(Umiak)と云ひ、一人乘りなる「カヤク」(Kayak)と云ふ、孰れも木又は骨にて骨組を爲し之に獸皮を纏へり、弓矢を陸上の禽獸を獵獲するに用ひ、齒緣尖を有する銛を海獸の捕獲に使へるがエスキモーの多くは今に石器時代にありて骨牙にて柄、針、銛尖、等を作り、木製の橇を犬に牽かしむ、無智蒙昧なる彼等の不潔なるは驚くの外なきも、親族ありて部落に長なく、多妻も行はれ多夫も稀ならず、後の世、鬼神の存するを悟りて迷信深く惡覺を拂ひて厄難を避けんとせり殊に奇と爲すべきは描畫、彫刻を好めるの一事にして氷河時代にヨーロッパに棲息したる人類の生存狀態を追想せしむるに足るものあり。

ラップ(Lapp)はヨーロッパの極北の地に住めり、生存上の狀態より分かれて四級を爲す、沿海ラップ(Half-Lapp)は港灣の濱に木造小屋を構え、魚類に依りて生活せるが、ノルゲの海岸に棲めるものには多少の馴鹿、綿羊、瘠牛を飼育するあり、森林ラップ(Skog-Lapp)は毛皮獸の獵獲に加ふるに河湖の魚類、多少の馴鹿を以てし、小屋の中に棲めるも純然たる獵夫の生活を爲し、山岳ラップ(Fjill-Lapp)は遊牧者にして馴鹿を飼育し、冬季には內部の山間、溪流の濱に居るも夏季には沿海の地に赴けるが、突氣の凜烈なるに拘らず、終始小天幕の下に起臥して、肉乳を吸ひ毛皮を被れり、河流ラップ(Elf-Lapp)は河流の濱に生存して專ら漁業に從事せるも亦偶木、狩獵、等をも勸めり、若衣には馴鹿皮にて作れる長衣を纏ひ、狹き股引を穿ち、皮の長靴を用ふるが、食物は動物を主とし交ゆるに樹皮麪、麭、蕪の內皮を搗きて餅狀に爲し少の「ライ」麥麪麭を以てす、工作の如きは漁網、橇等の外、簡易なる骨器、木具、樹皮細工、等に限らる、信教に就きては古來の慣習を遺存すれども兎に角キリスト新教若しくは正教を奉ずるに至り、彼等の運命が漸次に改善せらるるは事實なり、四千萬平方粁足らずの地に據れる彼等に於てフィン、スエリゲ、ノルゲの三民族間の媒介者と成り、內部の產源を利用する上に資するあらんと信ずるは或は空望ならざるべし。

(二)鋤鍬的耕種

土地を耕耘して植物質の產源を利用するに至りて土着式の生活は現はれ、別種の文化は獵漁に據れる文化と並行して發達したり初期の耕耘は家畜の援助を俟つこと能はず、單に吾人が自己の腕力のみにて實施したるものにして所謂鋤、鍬、耕、耘(Hackbau)なり、斯る始原的耕種は森林を開き草原を燒くのみにて肥料を施さざるを以て勢ひ休閑の法に依るの要あれば土地廣く住人少なからざるべからず、然れども現時尙ほアフリカの回歸帶及び南アメリカの廣漠たる地域內に行はれ、印度支那、マライ群島、メラネシア、等の某々部族殊に黑人間には依然として存在せり、而して作物に就きて最初のものは「マニホット」(大薯)(Jatropha manihot)「イグナム」(大薯)(Dioscorea alata)「タロ」(Colocasia exculenta)「サツマイモ」(甘藷)(Ipomea batatas)、等にして穀物には「キビ」

(Panicum miliaceum)ウルキビ(稷)モチキビ(黍)を始めとし「モロコシ」(蜀黍)(Andropogon sorghum var. vulgaris)「トウモロコシ」(玉蜀黍)(Zea mays)等あり。

本階に屬する人類に就きては南アメリカのカライブは怜悧なるも溫良を缺きて適應を過まり、新ギニアのパプアは進取の傾向を有せざるに非ざれば誘掖の宜しからんことを祈る、ボルネオのダヤクは平等主義の犧牲と成れるやの疑ありて、印度支那のモイは迫害に堪えざるが如し、アフリカのヲロフ及びバンガラは外人の接觸より生ずる影響を蒙むると否らざるとに就きて好模範たるを失はず。

カライブ

カライブ(Carail)はアメリカの土人にしてアマゾニア派に屬す、新世界發見時代には小アンチラ地方に居りてヨーロッパ人に反抗し奮鬪惡戰を爲したる結果、其の跡を絶つに至りしも、南アメリカの北部に於ては現に若干の代表者を存してバカイリ(Bakairis)ヒンシ河の上流地アペイアカ(Apeinkus)トカンチ地方アポト(Apotos)、カビリ(Gabilis)、カリナ(kalinas)、マクシ(Makousis)以上ガイアナ地方マイオンコン(Maiongcongs)等の部族を爲せり、體軀稍〻小男子一六〇糎女子一四五糎皮膚は黃褐色を呈し赤味を帶び、髮黑し、頭短く、肩廣く、體格頑丈なるも、下肢は著しく細し、怜悧にして勇猛なるは稱すべきも慘酷に過ぎ、爭鬪を好みて人肉を喫ふこと罕ならず、女子は耕種に從ひ綿布を製し男子は兵事の外、獵漁を顧みるのみなるも、石器、土器、舟を造れり、多妻の風行はれ、上下の差等を設くることなく思想頗る幼稚なるも戰利品、獵獲物に豐富なる後の世を夢みざるに非ず。

パプア

パプア(Papouas)はマライ人のパプアー(Papuwah)縮髮人の義は新ギニア即ちパウアシアに起源を置くも、各方面に向ひて移住せしことありて新ゼーランドにも其の跡を認めたり、獵漁に依れる漂遊派と耕種を業ぬる土着派とに分かれ、甲者は南岸及び東岸に棲めるが、乙者は北部及び西部に住みて玉蜀黍、香蕉、甘藷、「セゴヤシ」、煙草、等を栽培し、銛を携へ漁舟「ラカトイ」(Lakatoi)に乘込み、近海を帆走して盛に漁獵を試み、沼池に毒を流して捕魚を爲し、石鏃の矢を大弓に番ひて野禽を獵獲す、常には植物性の食料、魚類、貝類を喰へども亦好みて爬蟲、昆蟲、粘土の中に美味を求むることあり、「ケウ」人の「カヴ」を飲み、「タバコ」を喫し又は咀めり、繪畫を好み、婚禮、葬式を擧げ、祝宴を開き、公會に依りて事を辨じ、疑しきは水火の判に委し、部落間には平和の風吹けども、他部族に對しては戰鬪絶えずして首狩、喫人の惡習遺これり。

ダヤク

ダヤク(Dayak)(約百萬人)はボルネオ島の五分の四を占む、マライ人、支那人等が沿海地に來住したるが故に多くは內部に住めるが、漂遊派と土着派とに分かる、甲者は純粹のダヤクにしてプナン(Punan)とオト(Ot)との二小民族より成れり、プナンは若干の部族を含みてクテイ、カプア、等の水源地に居り、勇猛にして爭鬪を好み、首狩を爲すの風を存するを以て隣接の部落部族に畏怖の念を起こし、オトはプナンの北方に棲みて稍〻平穩なり、乙者には二十二以上の小民族を算し、多少外人の血液を混じ

たるの跡を認む、甲者は山間の地にありて獵漁に從ひ、隨處に小屋を構へ、單簡なる生活を營める所謂生蕃なり、乙者は專ら農事を勤め、八ヶ年乃至十ヶ年の休閑を置き、作年毎に米、甘藷、玉蜀黍、野菜、等に就きて二回の收穫を爲し、貯藏に心懸くるを以て優に需要を滿たすのみならず、沿海地の住民に供給せらるるが、「グタベルカ」、籐、等の採取は獨產、蕃果、「マズアル」(Mesuar)野獸の內臟中に生ずる凝塊物等の產源と相俟ちて一層生計を豐ならしむ、加ふるに首狩は廢止せられ、獨身生活は稀なるに拘らず、人口の增殖を見ざるは惡疫の流行が一因を爲せるは事實なるべきも、主因は男女均勢の過度なるに歸するを以て適當なりと信ぜらる、女子は虐待せられざるのみならず、實行は少なき樣なれども兎に角、多夫多妻が奇異の感を起さざる底の男女平等主義に依れるを以て模範的の共稼は女子に對する過勞を來たし、母たる天職に影響を及ぼせる結果、出產數(四人を超ゆることなし)若しくは生育數(三人以下)に減少は現はるるならん。

モイ(Moi)は夥多の小部族より成りて印度支那に亘る山地に住めり、性溫良にして信じ易く、恐怖の念強く、懶惰にして風從を厭はず、所謂「其の日暮し」に「間に合はせ」て將來を顧慮することなく、從て得れば從て費し、山間冷濕の地に瘴癘の辛に堪え、食料欠乏の際に空腹を忍ぶも、強の之を避けんと努むることなし、農業を主とし、補ふに採拾獵獲を以てするが耕地は森林に火を懸けて得たるものに過ぎざるのみならず、牛馬を飼育せざるを以て尖頭を有せる竿杙樣のものにて耕耘し、三年毎に處を

換え、休閑地の雜草は燒きて除くなり、種米、初穗を敬ひ之に進ふものは神罰を蒙るとす、米穀以外に、野菜に菜豆、西瓜、甘藷、等あり、其の他に蕃根、藍、紅草、綿、「ウミー」、等あり工作の技は極めて始原的なるに相違なきも織物、染物、土器、青銅器、等の產ありて、武器には刀、鎗、弓矢、等あり、着衣は極めて單簡にして男子は一般に犢鼻褌を用ふるに過ぎずして女子は腹半に達するの腰卷を纏ふのみ、男女孰れも貝殼、眞鍮にて作れる頸環、眞鍮線の腕環、腹環を用ふるが、木製又は骨製の圓壔若しくは錫製の環を耳朶に嵌するを以て、細き肉紐は垂れて肩に達するが如き奇觀を呈せり、器具器物に製師を施すこと少なきも、樂器には粗末なれども笛、笙、琵琶、木琴、等に類するものあり、

ラロフ(Wolof)即ち「ヨロフ(Yolof)」はセネガンビアに住みて黑人中の黑人と稱せらる、言語は多少のフラー、マンヂンゴ、アラビアを交えざるに非ざるも、アフリカに行はるる各種の土語中に於て進歩せるものの一に算へらる、性溫和にして有爲、博愛、親切の心に富めるも、虛榮に傾き、後事を慮らず、殊に不潔、不整頓、暴食、亂飲の風あるを惜む、食物は「クスクス」(Cous-cous)に漬し肉に麵粉を交えて團子に作り油にて燻げたるもの魚類を主とし「ニエベ」の菜豆類「トマト」、玉葱、米、乳汁、獸肉、等を併用せるが、着衣は簡便にして男子用の「ツベ」(半股引)女子用の「ピンダル」(腰衣)、兩性用の「ブブ」(法被)に過ぎざるが、女子は頭を布にて包むも男子は髮を剃り帽を戴かず、圓形の茅舍に棲みて耕種に從事し落花生、豆類、野菜、等を與ふるが、市街に住みて外人に接するものには雜工、商賈、等あり、社會は貴、兵、工奴の四階級に分たれ、女子は概して勞役多し、信仰に關してはマホメット教又はキ

リスト教を奉ずと稱するものあるも在來の祝祭は熱心に行はれ、蜥蜴に神事すること舊の如し、殊に「マラブー」(回教僧)は博識の譽高く教育の任に當れり。

バンガラ(Bangala)河人、はコンゴとウバンギとの間に於ける半島に住めり、體軀大きく骨格堅固にして形相に愛嬌あるも眉睫を拔き齒を削るの惡習は之を害へり

バンツ派に屬する語を用ふるが、性怜悧にして活潑、摸倣に巧にして歐化するを厭はず、頭領、貴族、常民、奴隷の四階級ありて常民は獵漁に任じ、耕種を指揮し、奴隷は耕耘、土工、金工、木工、等の各業に從事し、貴族は專ら兵事に當れり、孰れも操舟游泳に巧にして徒行に拙なし、方形の茅舍に棲み、椰絲布にて着衣を作り、食物には植物質のものに豊にして動物性にも不足なきも、人肉を啖ふの風は未だ絶滅するに至らず、多妻主義行はれ、女子は商品視せらるるも亦逆待せらるること少なく、葬式に壯風ありて殉死を當然とす、女子は脚靴に特殊の文身を施し、唱歌、舞蹈に耽けるも、軍舞は男子に限らる、左岸の地に住める同族のボロンボ(Bolombo)を合はすれば約十四萬人に達すべし、大多數が奴隷より成るに拘らず、若干の貴族の配下にありて頭領の統御する所に係れり。

半開的文化

半開的文化の人類に就きては漂遊的牧畜を主とするものと改良的耕種に依れるものとの二階を設けたり。

(一)漂遊的牧畜

土地の狀態に依りては耕種すること能はずして、茂草の地、荒蕪の地に於ては食草獸の繁殖するありて、斯る地方に生存せんとせし人類の爲には產源利泉と成りて遊牧的生活は現はれたり、綿羊、山羊、馬、驢、駱駝、等を率ひ、季節に應じて牧場を換へ、夏季の牧場を求め、冬季の牧場を探りて遠路を自由に往來し、帳幕を運び、家族を伴ふ、所謂遊牧の民は存するなり。

遊牧の發展せしは始原的耕種の後にして漂遊的牧畜と土着的耕種との間には常に密接なる關係を有てり、甲者の生存には活動辛苦多くして體力發達し、不羈獨立の趣味は養はれ、統御的階級制度の下に規律正しく共產的組織を完うするに至るありて強大の觀念起り、乙者は土地を撫育して執着の念強く、無事平和を祈り、餘財を蓄積して共存の眞味を樂めり、畜產と農產との交換行はれて相互的實利實益を舉ぐべきなれども、時に或は强者が弱者を凌ぎて刼掠(razzia)とは成りたるなり、遊牧の蒙古人若しくは滿洲人が耕種の漢族を侵し、スダン若しくは「オアシス」の土着民が半沙漠の漂遊人に苦められしは顯著なる事實とす。

遊牧者が畜產を利用する上に於ても差等存し、使途に廣狹あり、乳汁を用

ふるに止まりて食肉を制限するあり、乳肉を食料に供するの外、毛皮を着衣居住に適用するあり。

本階に屬する人類に就きては接觸せる耕種者の進化に伴なはざりしと信奉せる宗教の爲に軟化せられしとに由りて現況を呈するに至れるハルハ、過度の寡慾が因を爲せる消極的萬古不易のソマーリ、特殊の威壓的制度の下に好個の遊牧民たるマッサイ、往古の盛大を忘れて粗食を以て獨立を購へる遊牧的のベドイン(Bedouins)、遊牧と商業とを兼ぬる牧駝者たるツアレグ、特殊の發達を遂げしラヂプッ、等を擧げたり。

ハルハ(喀爾喀)(Khalkhas)は蒙古族の一派にして外蒙古の東部に住めり、形貌は同族中純粋なるものに屬し、言語は連綴的にしてツラル＝アルタイ系に加へらる、往昔の如く勇悍ならざるも質朴にして猜疑の念少なく、獨立の俤を存せざるに非ざるも怠惰風を爲して平和を好み後事を慮らず「ツゲル」(tzu-jher)(小成に安ずるの意)は彼等が生存上の原則たり、温氣を厭ふの結果、沐浴洗濯すること罕にして不潔を生じ、身邊屋内共に寄生蟲の横行するに任かす、食物は獸肉を主とし麭粉、酥酪(Kou-mys)、磚茶、燒酒、等を用ふるも魚鳥肉の如きは汚物として排斥せらる、衣服は漢式にして絲邊の反上せる帽を戴き、鞋を穿ち、女子は頭髮を二條に辮し、耳環、手釧、等を具ふ

住屋には二種あり、定住者は圓形若しくは方形の土屋を構え、游牧者は遷移に便なる圓形の帳屋内に起臥せり、宗教は喇嘛教の黄派行はれ、教育は官吏、僧徒に限られ知識發達の程度は一般に低しと云はざるを得ず、特に注意すべきは掠奪の皆無なるは勿論竊盜の稀なる點にありて、信奉せる教旨に基づけるものなるべきも游牧の民には大に珍とする所なり。

ソマーリ(Somalis)は東アフリカにありてアデン灣と印度洋との間に挾まる三角形の地に住めるが、アラビア人又はネグロの混淆を受けたるを以て形貌に一樣ならざるものあり、皮色濃褐、髮黑く、縮れて長く、面相整ひ、頭甚だ長く、四肢細く脚莖著しからず、「イスラム」教を奉ずるが爲め肉食に制限を設け、黍を主とすれども木實、草の根又は葉を用ひ、食物の粗末なるは驚嘆するに足るものあり、海岸に定住するものには漁人、舟子、商賈、等あるも、其の他は概ね遊牧の民にして中には獵漁を兼ぬるものあり、蓋し廣漠たる地は癖せて利源に乏しからんも、彼等が綿密なる勞役を厭ふて耕種を試みざるも亦一因なるべし、綿製の敷布樣のものを身に纏ひ、搬搬に便なる「ケルギ」(Gourguis)(吳座又獸皮にて作りたる帳幕の小屋)の内に坐臥し、今に岩塊の間に太平を夢みるものあり、寡慾は因を爲して道に遺を拾はず、爭鬪少なく、掠奪の如きは殆と其の跡を認むることなし。

マッサイ(Massai)は東アフリカの赤道部、ガルラ地方の南々西、ビクトリア湖と海岸との間に住めり、身丈高く(一八二糎)、姿樣整へり、鼻直く、眼大きく、唇は厚薄一ならず、

て顴骨秀で頭狹く髮は尋常なるも顯毛少なし、習慣の結果としては耳朶大きく、齒並惡しく、下門齒二枚を缺き、股に特符を燒記せり、地味肥沃にして健康に適せる高臺に據り、ロクアフィ(Wakonafie)に威壓を加へて耕耘に從事する土著民たらしめ、アンドロッボ(Andorobbo)を使役して狩獵に當らしめ、土器の製作、物品の交換に任ぜしめ、自ら遊牧の業を採り軍職を兼れ、若干の部族(Krrri)を爲せり、兵器は鉾、刀、槌、楯等の舊式ものに過ぎざるも軍規は意外に發達して兵員は未婚者に限られ、特殊の陣營中に起臥して相應の訓育を受け、若干の部隊を組織せるが「レイツヌ」(Leitounou)(司令官)は各部族の代表者たる「レイゴナニ」(Leigonani)の選擧推薦する所に係りて生殺與奪の大權を握れり、常民は既婚者、婦女、小供、僕婢等より成り、季節に從ひて或區域内に遊牧す殊に注意すべきは軍人は肉食し、婦人小供は植物性食品に限られ、既婚男子は動植兩者を折中して食用するの一事なり、而して信仰に關して高山キリマヌヂアロの頂に鎭座せる「ガイ」(Ngai)を至高の神として崇拜せるも亦「ネイチュルコブ」(從神)、「レイブ」(呪術師)、等を信ぜり。

ベドイン(Bédouins)はアラビア種族の一派なり、本種族は特殊の狀況を呈せる廣大なる半島に棲居し、形貌、言語、信仰、等の根本に於ては一致せるも住域内の事情の均等ならざるが爲め生存の狀態に不同を來たし、從て氣質、風俗、生業、等に就きては甚しき隔離を生じ、土著(Arabes)と漂遊(ベドイン)(Bédouins)との兩派を出現せしめたり、甲者は半島の南部南東部に住み、乙者は北部を占む、甲者は多く市街の地に住みて商業

に從事し、或程度の教育、學術を保持するもボットマンの圍繞する所と成りて活動すること能はず、往古の尊大を夢みるに過ぎざるが、オマーン(Omân)に於ては稍見るべきもの存するあり、乙者は牧畜を沙漠の地に營みて適處を往來し生存に係はる需要の稀少なるに基づきて不羈獨立の實を擧げ、爭鬪を好み掠奪を敢し迷信深く怒に乘じて殘酷に至ることあるも亦博愛の念、寛大の心、等を具ふ、殊に兩者に共通なるは少量の粗食を以て足れりとするにあり、是れ彼等の德行の高きに據るに非ずして氣候の然らしむる所ならん、「ッーラ」(dourra)(Sorghum vulgare)(蜀黍)に添ふるに駱駝の乳汁を以てし、油脂、「バタ」、等を加味して日に一食するは普通人の常にして肉を啖ふこと少なく、豚を用ひざるは古來の慣習なりとす。

ツアレグ(Touareg)(約二十萬人)は自ら稱してイモシハグ(Imochagh)と言ふ、白種のベルベリア群に屬し、西サハラの中部に居りて若干の部族より成れるが、北のアズヂエル(Azdjer)及びアハッガール(Ahaggar)と南のアイル(Air)及びアエレンミデン(Aouelemmiden)の四盟に分かる、而して部族に貴賤の別ありて「イハッガーレン」(ihaggaren)即ち貴族は主權を握り「イムルハード」(imrhad)即ち賤族を支配し、兩者の中間に貢族あり、「マラブー」(Marabouts)即ち識者は別に部族を爲して專頭政治の社會に立ち、仲裁、和解、教育の任に當り、漂遊して爭鬪の絶えざる各部族間の鎖鎖たるあり、貴族は純粹のベルベルにして其の他には多少の黑血を交ゆ、丈高く、面長く、額廣く頰秀で、眼大きく、鼻狹く、四肢長く、手足小さく體格頑丈、體質强健なり、殊に步調の駝鳥的なるを奇とす、長髭、褐髮、黑色若しくは

白色の「ヂエバ」(djeba)(上衣)を羽織り、腰帯を穿ち、頭巾「シブシア」(chuchia)を冠り、「チウルバン」(turbam)様の布片を纏ひ「リタム」(litham)にて面を覆へり、食物は粗にして少なく、綿羊、駱駝の乳肉を主とし、幔幕の下に起臥せり、遊牧を主業とするも或は商賈として隊商を組織し、或は誘導者として商隊保護の任に當れるが、往々「オアシス」(泉地)、若しくは隣接地の土着者又は「サハラ」通過の隊商を襲ひて劫奪(razzia)を逞しうすることあり自ら「ムイズルマン」と稱するも男子は漂遊的業務を專にして家居するに適あらず、女子は主として財産扶殖の任に當れるが故に母尊主義(matriarcat)行はれ、殊に婦人に所習操なるものの皆無なるは當該地方を旅行通過せるものの一驚を喫せし所なりとす。

ラヂウツ(Radjputs)が西紀第四世期若しくは第五世期に於てインドス河を渡りし頃には騎馬を能くし鎗を携へ隊伍を組み規律正しく君主を戴き「日輪の行使」なりとして馬を崇拜すること浅からず、大変に當ては人身を犠牲に供し、妻女は殉死し愛嬢は惜殺せられしが、二三世期をラヂプタナの沙漠中に過ごせし際、ヂアイナ教の信者と成り、氣力を養ひ、武藝を研きし結果にや、西紀第六世期と第七世期との間に於て出でて中央印度を侵し、佛教を奉ぜるスドラ派の王朝を覆し、勢威大に振ひしかば「ブラマヌ」は之を擧げて「クシアトリア」(Kshatriyas)(軍族)の後繼者と爲し、國家防衛の任を授けたり、斯の如く傳説はラヂプツを以て初期のアーリア人たることを認めざれども、形貌體格より推するときは、彼等が正にアーリアの一支族たるは明にして中央アジアの高原に殘留したるアーリア的部族がツラニア派若しくはウグリ派の大活動に迫られ舉族移住を試みたるの結果なるべしと信ぜらる。ラヂプトは幾多の部族、氏族に分かれ、印度の各方面に配布せらるるが、密群はベンヂアブの南にありてラヂプタナを爲し、ヂアーと共存せり、體力の支持に意を注げる彼等は同氏族間の結婚を禁じ、軍士たるの特性に因れるにや婦女の保護を厚うせり。

(二)改良的耕種

耕種の方法は漸次に改良を加へられ、著しき發達を遂げて特殊の狀態を呈するに至りたるが、灌漑の利、肥料の功に負ふ所大なりとす、地方に依りて栽培せらるる植物の種類を異にするは勿論なれども、品種は概して增加し、殊に耕耘に非常の注意を拂ふことあり、而して養豚、養鶏の如きも併はせ行ひて土着定住の効果漸く現はれ、生計に餘裕を生ずるの傾向を呈し、文化に一段の進歩を觀んとす、往昔ペルー發見當時に於けるインカ(Incas)が實行しつつありし所に係り、現今にても南清、印度支那、マライ群島等の或地方幷にポリネシア、ミクロネシア、マダガスカル等に行はる。

本階に屬する人類として印度支那のラオス、ポリネシアのトンガ、マダガスカルのホヴァを掲げたり。

ラオス(老撾)はタイ(Thai)族の一部にしてシアム人のタイノイ(Thai-noi)(新タイ)と稱するに對し自ら呼びてタイヤイ(Thai-yai)(舊タイ)と云ふ、住域はラオス以外に亘りてトランニン(Tran-ninh)方面にありてはフウン(Phueun)又はフオン(Phuon)と稱し、トンキンの邊境に於てはトー(Tho)と云ひ、廣東省の西部にてはツージヨン(Tou-jen)と呼ばる、體軀稍〻小(一六〇糎)にして体質強く姿樣醜らす、皮膚は褐色を呈し濃厚なるに非ざるも燒け易し、面貌には樣々ありて概稍〻高く、狹く眉骨著しからす、眼は凹窪的ならざるも多少斜なり、鼻は低く凹曲して鼻口見え易く、口唇にして唇厚からす、廣頭にして髮は太く直く黑色を有し斷面圓く、形相溫和にして愛嬌あり、四肢發達し脛長く足小さく、體力優れたりと云ふに非ざるも游泳、徒行、奔走、等に耐え易し、言語はシアム語に似て發音柔く鳴禽の囀るに比すべし、語法簡にして學び易く、特殊の文字備はれり性質溫和にして殺人を犯すもの罕なるは美とすべきも、懶惰にして娯樂に耽り易く、生活の度低く困難を覺えざるにや、貯蓄の念乏しく少しく餘裕あらんか直に奢侈的に浪費するの風あり、杙式の茅舍に住みて米飯に魚、水牛、豚の肉、若しくは雞卵を添へて常食と爲し、腰卷、短衣に加ふるに帶、褌を以てし、女子は殊に頸環、腕環、耳環を用ふるが、西部のものは腹股に刺墨して綿蕾、圓樣を現はせるが故に俗に黑腹ヲカスと呼ばる、女子は勤勉にして耕作、紡織、裁縫、等に當り、奴隷の助力に依りて百事を便するを以て男子は獵漁の外、他を顧るの要なく、安逸を貪るの弊風を馴致し、巷、進歩發展するの傾向を認むる能はす、然れども農產には梗米、糯米、玉蜀黍、草綿、落花生、胡麻、藍、黃麻、「ラミー」等あり、其の他、果樹の栽培を試み、水牛を飼ひ「セブ」(牛の一種)、野鶏を捕養せり。

トンガ(Tonga)人はポリネシア派に屬し、形貌の優れるのみならす、性活潑にして智力に富み、愛想好く、元氣ありて信に厚く唯、盜癖あるを惜むのみ、食物は植物質を主とし、魚、雞、鼠、等を副ふるが、豚肉は特遇を受け、酷百質の「カワ」(Kawa)を用ふ、原來は帶狀のものを着用せしに過ぎざりしが、現今洋服行はる、髮は或は長く蓄へ或は短く切りて一樣ならざるも石灰若しくは薑黃(Curcuma longa)を用ひて赤色又は褐色に染め られ、文身は廢止せられたり、椰樹又は林投樹の葉、甘蔗の莖にて家根を葺けり、長く して低き屋舍は不規則に建てられて村落を爲し樹間に隱見せるが、夜間或は雨天の節に用を爲すのみにして、貴族の家は稍〻高くして多少の裝飾加へられ、集會所及び接待所は一層高く大きく設けらる、農作に就きては肥料を施すことなきも輪作法行はれて「ナガイモ」、香蕉、椰樹、麪麭樹、桑樹、カワ樹(piper methysicum)を與ふるが、近年は煙草、玉蜀黍、珈琲、草綿、等の栽培行はれ、豚、雞の飼育にも見るべきものあり、漁業に關しては漁網、漁舟單式複式の製作に巧なるが大形の船舶を製造せんとするときは適材に豊なるフィヂー島に出張すと云ふ又海員としてはかセアニア第一と稱せらる、而して工業に就きては桑皮にて細布を製し、麪麭樹皮にて粗布を作り、黑、赤、黃に染色し林投樹、椰樹、等の葉にて莫座、網、籠、等を編み、椰子油を搾取せり、尙武の風ありて古來遠征を試みしこと少なからざるが、兵器は改良せられて西洋製の小銃、小斧を用ひ

太陰暦、醫術、等多少の學識を蓄へ、遊戯、唱歌、舞踊を好み、基督教を奉じ、立憲王國としてイギリスの保護の下に置かる。

ホヴァ(Hovas)は マダガスカルのイメリナ廣地に住めるが、形貌、言語、等に依りて其の起源のマライ的なるは明瞭なり、渡來の後、南東岸に據りしも、黑人の間に介在して苦闘を重ね、漸次に內部の盆地を容れ、第十八世期の始の頃より勢力全島に加はり統一制度を布き、爾來基督教を奉じ、西洋の文物を容るるを厭はず、活氣に富み智力に豐なるも、陰險にして慘酷、專ら武力を練るに勤めしを以て經濟上の發達には遲々たるものあり、蓋「アンドリアナ」(andrianas)(貴族)が上流にありて「ホヴァ」(hovas)(常民)を支配し、「アンデヴォ」(andevo)(奴隷)を使役し、耕種、牧畜、漁獲、製織、等の所謂稼業を蔑視せしに由るならん、然れども米を始めとし、甘藷、香蕉、「イケナム」、「マニホット」、菜豆、瓜類、等を產し柑類、桃、桑、等を栽培し、染料、油料にも乏しからず、畜類には「ゼブ」、大尾羊、山羊ありて鷄、鴨、鵝も養はる、製作に依れる品種多からざるも、「サラカ」(salaka)(腰衣)及び「ランバ」(lamba)(金衣)に就きて工技に巧なるを認む、又屋舍は樹幹を柱とし、竹を用ひて屋根及び周邊の骨組を爲し、覆ふに椰葉を以てす。

旺盛的文化

旺盛的文化に達したる人類に就きては耕種は大に進みて改善の狀況を呈し、牧畜も著しく進化し、牛類の飼育行はれて農牧は提携し、漂遊は跡を絕ちて全然土着者の世とは成りたり、而して交通の便に空前の發展ありて百貨の集散は思想の交換と相俱ち、工業大に興り、商業大に振ひ、平和的競爭の中に吾人の生存狀態は革新せられ、人類は一大集團を爲して身神の幸福を獲得せんと活動するの傾向を呈せり、されば本級に就きて優秀的農牧と般大的商工との二階を設けたり。

(一)優秀的農牧

耕種の上進は主として犁の使用に基づけり、蓋し犁の發明は牛族の飼育と相俱ちて耕耘を便にし穀物栽培の進化を促し水稻と小麥との發達を觀るに至りたるなり、犁耕の起源はメソポタミアにありて有史以前なるべしと信ぜらるるが、漸次に擴まりて西アジアを始めとし、一面には印度、支那、等に傳はり、他方にはヨーロッパ、北アフリカ、等を抱括し、ヨーロッパの移民と共にアメリカ洲の溫地に到達したり、斯の如くして犁耕は主として黃人と白人との利用する所と成りて人類中の最進歩したるもの、生活の度が最高きものの生存に資せしを以て群衆は愈稠密と成り、增收は又增收を促して人工的の灌漑は實行せられ、施肥の方法は改良せられ、殊に肥料には日進月歩するありて牧畜の副產物、吾人の排泄物は勿論、海藻、魚糟、獸滓骨粉、

硝石、各種の化學的肥料、等を用ふるなり、而して家畜利用の道を熟知するに及びて牧業は大に振興せしが、牛類の飼育は啻に本業の發展に資せしのみならず、經濟界に對し一新時期を畫せりと云ふを得るなるべし、蓋し山羊、綿羊は被覆、食料を與へ、馬、驢、騾、駱駝は力役に供せられしが、牛類は効用の上に於て實に萬能的なるの優れるあるに止まらず、吾人の文化に關し農牧の提携を促して漂掠、爭奪の跡を絶ち、飢饉凶荒の憂を消し、生存の基礎を固め安寧福利を增進せしめし結果、生計上に餘裕を生じ、積成の實擧がりて各種の需要を釀成して各派の小工業が改良發展を見たるのみならず、交通發達の基を爲して美術、文藝、學識の振興、交換と成りて當代の文明に空前の光輝を發揮せしむるに與りて力ありしなるべし。

本階に屬すべき種族に就きてはニールの恩惠に慣れて進歩に意なきが如きエジプトのフェラー(Fellahs)即ちフェラーヒン(Fellahin)はエジプトの先住者にして多少アラビア化ブ、意外の發展を遂げ向上して止まざるマジアルを記さんとす。

したるしるしのない、アラビア語のフェラヘン(Fellahin)より出でし名稱にして耕作者の義なり、當國住民の四分の三以上を占むるが、アラビア語を用ひ、マホメット教を奉ずる點より考ふればアラビア的なるも、形貌より觀るときは、先住者の一派たるコプト(Copt)(キリスト教を捨てずしてアラビア化することを免れしもの)に酷似せり、性意情にして恐怖の念强く、擧動に遲滯の狀あり、蓋多年の壓迫侮蔑の下に貧苦困難を忍びしが爲めならん、然れども員數に於て職業に於て農國たるエジプトの基礎を爲せる本種族が重要視せられて大に活動すべき筈なるに、原來ニールの氾濫は施肥と耕耘とを兼ねるを以て河水の氾濫なき畑地には河土を撒布して河水を灌ぐに過ぎずして農牛は河水の汲上に用ひらる、斯の如くして毎歲二回乃至三回の收穫を得るなれば耕種は極めて簡便なるに相違なきも効果の如何は全然エジプトの父なりとの稱あるニール河に委ねるにあり、從て歲の豐凶は河水氾濫の程度に係れるを以て人力は主として堰堤築堤の如き用水工事に向けられ、栽培法、農具類の改良に意を留むることなく今に「ハラオン」時代の犂と大差なきものを使ふが如く著しき進歩の跡を認めざるが故に往古の狀態に比し衰退の事實なしとするも不進の結果、現況には見るに足るものなしと云はざるを得ず。

スルブ 即ちスルビヤ人は西紀第七世期の頃ガリチエンより來移して牧畜に從事せしが耕種を試み、漸次に發達を遂げて今日に至れり、養畜は山羊、綿羊、豚を與へ、牛馬の飼育も行はるるが、方法は舊慣に依りて進歩の跡は認め難し、耕種は施肥を爲

さず、初年に小麥又は「ライ」麥、次年に玉蜀黍、翌年休閑の順に從へる三年法に依りて、始原的たるを免れず、體軀大きく、相貌醜からざるも、性質に粗野なる所あり、殊に所有、組合に關する思想、大族生活、等より考ふるときは現に半開時代を遠く離れ居らざるを疑はしむ、蓋し同棲上に關する慣習律は「ザドルガ」(zadrougi)(大族)と「イノコクチナ」(inokochtina)(小族)との別を設けて甲者に就きては首長「スタリエキナ」(staricchina)(長老)を以て「ザドルガ」即ち組合の代表者とするに過ぎずして乙者には普通の家長權を與ふるが、實際に於ては大小の差あるのみにて個人的所有權は毫も認められざるなり又「ザドルガ」に「ドマチツア」(domatchiza)(主婦)を置きて女子の職務に關する指揮者たらしむることあり、然れども一面には彼等は獨立に熱中するも之を「ザドルガ」以外に提獻することなく、政治的統一の結果たる國家の爲に奮闘する際と雖も直接「ザドルガ」の爲に忠を盡すと信ずるもの多し、されば政治的活動に關しては極めて偏狹なる個人主義行はれ、政黨を組織すること困難なり、生來の民主々義者にして官尊民卑の跡なく、傳傳に厚しと云はんより寧ろ儀式を迷信的に尊重すと稱すべし、博愛の心深く、智力豊に悟覺鋭く、殊に音樂に秀でて傑作少なからず、而も思想に規律を缺き、業務に當りて持續適應の念に乏しきを缺點とす。

マジアル(Magyars)は一に「マザアル」(Madjars)と記す「土地の子」の義なりと云へども、現存のフィン族の一部族メッチェリアク(Mechtcheriak)より出でしと爲すに理由あり、又古書に據るときは現今のブオグル、チエレミス、オスチアク、等はウグリ(Ougri)、ウンゲル(Ungri)、ウンゴリ(Ungori)、等の名を以て總稱せられ、之よりホンガリア、ウンガルン、等の稱呼も出でしなり、而して第九世期の頃ペチェネーグ(Pétchenegues)の逐ふ所と成りて南ロシアの平野を去り、ヨーロッパの中央に現はれし當時より、彼等はスラブの爲にウグリ又はウンゲリと呼ばれ來たれり、體軀は中位にして頭丸く、顏面は菱形を呈し、髮黑く、皮色淡褐なり、殊に髭長く硬く立派なりとの高評あり、就中貴族の姿樣には優れたる所ありて蒙古式に關係なきが如くに判ぜらるるも、マジアルの原種たるべしと信ぜらるるものには形貌のアジア的なるありて平種を組成せるが、優種はスラブ若しくはゼルマンの血を交えたるに因るなるべし、又官語より歸納するもフィンウゲリ語にスラブ語を交えつつ進化したるものと認めらる、然れども「アンベリー」(Vambery)一派の主張する所に據れば「マジアル」を以てトルコタタルの一部族が歐化し進歩したるの結果なりと云ふ、要するに「マジアル」の原種がウグリ派若しくはトルコ派の孰れに屬するとするも、北方の「ステップ」的の地にありし頃遊牧者として或程度の發達を爲せしものが止むを得ざる事情の下に南下してヨーロッパの中央に出でし頃には暴威を四隣に振ひしが、ドナフ及びチッサ(Tisza)の流域に居を占めてより爾來信教を改め「スラブ」及びゼルマンの血を交えて漸次の進化を實現しつつあり、天眞の致す所か「ケリヤス」(Cerias)(牧牛者)「ユハス」(Juhasz)(畜羊者)大に增加し適應の結果遊牧は一進して定牧と成り殊に「シコス」(Csikos)(官馬者)は騎馬を能しロシアの「ステップ」に於けるカザック(Kazaks)及びアルヘンチナの「パンパ」に於けるゴーショ(Gauchos)と共に世界の三

大騎巧者として亦稱せらる。牛馬の飼育は耕種の進歩を誘致しマジアルは更に一進再變して農牧兼備の良民と化し、ヨーロッパに於ける參倉の一を建設するに至れるが、今や工業界の人たらんと志し前途頗る有望なり、尚武の氣高く、愛國の念強く自由獨立の志固く、「ウンガルン以外にウンガルンなく」「バナー(Banat)は麥を與へ、チッサ(Tisza)は酒と肉を與へ、山岳は鹽と金を與ふ、此の國に何の不足なし」と、實に彼のマジアルは九百萬人に足らざる民族なるも此の心を以て立ち此の概を以て進み來りて今日に至れり。

(二)殷大的工商　農牧の提携は人生の發展に資する所多く、文化大に進みて旺盛の境域に達したるもの少なからざりしが、或は暑氣の弄ぶ所と成りて氣力消沈し、意志軟化し、之が爲に小成に安ずるの結果を生じて創意創案の念鈍く、遂に進歩の跡を絶つに及べるあり、或は人爲の妨礙に遇ひて過往すること能はず、天與の才を抱きて之を利用するに至らず、僅に現在の地位を默守するに止まるあり、既に失意の境遇を覩じて墮落の傾向を呈せるあり、然るに溫帶の地に於ける人類の中には海陸の形貌を始めとし寒暑乾濕に相應の變化異狀あるも得失利害に固定の律呂を生ずることなきが爲の適應の良否は結果の好惡に關する所以を悟りたるものありて豫覺警戒の念深く、創意案排の志厚く、天然の威壓を脱し、人爲の敵對を凌がんと企圖して止まず、遂に特殊優秀なる性格を備ふるに至り、生存上の原則に係る大綱を提げて人生の壯麗なる進歩發達即ち高度の文化には接近したるなり、發見は發見を誘ひ、發明は發明を生みて知識技能大に發展し、原料の實在は加工の振興を促し、大工業の出現を督し、交通の便は通商の利に資するのみならず、學術の普及交換に援助を與へて奏功に偉大なるものあり、されば生産に就きては原生物を採取、獵獲、漁得、抽出するのみならず、造林、栽樹、耕種、栽培、牧畜、養禽、養蟲、養魚、養貝等を務めて助成の効果を收め以て原料の産出を豊富にし、古來の手工に依るものの外、大に機械を利用して分業の實益を擧げ以て各種の製品を饒多ならしめんとはするなり、斯の如くして複雜なるも而も系統ある活動の下に吾人は勤進怠退、行福止禍が事實として現はるるを認めざるを得ざるなり。

本階に屬する人類は所謂國民(nation)を組織するに至れるものにして、其の

起源を北半球の緯度三十度乃至五十度の地に置きてヨーロッパより大西洋を隔てて北アメリカに到り太平洋を渡りて我が日本に達せり、ヨーロッパにありては西部のイギリス、ドイツ、フランス、ベルジック、シュワイツ、イタリア、オランダ最も盛にしてエスパニア、ポルトガルは不進の狀態にあるも、餘喘をアメリカの中央以南の新國に保ち、北部にロシア、ノルゲ、スエリゲ、ダンマルクありて其の他にエステルライヒ、ギリシア、等あり、北アメリカには合衆國あり、アングロサクソンに交ゆるにドイツ人、アイリッシュ、各方面のヨーロッパ人を以てせしのみならず、黑人、黃人、赤人、等をも包括せる混成國民は產源多き土地に據りて經濟上に偉大なる發達を遂げ、尙ほ進みて帝國主義を貫かんと勤むるが如し、アジアの絕東に於ける日本は建國以來漸次に積成したる文明の要素に基づき意を決して競爭場裡に入るや適應宜しきを得て僅々五十年間に長足の進步を爲し百難を排して今日あるを致せるも、未だ富力に缺くる所あるを遺憾とせるに、獨り大英國は數百年來發展に繼ぐに發展を以てして富國强兵の實を擧げ、曾に西ヨーロッパに覇權を握れるのみならず、カナダに、オーストラリアに、アフリカの南端に優邦を創立す、るの雅量ありて藩屏國に信賴するを得、要處適處に領土を保有して通商の增進と擁護とに當らしめ、之に由りて空前の世界的强大國を建設するに至りしが、ドイツ國幷にアメリカ合衆國の如き競爭者の現はるるありて繁忙を極むと推せらる。

文化の度より見るときは多く讓る所なき所謂ユダヤ人には經歷の上に於て頗る奇なるものありて人爲的事情が人類に如何なる影響を及ぼすかを了知するの好材料なるべしと信じ特に之を記述することとせり。

ユダヤ人(Judaei)はイギリス人のジュー(Jews)にしてフランス人のジュイフ(Juifs)なり、古國ユダヤの住民たりし白種セム派に屬するヘブライ(Hebrui)の子孫なりと稱せらるるも、現時にありては一國民を組織し又は一地方に於て一大團を爲すことなく區々たる小社會を結びて處々に孤立散居せり、抑、ヘブライ即ちイスラエル族(Bne Israel)は世界最舊民族の一にしてシリアの南方よりエジプトの北東に至る地に漂遊せしが、モスシ(Moshe)の敎導の下に團結を堅うし、パレスチナの地に來りカナネア人等に擧びて土着者と變じ、農工の各業を勤め、ダビッドの世に至りて勢大に振ひしも(西紀前十世期)ナビッコドノソルの攻略を蒙りて國亡び、王族は僧侶、富豪等と共にバビロニアに移されて、前ヘブライは終焉を告げたり(前五八八年)、其の後ペルシア

王キロス(Kurush)の許容する所と成りて舊地に歸來し(西紀前五三八年)、復興を圖りしが、僧族の勢力漸く強く、宗教上の發達に見るべきものありしに拘らず、國家の盛衰常なく、ギリシアに隷し、シリアに苦められ自治時代(西紀前一四三——六三、三七——四)を經てローマの壓迫大に加はり、數回の奮鬪を試みたる後、パルカシエ(Par-Casheba)事件(西紀一、三〇——一三五)の結果、ユダヤ國は再び滅し、遂に後ヘブライは政治上の統一と生命とを失ひたり、爾來特殊の漂遊種族たるに過ぎざるユダヤ人はローマ帝國の各地を始め、其の他に移住分散したるが、東方にありてはパレスチナに殘留せしものはローマ人と融化するを得て小康を保ちしも、該帝國がキリスト教を奉ずるに及びて迫害を蒙り、瀕死の境遇に沈淪せし際、アラビア人の來侵ありて遂に永眠せざるを得ざりき、又雖をパビロニアに避けし一派のユダヤ人は謫領(reich galoutn)の配下に盛衰常なく僅に餘喘を保ちつつ第十一世期の中葉に至りしに、マホメット教の窮迫する所と成りて苦悶に陷りしが蒙古人の爲に痛擊せられて全滅したり(一二五八)、西方に於ては創始の蕃國に散逸して二三世期を安寧の中に過ごせしも基督教の隆盛に赴くに從ひて境遇險惡と成り苦辛慘憺たるものありしも、兎に角主義の一貫せし爲にや意外に發展して特殊の情態の下に繁昌を支持し得たり、蓋し土地の所有を拒まれし彼等は農業に手を染むること能はざりしを以て市區内に居りて所謂金銀商(Argentier)金銀細工、貨幣製造、金銀兩替を專にし、貿易商、高利貸等を兼れ、遂に巨萬の富を蓄積するもの少なからざりき、要するに中世が終りを告ぐるまで彼等は基督教徒の間にありて宗敵とし非人として生殺的(ナマゴロシ)に侮蔑迫害を加へられたりき、改進復興の時代には彼等の待遇に著しき變化を見ざりしが、第十八世期に入りてより以來漸次に改善せられ、第二十世期の始めには露西亞、ロマーニアを除く外、ヨーロッパの諸國に於ては全然權利を恢復するに至りしが、トルコ、マガレブ等のムハメダンの國にありては今に尚ほ公權、其の他に多少の差異は存置せらる。

以上記する所に據れば、近世のユダヤ人は眞にヘブライの子孫にして所謂セム派の一種族なるやに察せらるゝと雖も事實に就きて之が眞僞を質せんか、思半に過ぐるものあらん、面相、樣姿等に關するユダヤ式の存在は世の認むる所なりと云はんよりは寧ろ斯の如く世に傳へらるゝと稱すべきものなり、之を事實に徵するにフランスのユダヤ人には淡褐と濃褐との二種ありて他のフランス人の中にも同樣の差異は存するなり、エスパニアのユダヤ人とドイツのユダヤ人との間に相應の懸隔あるは容易に認めらるべく、其の他ポルスカ、ロシア、ベルシア等のユダヤ人の間に於ける變差は一層著しく、加ふるにアフリカのフラシア(Fllachas)、インドのベニイスラエル(Beni Israel)等を以てせんか、到底起源を同じうするものなりと認むることを能はざるべし、ユダヤ人が隨處に分散したる後、永き年月を經、幾多の異血を交え改宗者を容れ、信徒を增したるの結果、ユダヤ教徒は存すれども、ユダヤ種族は疾に融化し去りたらんと信ぜらる、例へ多少の特徴の存するあらんも、迫害、逆待、離隔、貧困、營養の不足、辛苦の影響、宗儀の實行、歷史の効果、等より生ぜしものを誇張して傳

ふるに過ぎざるべし、金銀商に巧みなるを以て彼等の先天的傾向に歸するも、反りて土地の所有を拒みしに起因することを悟らず、彼等をして自由に就職せしめんか業務に深き好惡を表現せしめざるべし、前へプライ人が特に農工商の孰れに偏せざりし事實は歴史に徴して明なるのみならず、現にロシアのユダヤ人に農夫、釀造手少なからずしてロマーニアのソレに左官、大工、等の職工多く、西ヨーロッパに於ける學校卒業者に就きて觀るも特に偏頗に失する傾向を認むることなし、彼等の富裕を云々するものあるも嫉みて殊更に謳唱するに非ずんば彼等の中に貧困者多きの事實を知らざるに坐するなり、彼等が粗食儉衾なるに由りて適〻避け得たる疾病に對し豊食暖衣の徒が彼等の無病息災(immunité)を信ずるが如き、範圍の廣狹に留意することなく、往時の事實の一端を捉へて直に當今に於ける類似の事情を速斷して彼等の世界質(cosmopolitisme)を唱道するが如き例少なからず、思はざるの甚しと云ふべきか。

斯の如くして前へプライは力を國威の振張に致さざるに非ざりしも、不幸にしてニールとメソポタミアとの兩勢力の間に介在せしを以て、遂に志を得ること能はず、後へプライはギリシア及びシリアの羈絆を脱して自治を勤むるに至りしも、久からずしてローマの征服する所と成り、國民としての生命を喪失したり、爾來ユダヤ人として分散、奴役、迫害の歴史を提げて各地に艱難辛苦せし結果は宗教と法典(thorah)とを保持せしに止まりしも、彼等が蹂躪に經過したる變遷の情態を總合せんか實に運命の不可思議なるに驚かざるを得ざるべし、智力に富み、適應に巧なる境遇の如何に拘らず、克く堪え克く忍び、信仰を固守し分裂も之に加ふること能はず、宗教の爲に宗教に據りて自己の分身に均しきマホメット教徒及びキリスト教徒に對し悪戰苦鬪を爲して遂に今日に至れるは偉と爲すに足るものあり。

以上論述したる所に由りて考ふるに人類に關する現時の情態に就きては實に種々樣々なるものあり、人相、皮色に於て言語、風俗に於て差別の存するは明なれども、物質上并に精神上に係る吾人攻修の程度に就きては一層顯著なるものありと爲さざるべからず、吾人受得の資質を始めとし、自然が及ぼす影響、社會の迫害、誘擁、移住、雜居の効果等のあるありて文化に千態萬狀は現はるるなり、地理學を研究し、殊に人類の種別に志ざす者は斯の如き文化の狀態に留意せざるべからず。

巳、人類の多寡

物に性質あり、分量あり、性質と分量と相俟ちて始めて物の勢力價値は存するなり、されば人類の勢價を知らんと欲せば兩者を併はせ研究するの要

あること勿論にして人類に關し、種族の特性殊質を知悉すると同時に其の多少を測り、增減を明にし密度を究むるのみならず、人口學(Démographie)が呈供する所の靜態的(statistiques)材料、即ち生存者の人種別、職業別、戸籍別、男女別、年齢別、居住別、教育別等に考へ、動態的(dynamiques)材料、即ち結婚、離婚、出產、死亡、往住、來住等を察して量と質との連絡を探求せざるべからず。

人類を貴とし、多きを幸として人口の增加を樂觀するもの少なからざれども、一面には土地の產源に比し人口が度外に發達するは危險なりと考ふる具眼者の存せざるに非ず、プラトン(Platon)(西紀前四二七—三四七)は婚期に制限あるを必要とし、アリストテレス(Aristoteles)(西紀前三八四—三二二)は子女の數が養育の資に比例するを可とし、クヱスネー(F. Quesnay)(1694—1774)は之が嚴守を主張し、スミス(Adam Smith)(1723—1790)は生存上の困難は人類の繁殖を定限すべしと說きしが、斷然原則を提供して世を警誡せんと試みしはイギリスのマルサス(Malthus)なりき、彼れの原則に不精確なる所あるは事實なるも先見(Prévoyance)が吾人の美德にして文明進步の一因たる以上、生產消費と人口との關係に就きては大に留意すべきものあり、恒產なくして濫費を逞しうせんか、人類は墮落滅亡するあるのみ、土地肥え資財豐に販路廣くして人口の增加を觀、富豪、大地主、機械力は人口減少の因を爲すとは眞なりや、某地域に於ける人口の密度は生活の程度、富財の多寡、等の影響を蒙むるものなりや、生產數(natalité)に關する道義的、社交的、生理的の原由を尋ぬるは或は地理學の範圍以外に脫出するの恐れあるべきも戰爭、惡疫、饑饉、奴隸、啖肉(cannibalisme)、逐散(dispersion)、接觸(contact)、等が死亡數(mortalité)に係はりて力あるは認め易かるべし。

生產數

死亡數

マルサス

マルサス(Thomas-Robert Malthus)(1766—1834)はイギリスの經濟學者なり、イヤリス教會の牧師と成り(一七八九)無名にて『人口原理』を公にし(一七九八)高評を博するや、事實に據りて提言を證定せんと欲してノルゲ、スエリゲ、フィンランド、北ロシアを跋涉し(一七九九)、ブランス、シヴァイツを旅行し(一八〇二)、『人間の幸福に關する過去的及び現在的効驗の概要』を著作して(一八〇三)名聲愈々揚り、ピットの(W. Pitt)の保護を得て、東印度商會附屬のヘーリバリー(Haylebury)大學の歷史經濟の講座に就き(一八〇五)終世渝ることなかりき、持論に基づき、三十八歲にて結婚し(一八〇四)三子を擧げ得たり、ロイヤルソサイチーに入り(一八一九)ベリー及びベルリンの學士院の客員に推されし

が著述には見るべきもの多く、就中『適用經濟學』は廣く世人の知る所と成りたり。

マルサス主義(Malthusianisme)に據れば人口の增加は生存資料の爲に制限せらるるものなるに人口增殖は幾何級數的に進み、生存資料は算術級數的に步むを以て生存者と生存資料との間に於ける平均は破れざるを得ず、然れども二樣の制限的勢力ありて平均の支持に當れり、甲者は壓抑的制限(obstacles répressifs)にして戰爭、疫病、難產等の如き慘禍現はれ死亡を促して生存者を減じ、乙者は豫防的制限(obstacles préventifs)にして生產を阻みて生存者の激增を止むるにあり、乙種に屬する制限には吾人の自由意志に係はるもの多く、不用意、不先見等の如き吾人の不德に起因せる事情の下に過產のあるありて墮胎、嬰兒殺人等の犯罪を誘致するなり由て人類をして斯る慘禍、犯罪より免れしめんには各自に於て子女を敎養し、家庭を支持するに障碍なしと判知せらるるまで抑制主義(moral restraint)に基づきて不覺的結婚を行はざらん樣慮るにありと云ふに歸着す。

人口の計算に就きては結果として精算、及び概算あり、方法として實算、及び推算あり、實算に直接と間接との二種ありて、生徒數、兵員、納稅者、某市町村の住人等の如きは直接に實算し得んも、一府縣、一國等の在籍者、現住者の如きは戶籍屆出に基づきて間接に計上するを常とす、實算を施すこと能はざる場合には推算して概數を得るに至るなり、而して推算にも根據あるものと否

ざるものとの二樣あり、甲者は某處、其域に就きて實算を施し、其の結果を他處、他域に適宜應用して員數を推定し又は戶數に依りて人數を推知するにありて、乙者は某處、某域に就きて直接に而も多くは貨物の生產消費の額に基づくが如き漠然たる見積を爲すに止まれり。

人口の總數

人類の總員は各國各地に於ける人口を實算若しくは推算したる後、結果を總合せしものにして、斯る計算を始めて試みたるは今を距ること僅々二百五十年に過ぎざるが、世界諸國に於て徵稅、徵兵等の必要よりして戶口調査を行ひしことは頗る古き時代より之ありて、漢土にては禹王の世に約一千三百六十萬人ありしと傳へられ、爾來歷代の王朝にも戶口の調査を試みしものありしが、境域に消長ありて彼此の比較に便ならず、隋の煬帝大業二年(西紀七〇五)の四千六百萬人、唐の玄宗皇帝天寶十四年(同七五四)の五千二百九十萬人を經て、清朝に至り、漢土(十八省)の人口は三億二千萬乃至四億二千萬と見積られ、懸隔の甚しきには一驚を喫せざるを得ず、我が國にては聖武天皇の代(七二四—七三三)に於て既に約二百萬人と計算せ

られ、慶安の頃(一六四七—一六五一)には四百二十七萬餘人と計上せられ、享保元年(一七二一)の二千六百萬餘人、文政十一年(一八二八)の二千七百二十萬餘人、明治五年(一八七二)の三千三百十一萬餘人、同十九年(一八八六)の三千八百五十萬餘人等ありて調査の實際も漸次に改良せられたり、西洋各國にありては第十八世期の末よりスエリゲ(一七四九)、アメリカ合衆國(一七九〇)に精査行はれ、第十九世期の前半に至りて他の國々も亦調査せしが、ロシアは一八九七年に於て始めて之を行ひたり、斯くして本國のみならず、殖民地にも實施せらるることと成りて精疎の度は均一ならざるも世界人口の約六割は調査に依るは一大進歩と云はざるべからず、而して人口調査の行はる區域は北アメリカの森林地方に於ける廣地、ブラジル及びオーストラリアの內部を除き、有民地の約半を占むるが、アジアの五割及びアフリカの九割も此の中に含まれず、殊にアジアに於ける清國の人口に概算上一億の差ありて世界の總人口に十六分一の影響を與ふるは實に遺憾とする所なり。

一千九百年乃至一千九百二年の頃に於ける世界の人口總數はドラブラーシュ(De la Blache)に依れば十五億四千萬人にしてレスパニォル(Lespagnol)は十五億六千萬人と計上せしが、之を洲別にすれば次表の如し。

推算者	ドラブラーシュ		レスパニォル	
		百分比		百分比
アジア	八、二〇〇〇〇〇〇	五三	八、五八六〇〇〇〇〇	五五
オセアニア	七〇〇〇〇〇		六〇〇〇〇〇	
ヨーロッパ	四、二八〇〇〇〇〇	二八	三、九一〇〇〇〇〇	二五
アフリカ	一、四一〇〇〇〇〇	九	一、六四〇〇〇〇〇	一〇
アメリカ	一、四四〇〇〇〇〇	九	一、四〇〇〇〇〇〇	九
兩極地域	九〇〇〇〇〇〇		八〇〇〇〇〇〇	
合計	一五、四〇〇〇〇〇〇〇		一五、五九六〇〇〇〇〇〇	

アジアの人口は總人口の五割三分乃至五割五分、ヨーロッパは二割八分乃至二割五分、アフリカ及びアメリカは一割內外に當れり。

然るに一九〇一年若しくは一九〇五年に於ては人口調査を實行せし地方ありたれば一千九百十年末に生存せる人類の總數をワグネルは十六億

三千七百萬人、ルプスールは十六億八千九百萬人と推算せしも（キッヒマン）(H. Wichman)及（ヒックマン）(A. L Hichmann)は尚ほ十六億未滿を維持せり。

推算者	ワグネル	キッヒマン	ヒックマン
アジア	八、八四〇〇（万人）	八、三三〇〇（万人）	八、五五二一（萬人）
オセアニア	七〇〇	七一四	六五六
ヨーロッパ	四、四一〇〇	四、三三〇六	四、一三四〇
アフリカ	一、三五〇〇	一、二七六八	一、四五二三
アメリカ	一、七〇〇〇	一、六三八六	一、四九一〇
合計	一六、三七〇〇	一五、六四七四	一五、六九五〇
		五三、五（百分比）	一〇〇

由て現今の世界に於ける總人口を約十六億と爲すは眞に近からんか。

人口の増加　前記の總人口を過去に於ける同樣の概算數、例へば第十九世期初年の約十億（一八一〇年の約七億は過小なりと認めらるゝに比較せんか世界に於ける人口が漸次に増加するは慥なる事實と認めらるるなり、一八九〇年のヨーロッパの人口は三億五千七百萬人なりしに十年間に三千四百萬人の増加ありて、アメリカの人口は一八九〇年の一億二千二百萬より一九〇〇年の一億四千餘萬人と成り、我が國の人口も明治三十一年末の四千三百七十六萬人より同四十一年末の四千九百五十八萬人に進みて十年間に五百七十八萬人の増加を指示せる等に據りて推定せらるべし、而して此の年次的増加が同率を以て遞進せざるは勿論なりとす。

我が國（臺灣、樺太、朝鮮等を除き）最近十二年（一八九八——一九〇二）間の人口と年次的増加率を示せば

年次	人口	百人に付増	年次	人口	百人に付増
明治三一年	四三七六、三八五五	一、二四	明治三七年	四七二一、五六三〇	一、〇三
同 三二年	四四二六、〇六四二	一、一四	同 三八年	四七六七、四四六〇	〇、九六
同 三三年	四四八一、五九八〇	一、二五	同 三九年	四八一六、〇八二五	一、〇一
同 三四年	四五四三、七〇三二	一、三九	同 四〇年	四八八一、五六九四	一、三六
同 三五年	四六〇二、二四七六	一、二九	同 四一年	四九五八、八七九八	一、五八
同 三六年	四六七三、二八七六	一、五四	同 四二年	五〇二九、五二七九	一、四二

某年の人口より前年の人口を減じ差を某年の人口にて除し百分比を作れば某年の百人に付増若干を得るなり、例へば明治三十八年の増率を求むれば

$(47674460-4721[illegible]039)\div47674460=4388[illegible]0\div47674460=\frac{96}{10000}=\frac{0.96}{10}$

而してn年間の平均增加率を算定せんには某年の人口をaとし、n年後の人口をbとすれば人口の增殖が重利的利殖に當れりと假定せらるるを以て所求の增加率はrと成りて $b=a(1+r)^n$ 從て $\log(1+r)=\frac{\log.b-\log.a}{n}$ 而して1+rの値を算出したる後、1を減ずればrを得るなり。

我が國に於ける明治四十一年までの十年間の平均增加率を算定せんに明治四十一年の人口をbとし同三十一年の人口をaとすれば

$b=49588708,\quad n=43763855,\quad n=10$ にして

$\log.49588708=7.69538[illegible]6,\quad \log.43763855=7.6411153\quad \log.(1+r)=0.0054[illegible]63$

$1+r=1,012[illegible]57\quad r=0,012[illegible]57=\frac{1257}{10,0}=\frac{1.257}{100}$ 即ち一・二五七

又明治三十二年の年增率一・一四より同四十一年の年增率一・五八までの平均數を求めたるに一・二五五を得たり。

此の平均增加率一・二五に基づきて我が帝國(本部)の人口を算出すれば次表の如くにして第二十世期の中葉には我が帝國全部の人口は優に一億以上に達すべし。

明治五一年(一九一八)	五六一九、九〇〇〇人	同	六一年(一九二八)	同	六三六六、七八〇〇人
同 七一年(一九三八)	七二一四、一九〇〇	同	八一年(一九四八)	同	八一七四、四〇〇〇
同 八三年(一九五〇)	八三八一、六〇〇〇	同	九三年(一九六〇)	同	九四九六、八〇〇〇

ヨーロッパに於ける人口に關する現時の年增加率〇、八八に據りて、同洲の人口を第二十世期中の十年毎に算出すれば

年次	人口	年次	人口	年次	人口
一九二〇	四、二〇〇〇萬人	一九五〇	六、〇〇〇萬人	一九八〇	七、九〇〇〇萬人
一九三〇	五、〇〇〇〇	一九六〇	六、六〇〇〇	一九九〇	八、六〇〇〇
一九四〇	五、五〇〇〇	一九七〇	七、二〇〇〇	二〇〇〇	九、四〇〇〇

人口の年次的增加に變異の現はるるが如く、地方的增加にも著しき差等は存するなり、ヨーロッパに於けるもロシアは一八〇一年には三千萬人を有せしのみなるに一八九〇年の九千八百萬人、一九〇〇年の一億一千三百萬人にして十年間に一千五百萬人を增加せしが、ドイツは同じ十年間に約七百萬人を增加したり、イギリスは一八〇一年には一千五百九十萬人を有するに過ぎざりしに一九〇一年には四千二百萬人足らずと註せられたり、然るにフランスは一八〇一年の二七三五萬人より一九〇一年の三八九六萬人に進みしも、彼が一百年間に得し所はロシアが十年間に收めしものに及ばずして殊に一八九一——一九〇一の十年間には六十二萬足らずの增員を見しに過ぎず。

世界人口の增加は一地域に於けるものと異なり、移住者に關係なく、生產

數の死亡數に優れるに依るのみなるが、ヨーロッパの平均生産數は住民一千人に對し三十五乃至三十八にして、ロシアは一八七六——一八八〇年に四十八、一八九二——一八九四年に四十九、ウンガルヌは一八九二——一八九六年に四十一、其の他、スラブ、中央ヨーロッパのツートンも平均以上を保ちたり、而してエスパニア、イタリアは三十五乃至三十二を有するも、ベルジック、シュワイツは二十八に降り、フランス、アイアーランドは二十三乃至二十二あるのみ。

ヨーロッパの平均死亡數に關する狀況は生産數のソレと異なりて最高死亡率は地中海沿岸、中央ヨーロッパにありてエスパニアの三十二よりバイエルンの二十八なるが、最低は西部並に北部にありて十七内外なり。

ヒックマンの世界釋珍地圖に依れば四洋諸國最近十年平均年增加率は次の如し

國名	百に對し	國名	百に對し	國名	百に對し
フランス	〇、二	トルコ	一、三	ダンマルク	一、九
エスパニア	〇、四	ロシア	一、四	ドイツ	二、一
スエーデン	〇、七	ウンガルヌ	一、五	スルビア	一、八
イタリア	〇、八	ギリシア	一、五	ポルトガル	一、五
ベルジック	〇、九	ノルウェー	一、八	ブルガリア	一、八
イギリス	一	ポランド	一、二	ロマーニア	一、九
エステルライヒ	一	シュワイツ	一、三	アメリカ合衆國	二、一

人口の密度

人口の密度とは一定の住域に於ける住民の數と該住域の廣さを表示する數との比にして面積の單位に對する住人の數に當れり、フランスの經度局調査(一九〇八)に依りて世界の總人口を十六億二千六百萬人とし陸地の總面積を一億三千八百七十萬方粁とすれば密度は一一、七となりて一方粁に付き十一人七分即ち十方粁に付き百十七人の住者ありと云ふ意なり。

フランスの經度局(Bureau des Longitudes)の調査に依れば

	面積(百萬方粁を單位とす)	人口(百萬人を單位とす)	密度(方粁に付)	人口百分比
アジア	四一、六	八五一	二〇、四	五二、三
オセアニア	一一、〇	五一	四、七	三、一
ヨーロッパ	一〇、一	四三七	四三、三	二六、九
アフリカ	三一、五	一二六	三、四	七、七

北アメリカ	二六、〇	一一六	四、五
南アメリカ	一八、五	四五	二、四
合計	一三八、七	一六二六	一一、七

キッヒマン (H. Wichmann) に依れば

	面積（方粁を單位とす）	人口	密度
アジア	四四三〇、九八〇〇	八、三三〇〇、〇〇〇〇	一九
オセアニア	八九六、二五〇〇	七一四、〇〇〇〇	〇、八
ヨーロッパ	九九一、三四〇〇	四、三三〇六、三〇〇〇	四四
アフリカ	二九八二、〇二〇〇	一、二七六八、四〇〇〇	四
アメリカ	四二一〇、六〇〇〇	一、六三八五、〇〇〇〇	四
極地	一三五九、九六〇〇	—	—
合計	一、四八六七、一五〇〇	一五、六四七四、五〇〇〇	一〇、五

ヒックマン (A. L. Hickmann) に依れば

	面積	人口	密度
アジア	四三七四、六八八〇	八、五五二一、五五〇〇	二〇
オセアニア	八九五、一八〇二	六六五、八〇〇〇	〇、七
ヨーロッパ	一〇二四、九八二三	四、一三三九、四八〇〇	四一
アフリカ	二九八四、七〇三五	一、四五二三、〇〇〇〇	五
アメリカ	三八五七、〇二三四	一、四八九一、二〇〇〇	四
極地	一二七四四八二六	九、一〇〇〇	—
合計	一、四四一一、〇六〇〇	一五、六九五〇、一三〇〇	一〇、八

然るに各洲に於ける人口の密度は地方に依りて差等著しく、各種の產源に豊なる地、氣候温和にして濕潤なる土に住人稠密なるも、利源を缺き、寒暑激しく降水罕なるときは人口の稀薄なるを常とせり、而して人類の最も密集せるは中央及び西部のヨーロッパ、印度のガンガ河沿岸並に支那平野の三地域なりとす。

中央ヨーロッパに就きてはザクセンの三〇一、四ヨーロッパに就きてはベルジックの二五一、イングランドの二三一あり、インドに就きてはガンガ河の沿岸地方に於て

二〇〇内外に達すべきも、下ベンガルは二三五、アグラ及びアウツは一七九を與へ、漢土の中部及び東部に就きては山東省の二二一、江西省の一八四、福建省の一七六、湖北省の一五六、等あるが、此等の數に充分の信を置き難しとするも一五〇以上と爲すは妨げなかるべし、我が國も全部としては九五に過ぎざるが本州西部一九四、中部の一九〇、四國の一七四、九州の一六七、等は顯著なりと云はざるべからず。

人口の分布

世界の人口を地方別、國別に爲して其の密度を比較研究するときは有益にして興味ある事實を發見するなり。

世界にて人口の最も稀薄なるは兩極地域なり。

該地域に生存する人類の數は等積の海區に於ける海員より少なくしてイギリスと北アメリカとの間に於ける大西洋はシベリアの沿海地と密度を均しうし、マンシウ海はシベリアのイルクツク州より人口稠密なり。

前者に次ぎて人口の稀少なるは南北の兩半球に於ける沙漠草原にして降雨罕なる地域に當れり。

サハラ地方の人口は一百方粁に付き二十五人と計上せらるるが、耕種に適する「オアシス」即ち所謂泉地を寂寥たる周圍の地より別にするときは意外に人口の稠密なるものあるに一驚を喫するなり、例へばリビアの泉地は合はせて一百三方粁を有するに過ぎざるに住人の數は三萬四千と注せらるるを以て密度は三三〇と云ふ珍らしきものとなるなり。

土地廣くして而も人口の稠密なるは北半球の温帶に限られ、周圍の事情が均しく吾人の生存に便なる場合にありては大ならざる島地は近接せる土地より人口の稠密なるを例とせり。

イギリスの密度が一六一なるにチャンネル島が四九〇を呈し、ザンジバル島に於ける一〇二が頗る著しうして、シチリア島が、大陸的イタリアに、ギリシアの島嶼部が大陸部に、小アンチルが大アンチルに優れるが如きあり、我が國にありても淡路島、壱岐島の如き地方（チカタ）に接近せる島には比較的に住民の多きを見る。

航海の便あるか又は漁獲の利ある沿岸地は概して之が爲に圍まるる內地より人口稠密なり。

河流の沿岸に多數の住人を觀るは常なり、蓋し河流は交通、漁獲、耕種、等の產源に豐富なるは勿論、防衛上の便あるに據れり、されば人口の疎密に關する地圖は水學的地圖と密接なる關係を有し、人口の密なるを表示する濃色は河流に隨伴するを例とす。

山地若しくは高臺は人類の粗なるを常とし、稍、密なるは谿谷の地にあり。

二〇〇内外に達すべきも、下ベンガルは二三五、アッサム及びアッツは一七九を與へ、漢土の中部及東部に就きては山東省の二二一、江西省の一八四、福建省の一七六、湖北省の一五六等あるが、此等の數に充分の信を置き難しとするも一五〇以上と爲すは妨げなかるべし、我が國も全部としては九五に過ぎざるが本州西部一九四、中部の一九〇、四國の一七四、九州の一六七等は顯著なりと云はざるべからず。

人口の分布

世界の人口を地方別、國別に爲して其の密度を比較研究するときは有益にして興味ある事實を發見するなり。

世界にて人口の最も稀薄なるは兩極地域なり。

該地域に生存する人類の數は等積の海區に於ける海員より少なくしてイギリスと北アメリカとの間に於ける大西洋はシベリアの沿海地と密度を均しうし、マンシウ海はシベリアのイルクツク州より人口稠密なり。

前者に次ぎて人口の稀少なるは南北の兩半球に於ける沙漠草原にして降雨罕なる地域に當れり。

サハラ地方の人口は一百方粁に付き二十五人と計上せらるるが、耕種に適する「オアシス」即ち所謂泉地を寂寥たる周圍の地より別にするときは意外に人口の稠密なるものあるに一驚を喫するなり、例へばリビアの泉地は合はせて一百三方粁を有するに過ぎざるに住人の數は三萬四千と註せらるるを以て密度は三三〇と

云ふ珍らしきものとなるなり。

土地廣くして而も人口の稠密なるは北半球の温帶に限られ、周圍の事情が均しく吾人の生存に便なる場合にありては大ならざる島地は近接せる土地より人口の稠密なるを例とせり。

イギリスの密度が一六一なるにチャンネル島が四九〇を呈し、ザンジバル島に於ける一〇二が頗る著しうして、シチリア島が、大陸的イタリアに、ギリシアの島嶼部が大陸部に、小アンチルが大アンチルに優れるが如きあり、我が國にありても淡路島、壹岐島の如き地方（チカタ）に接近せる島には比較的に住民の多きを見る。

航海の便あるか又は漁獲の利ある沿岸地は概して之が爲に圍まるる內地より人口稠密なり。

河流の沿岸に多數の住人を觀るは常なり、蓋し河流は交通、漁獲、耕種、等の產源に豐富なるは勿論、防衛上の便あるに據れり、されば人口の疎密に關する地圖は水學的地圖と密接なる關係を有し、人口の密なるを表示する濃色は河流に隨伴するを例とす。

山地若しくは高臺は人類の粗なるを常とし、稍、密なるは谿谷の地にあり。

大要は右の如くなれども除外例も珍しからず、ヒマラヤ山脈中の谿谷には峽谷多くして絶崖に挾まるるを以て耕種に適するの地に乏しきが故に反りて山麓に遠からざる山側の地に劣り、ドイツにありてはシュワルツワルド并にベーメンの北邊山脈の地に於ける人口の密度は工業の餘恵を受くるを以て帝國の平均より人口の稠密なるを觀る。

高嶺に關しては回歸帶地方に於て著しき特狀を呈せり、蓋し海拔に秀づる所ありて暑氣大に減じ、吾人の居住に好適なり、是れメキシコ、ペルー、エクアドルに於て居民が嶺地に多く、土人の文化に著しきものありしも同地にして、ヨーロッパよりの移住者が風土上、本國に類せりと爲せり。

尙ほ人口の疎密に關しては工業の盛衰、商路の變遷、百貨集散の狀態等が吾人の移動を促すありて世界に於ける人類の分布に間斷なく差異を生せしむるなり。

茲に各洲に關する人口に就きて部域領土別を試みて世界に於ける人口の總數、疎密等を推算する順序方法の一端を摘示せんとす。

部	邦土	面積(方粁を單位とす)	人口 總數	人口 一方粁に付	人口 調査年次
日本帝國		六七、一五七二	六四一二、八九六三	九五、	—
あ	*道廳府縣	三八、二四一六	五〇七五、一九一九	一三〇、	一九〇九
	*殖民地	二八、九一五六	一三三七、七〇四四	四七、	—
	清國	一一一三、八八八〇	三、三〇一三、〇〇〇〇	三〇、	?
	イギリス領	一九、六〇八七	一二三、九七五五	六、五	一九〇八
	アメリカ領	二九、六三一〇	八一八、九七六〇	二八、	一九〇九
	オランダ領	一五二、〇六二八	三八六九、八〇〇〇	二五、	?
	ポルトガル領	一、八九八九	二〇、〇〇〇〇	一二、	?
あじ部	フランス領	六六、四二〇九	一六五九、二七八六	二五、	一九〇六
	シアム領	六〇、〇〇〇〇	六七〇、〇〇〇〇	一一、	?
	イギリス領	五〇五、四三四七	三、〇二一二、三〇五二	六〇、	?
	ネパール	一五、四〇〇〇	三〇〇、〇〇〇〇	一九	?
	アフガニスタン	五五、八〇〇〇	五〇〇、〇〇〇〇	九、	?
	ペルシア	一六四、五〇〇〇	九〇〇、〇〇〇〇	五、	?
西部	アジアトルコ	一七六、六八〇〇	一六八九、八七〇〇	一〇	?
	サモス	四六八	五、三四二四	一一四	一九〇二
	イギリス	一、〇〇一二	三二、七〇九七	三三	?
	エジプト領	五、九〇〇〇	九三〇〇	〇、一	?
	無所屬アラビア	二四七、二九〇〇	一九五、〇〇〇〇	〇、八	?
北	ロ[コ]ーカシア	四六、九二二〇	一一三九、二四〇〇	二四、	一九〇九

洲	部	合計	大陸	海岸沿	島嶼領	島嶼領	合計	部	度
アジア	シベリア	三四八、八五三〇	七九三、三四〇〇	五五、一一三一六	二四、一一三一	三九、四七八九	一、一三九、三八七〇	ロシヤ	五三八、九九八、〇六〇
中央アジア	ペルシア	一一〇、三四三〇	六、七四三〇	一四、一一三一	四一、九二〇〇	二四、〇〇〇〇	一五、七七、〇〇〇〇		
	アラビア	八、〇〇〇〇	八、〇〇〇〇	一六五、九五五九	四一、九二〇〇	二四、〇〇〇〇	八、三五八、九、三〇三七		一、一一一三、六六〇八
	シリア	九六三、一三〇〇	四七五、五〇〇〇	一六五、九五五九	四一、九二〇〇	二四、〇〇〇〇	七八七、八五〇〇		一、一一一三、六六〇八
	計	三、〇六	〇、六	三、	一、七	〇、六	一九、		一九〇九

洲	部	合計	大陸	海岸沿	島嶼領	島嶼領	合計	部	度
オセアニア	ニヴ	一、三一三〇	一、三一三〇	五五、一一三一六	二四、一一三一	三九、四七八九	四、	北アメリカ	一九〇九
	ーク	一、七四一九	一、七四一九	二一、八七	二五、七二	四一四〇	一一、		一九〇九
	フィジ	一、一一一〇	一、一一一〇	五、五二九三	三、七〇〇〇	三〇、九七〇	一五〇		一九〇六
	ウェスト	一、一一一〇	一、一一一〇	五、五二九三	三、七〇〇〇	三〇、九七〇	一五〇		一九〇六
	ニューカレドニア	一、一一一〇	一、一一一〇	五、五二九三	三、七〇〇〇	三〇、九七〇	一五〇		一九〇六
	領	一、一一一〇	一、一一一〇	五、五二九三	三、七〇〇〇	三〇、九七〇	一五〇		一九〇六
	計	九一八、一四八八	七四一、六九六八	一、一一一三、六六〇八	一、一一一三、六六〇八	三、六六〇八	一、一一一		一九〇九

洲	部				
ぱ	南部	ロマーニア	一三、一三五三	六八六、五七三九	一九〇九
		モンテネグロ	九、八〇八〇	一一、〇〇〇〇	
		スピリア	四、八三〇三	一八五、三六五九	一九〇八
		プルガリア	九、六三四五	四〇三、五五七五	一九〇五
		ギリシア	六、四六五七	一六三、一九五二	一九〇七
		ヨーロッパトルコ	一六、九三〇〇	六一三、〇一〇〇	三六、
		ペルシア	八六一八	三一、〇〇五六	一九〇〇
		アフガニスタン	九、六三四五	四〇三、五五七五	一九〇五
		ベルシア	四、八三〇三	一一八五、三六五九	一九〇八
		ロシア領アジア	一三、一三五三	六八六、五七三九	一九〇九 ?
	合計		九八九、一九四九	四、三三五一一、七七八一	四四、
	北部	ロシア領ヨーロッパ	一一四、五三〇〇	一一一八、七三五九	六、
		ロシア領アジア	五一〇、一一〇〇	七五五、一七〇一	一四、
		ペルシア領	四三、九一四〇	八〇〇、〇〇〇〇	一八、

洲	部				
あ	中部	大ウクライナ	三一、四三三九	四五九、八〇〇〇	一五〇、
		ルーマニア	四五二	五一三一	一一、
		ハンガリア	五〇、四五一七	一一〇〇、六八三六一	四〇、
		ドイツ共和國	九、一九四三	五四一、三一三一	六一、
		ベルギー領	五	一一、三九一五	一
		ルクセンブルク領	一八、六六八二	三四五六、五六九八	一一一、
		オランダ領	六一	一、〇四八九	一七一、
		ポルトガル領	三〇三	一一一、五八七九	七一一、
		スペイン領	六、四六五七	一一六三、一九五二	四一、
		フランス領	一六、九三〇〇	六一三、〇一〇〇	三六、
		ドイツ領	八六一八	三一、〇〇五六	三八、
		ポルトガル領	九、六三四五	四〇三、五五七五	四二、
		ルーマニア領	四、八三〇三	一一八五、三六五九	四五、
		ブルガリア領	九〇八〇	一一五、〇〇〇〇	一一七、
		ロシア領アジア	一三、一三五三	六八六、五七三九	五三、
	南部	ベルギー領	一一八、六六八二	一五五〇、〇〇〇〇	六、
		ルクセンブルク領	一七六、一一〇〇〇	三六五、一一〇〇〇	二、
		ポルトガル領	一一、五七〇〇	一五、〇〇〇〇	五、
		ルーマニア領	一一〇三、一四〇〇	七三一一、〇〇〇〇	三、六
		ブルガリア領	八三、五一〇〇	一六、七〇〇〇	〇、二
		ロシア領アジア	三一三、一一六四〇	八六一一、七四九一一	一一、七
	島部	ロシア領	五九、九五四七	三一三、九四九九	五、
		ペルシア領	一八九六	四〇、七八三三	一四〇、
		ポルトガル領	四七六一	一一、五六四五	四一、
		ニヤサランド領	一一〇一五	一一、一一〇七七	一一、

合計	二九二一、八四五九	一、二七二八、二三七〇	四	
あ				
北部				
ダンマルク領	八、八一〇〇	一、一八九五	〇、一	一九〇一
イギリス領	九八二、九三二〇	七二〇、一二六六	〇、七	
フランス領	二四二	六四八二	二七、	一九〇二
アメリカ合衆國	九三八、六〇九三	八九五六、六〇三四	九、	一九〇六
メキシコ	一九八、七二〇一	一三六〇、七二五九	七、	一九〇〇
め				
中部				
グアテマラ	一一、三〇三〇	一八四、二一三四	一五、	一九〇三
ホンヂュラス	一一、四六七〇	五〇、〇一三六	四三、	一九〇五
ニカラグア	一二、八三四〇	六〇、〇〇〇〇	五、	?
コスタリカ	四、八四一〇	三六、八七八〇	八、	一九〇九
パナマ	八、七四八〇	四一、九〇二九	五、	?
キウバ	一一、四五二四	二〇四、八九八〇	一八、	一九〇七
イチ	二、八六七六	二〇二、九七〇〇	六五、	一九〇九
ハイチ	四、八五七七	六七、三六一一	一四、	?
ドミニカ	九三一四	一一、八〇一二	一二〇、	一九一〇
アメリカ領	五、一二九五	一七五、八四六三	三五、	一九〇九
イギリス領	二七六七	三七、二二九七	一三五、	一九〇六
フランス領	一一三〇	五、八三〇八	四七、	一九〇八
ホランダ領	三五九	三、〇五二七	八五、	一九〇一
ダンマルク領				

か				
北洲				
イギリス領	二五、一一八〇	三〇、八一五九	一、二	一九〇九
ホランダ領	一二、九一〇〇	八、七〇八六	〇、六	一九〇八
フランス領	七、九八〇〇	三、九一一七	〇、五	一九〇六
ベネズエラ	一〇二、〇四〇〇	二六八、五六〇六	二、六	一九一〇
ペルー	一一二、七三七二	四三二、〇〇〇〇	三、	?
コロンビア	一七六、九八〇四	四五五、九五五〇	二、六	一八九六
ボリビア	一四七、〇一九六	二二六、七九三五	一、五	一九〇八
チレー	七五、八二〇六	三二四、九二七九	四、	一九〇七
ブラヂル	八五五、〇〇〇〇	二〇五一、五〇〇〇	二、五	一九〇八
パラグアイ	二五、三一〇〇	七一、五八四一	二、八	一九〇八
ウルグアイ	一八、六九二五	一〇九、四六八八	六、	一九〇九
アルヘンチナ	二九五、〇五二〇	六四八、九〇〇〇	二、	一九〇九
合計	四〇五四、六一三一	一、六七五三、八六七四	四、	

以上の各表に基づきて世界の人口表を作らば兩極地域に於ける無人地を除きたるものを得るなり。

世界				
洲名	面積	人口	方粁に付	百分比例
あじあ	四四四四、九八八二方粁	八、三五八九、三〇三十人	一八、八	五三、二
おせあにあ	九一八、一四八八	七四一、六九六八	〇、八	〇、五

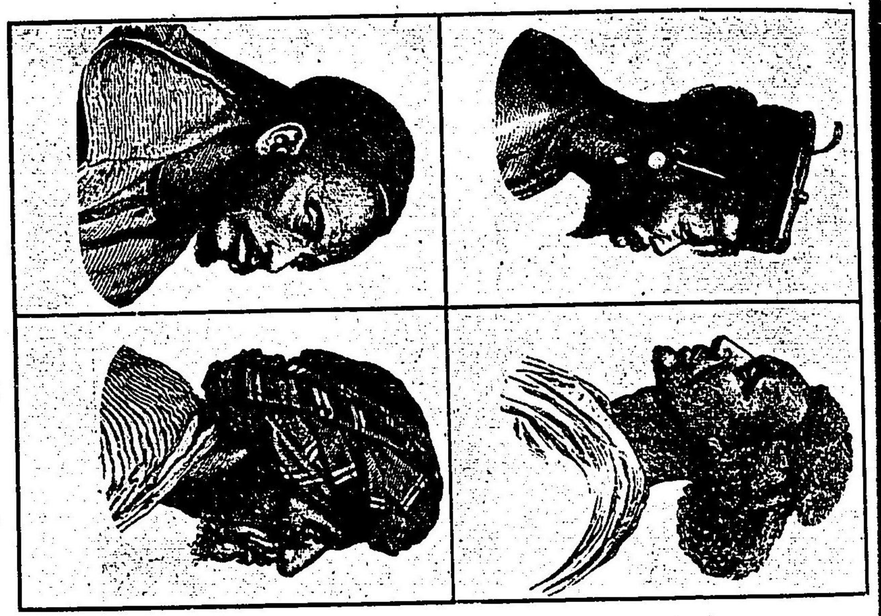
人口表

よーろっぱ	九八九、一九四九	四、三三五、七七八、一	四三、八	二七、六
あふりか	二九二、八四五九	一、二七二、二三七〇	四、	八、一
あめりか	四〇五四、六一三一	一、六七五、三八六七四	四、一	一〇、六
總計	一、三三二、七九〇九	一五、七一六五、八八三〇	一一、八	一〇〇、〇

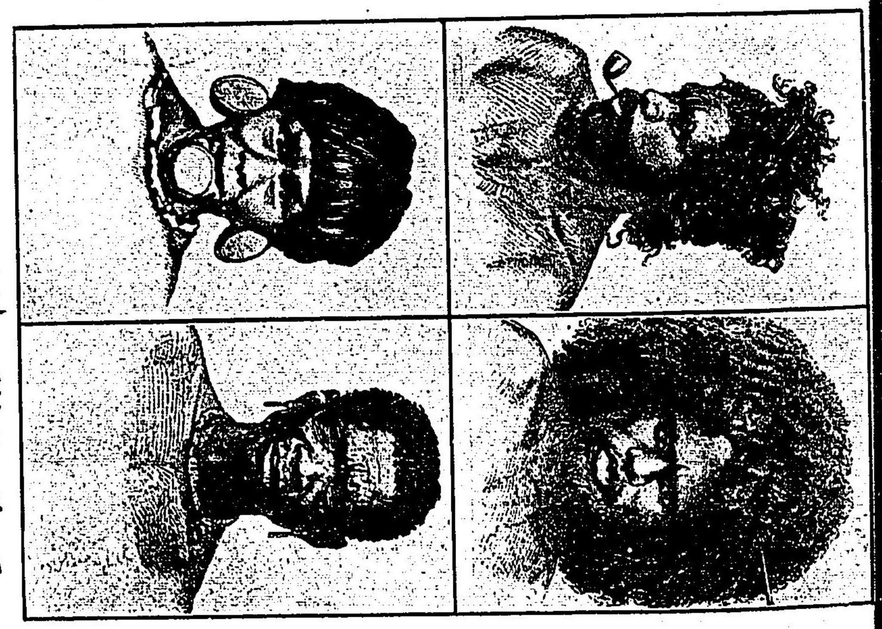
庚、人類の種別

種別の方法

人類は地球表面上各處に居住し相貌と云ひ文化と云ひ、其の情態頗る複雜を極むるものにして各種民族の起源幷に分布を研究するは人種學(Ethnologie)の目的とする所なり、抑、氏族民族を類別することは至難の業の一にして、始めは顯然たる區別を有するものも漸次に混淆して複雜を極め、混成の種族と純粹なるものとの間に連鎖の存するありて兩者の間に別あるを疑はしめ又大なる差異は認め難きも其の間に充分なる脈絡を捉ふること能はざる場合あり、分類の困難斯の如くなるを以て玆に則るべき規準の一斑、基づくべき根底の一端を指示せんに、人類には外觀、解剖、生理、疾



(上)ダーマー　(下)ニゥヒアン
(下)スマイル　(下)アラブ



(上)オーストラリア土人　(上)ボブ
(下)ボトルド　(下)ボシェスマン

病等の如き吾人の體軀即機關(Organes)に係る有形性(Caractères physiques)若しくは技能、學識、道義、信仰等の如き吾人の活動即能力(Facultés)に關する無形性(Caractères psychologiques)の存するあるが故に此等の各項に就きて說明を試みて類別上に資する所あらんとす。

先有形性(自然性又は形體性)の特質より始めんに

(甲)外觀的性質(Caractères extérieurs)に就きて主要なるものを記せば

(一)身長　身長を分ちて長(大、高)、中、短(小、低)の三等とし中數を一米突六三五と爲す、最高きはパタゴニア人にして中數を超ゆること〇、一一五に達す而して最低きはボッシスマン(Boschismans)にして中數に及ばざること〇、二六五なり、又パタゴニア人の最高中數とボッシスマンの最低中數との間に於ける差は〇、五五四にして男女中數の差は〇、一四一なるが、女子の身長は男子の身長の九割七分三厘に當れりと云ふ因に記す我が日本人の平均は一五二糎にして男子の平均一五八糎、女子の平均一四六糎なり。

(二)體軀　手足の大小、胴と四肢との比、頭長と全身長との比等を調査し又

肉包の發達及び位置に注意す。

(三)顔面　顔面には圓顔、楕圓顔、卵顔、菱顔、方顔、長方顔、等樣々ありて枚擧に遑あらざるも、大別して長顔(Dolichopse)、廣顔(Brachyops)、中顔(Mediopse)の三種とす。

(四)眼　外眥の上下の平を見、虹彩の暗、黑色、褐色、青黝色、灰色、等何れに屬するかを定むるなり。

(五)鼻　形狀に樣々ありて鷲嘴鼻、凸鼻、低鼻、高鼻、扁平鼻、等あり。

(六)口　口には大中小あり、唇には厚薄並あり。

(七)頰　頰骨の秀でたるものあり、否ざるものあり、從て頰の外觀一樣なる能はざるなり。

(八)皮膚　皮膚の色即ち皮色には白、帶黃白、帶褐白、黃、褐、紅褐、帶紅白、灰、黑褐、暗黑、黑、等の別あるものなり

(九)毛髮　毛髮に就きて種々の觀察を施せば縮毛、鈎毛、波毛、直毛、等あり、剛毛、柔毛、平毛あり、粗毛、美毛あり、黑毛、灰毛、褐毛、栗毛、赤毛、等あり、圓毛、楕圓毛あり、長髮、短髮あり、毫に多きと少なきとあり、鬚髯に長短あり、多少あり。

(乙)解剖的性質(Caractères anatomiques)は外觀的性質に優れる所あるも、研究上に便ならざる所あるを缺點とす、而して硬部に屬すると軟部に關するとに從ひて骨格性と內臟性とに分たるるが、甲者は頭骨、胴骨、肢骨、等に係りて研究上稍便なるも、乙者は神經、脈管、內臟、等に係りて比較研究未だ普からず。

(一)頭形　頭蓋骨の前後徑を百とし、之と橫徑との比を表はす數を橫斷的示度(Indice céphalique horizontal)と云ひて長頭(Dolichocéphales)示度七八以下、中頭(Mesoticephales)七八以上八〇以下、廣頭(Brachycéphales)八〇以上に分ち、前後徑と頭高即ち縱徑との比を表はす數を縱斷的示度と云ひて高頭(Hypsocéphales)示度七五以上、平頭(Orthocéphales)七五以下、低頭(Platycéphales)七一以下、に分かてり。

(二)頭角　カンペル(P. Camper)の面角(Angle facial)は耳孔より鼻底に至る耳線(Ligne auriculaire)と門齒の前面及び前額の凸部に切する額線との角を云ふ、此の角は白人にありて平均八十度なるが、黃人は七十五度にして黑人は七十度なりとす、又顎角(Angle maxillaire)は顎尖より上門齒の下端に赴く線と前記の耳線との角を云ふ、此の角は白人には平均百六十度ありて直顎(Orthogna-

thisme)を爲し、黄人には平均百五十四度に減じて中顎(Mésognathisme)と成り、黑人には僅に百四十五度あるに過ぎずして突顎(Prognathisme)たるを見るべし。

(三)鼻形　ブロカ(M. Broca)の鼻示數(Indice nasal)は鼻窩に於ける鼻幅を百倍し之を鼻額の連接點より鼻尖までの長さに比して得る所の數にして平均鼻示數は五〇、〇〇なるがエスキモーは四二、二三を與へ、フズアナ(Houzouanas)は五八、三八を與へたり、而してブロカは此の示度に基づきて廣鼻(platyrhinis)五三乃至四八、狹鼻(Leptorhiniens)四八以下、中鼻(Mésorhiniens)五三以上の別を設けたり。

(四)頭容　鉛粒を用ひて量り得たる所に依れば頭の平均容量はヨーロッパ人の一千五百立方糎にしてオーストラリア土人の一千二百立方糎なるが、女子の容量は概して男子に劣れりと云ふ、然れども容量の多少は直に智力の優劣に關するが如く判すべからず、偉人の頭は必ずしも多くの容量を有するものに非ずと知るべし。

(五)腦量　ハント(Hunt)に從へば白人の平均腦量は約一千四百瓦にして最重一八四二瓦、最輕九六三瓦なるが、同人がアメリカの白兵二十四人に就き

て調査せし所に依れば平均一四二四瓦、最重一八一四瓦、最輕一二四七瓦にして黑人百四十一人に就きては一三三一瓦の平均を得て最重は一五〇七瓦にして最輕は一〇一三瓦なり、而して白黑の雜種二百四十人に就きての調査の結果に依れば$\frac{3}{4}$白の平均は一九〇瓦、$\frac{1}{2}$は一三三四、$\frac{1}{4}$は一三一九、$\frac{1}{8}$は一三〇八、$\frac{1}{16}$は一二八〇にして白種の血液が稀薄と成るに從ひ腦量が減少するの事實ありと云ふ。

(丙)生理的性質(Caractères physiologiques)に關し各地の住民、各種の民族に就きて調査研究する所あらんか、特徴、特質たるべきものを發見するに難からず、然れども多くは他の事實之が起因と成りて發現を釀成したるものの如し、熱帶人の小食にして植物質の食料を好むに反し寒帶人には脂油に富める動物性の食品を多量に用ふるも主として氣温の高低に基づけりと認むべく、哺乳期に長短ありて支那人の五年、黑人の二年、等あるも之れ風俗習慣の然らしむる所に過ぎざるべく、發育に遲速あるは事實にして熱國の人に早く寒國の人に遲きも氣候、其の他の影響と見るべき理由あり、壽命に長短あ

るも各自の術生、境遇、等に據れりと爲すの適當なるを了知すべし、要するに生理的性質は人種類別の上に於ては標準たるべき價値に乏しきものと判定するの外なきも、亦副貳的性質として用を爲すこと少なしとせず。

(丁)疾病的性質(Caractères pathologiques)に就きては疾病と種族との關係に注意して調査せんか、感染の狀況一樣ならず、害毒の强弱均等ならず、病種に差異ありて甲者に普く乙者に稀なるが如き事實あるも、研究の結果は吾人の本性が同一なるに拘らず、某處に永住せし爲め自然的なると人爲的なるとを選ばず、周圍の事情の下に千差萬別ある各種の既得性を生ずるに至れりと爲すの穩當なるを知り、是に由て疾病に關する特殊情態を判斷せんか、人種の類別に資すべき底の事實に非ずして結局根本的の標準たるには缺くる所あるを了知せん。

以上四種の性質中最も便なるは外觀的にして古來人種の分類上重きを置かるるは吾人の慣習より觀るも當然なりと云ふべし、解剖的性質の如きは有力ならざるに非ざるも、外觀的の方法に依りて測定せらるる骨格性の外

は實際の研究甚だ困難なるを缺點とす、要するに有形性を捉へ之を研究するは主として外觀的即ち形貌的(Somatique)に實施するの外なきが故に之を重視するの過度なる直に內容の批判を輕々に下だすが如き弊に陷らざらんことを要す。

ブロカ(Paul Broca)(1824-1880)はフランスのセントフォアラグランドに生る、パリー醫科大學に入りて外科病理學の講座を擔當し、高等研究所に於て人類學實驗室の主任と成り、新設(一八七六)人類學院の教授に進み、近世人類學の指導者の一人として尊信せられ、元老院の終身議員に推選せられたり(一八八〇)、頭腦の研究を以て得意とし之に關する大著作に從事せしも不幸にして完成を見るに至らざりき、外科病理學に關する著書論文少なからざるが、人體解剖總覽の出版にも贊助を與へたり、人類學に就きては人類學の研究(一八六五)、史前人類の外觀性(一八六九)、靈長類(一八七〇)、パスク語の分布(一八七五)、人類學論說集(一八七一—一八八三)、等あり、又人類學雜誌(Revue d' anthropologie)を創述したり(一八七二)。

次に無形性(活用性又は精神性)に就きて述べんに智力、道義、信仰の如き無形的の心性は之を直接に捕捉する能はざるを以て、此等が活動したるが爲に生出せし結果に據りて其の發達の程度、進步の狀態、等を洞察せざるべか

らず、從て無形性を研究するの方法も勢ひ外觀に基づくことゝ成りて誤斷に陷るの弊害少なからず。

(甲)智力的性質に關しては技能、文藝、學識、等ありて技能は言語、文字を始めとし音樂、舞踏、繪畫、彫刻、等に亘れり。

(一)言語　博言學が與ふる所の結果と有形性の研究より得たる結果とを對比して同一の事實に歸着することあらんか、眞僞を判定する上に於ては頗る有力なるものと認むるも妨げなからん、各地の住民に就きて言語の狀態を研究せんか、彼此の關係、文化の程度、種族の盛衰、等を明にするを得ることあり、例へば多元論者が一種と認めしマライ人は單元論者の一人種なるが、言語に就きて調査を試みたるに一百のマライ語中に五十はポリネシア的にして多くは天地、日月、山河、手足、眼鼻の如きものなるも、二十七はマラユ語にして加工品に關し、十六は心理、宗教「サンスクリット」語、五は詩歌に係れるアラビア語、殘りの二は商業に關せる外國語にしてマライ人固有のものと認むべきは至りて少なく乃ち外觀的性質と相俟ちてマライ人の雜種なることを證明せしのみならず、ポリネシア人とマライ人との關係に頗る近きものあるを指示するに至りたり、然れども言語は新陳代謝し或は形を變じ或は他より傳來するものありて必ず言語と慣用者とは同伴するものに非ざることを忘るべからず、又優劣の異種族の接觸するあらんか劣者は優者の言語を襲用する場合少なからざるを以て言語の同一は直に種族の同一を證することは能はず、通商上の關係若しくは兩强族間に介在せる、等より二語以上を使用するもの少なからずして所屬の判明し難きあり。

(二)文字　文字は人智の發達に伴ひて發明改良せられしものにして之が使用を爲すと否らざるとは彼の積成性の効果に關すること頗る大なるものありて往々文野の別を生ずるに與りて顯著なりき、抑、文字なるものは圖畫圖樣の變態にして直接に意想を代表する形象に起り描畫的(Pictographique)と象形的(Figuratif)との二種を與へ表意的(Idéographique)に轉じたり而して言語を表記して間接に意想を代表せる記音的(Phonétique)文字にも綴字的(Syllabique)と字母的(Alphabétique)との二樣あるに至れり、又各種の文字にも樣々なる變

體あり、文字の使用上にも種々なる變遷あり、從て文化の度合を判し民族間の關係を定むるの一助とは成るなり。

(三)音樂　人は語る前に唱へりとするは或は眞ならんか、現存の人類に就きて唱歌音樂に因みなきもの極めて稀なり、蓋し情緒の發表に適するは繪畫より易きは勿論にして舞蹈に比し一層簡にして而も細微に到るの妙あるに因るならん、蠻人の性情を占ふに便にして又優者の進度を察するに叶ふ。

(四)舞蹈　手眞似、身振りが言語の缺を補ふが如く舞蹈には往々身振的歷史たるの實ありて部族、種族の起源、關係等を探知するの便を與ふるあり。

(五)繪畫　其の起源極めて古く殆と本能的のものなれば原人時代を距ること蓋し遠からざるものあるべし、彫刻と相俟ちて發達せしは石器時代の遺跡に徵して明なり、現時にありては繪畫若しくは彫刻に携はらざるものなく而も優者と劣者との間に非常なる懸隔の存するは驚嘆の外なきなり。

又文藝としては半開の民に於て端緒を啓き、歌詩、散文等の發展は文化の高きを示し而して文學の發達、理學の進歩は之を優秀の民族に就きて實現するを見るのみ。

(乙)社交的性質　人類が原來社交的に生れしは勿論なるも、當初にありては蒙昧にして隨處に棲息し、家族的若しくは親族的に生活して僅に部落を爲すに過ぎざりしが、漸次に蠻期を脱し、進みて氏族、部族を成すに至りて半開の民と成り、更に進みて文明の域に達して、民族、國民を組成するものなり、されば風俗の變遷進化にも見るべきものありて、出産、結婚、葬儀、祭式等に種々樣々なる變差變異の現はるるあれば、之に依りて種族の異同、關係等を推察するを得るなり、殊に所謂奇習なるものには部族民族の起源、系統等を尋ぬる上に於て奇功を奏することあり、而して制度の狀態に依りて社交發達の程度を考察するを得るなり。

宗族及び親族は孰れも血脈的關係の明瞭なるものにして所謂血族なるが、甲者は狹義にして乙者は廣義なるの差あり。

氏族(Clan)は血緣を有せる若干の家族又は親族の集合にして高祖の子孫を尊長に戴くを例とせり。

部族(tribe)は一に宗族とも稱せらる、起源を同じうする若干の民族若しくは親族

より成りて同一地方に棲息し、同一の言語を戴けり。

民族(Peuple)は一に種族(famille)と云ふ、同一地域に住める若干の部族が特殊の事情の下に混同又は群生より成りしものにして同一の言語を用ふるを常とす。

國民(nation)は歴史上の關係深く、相互的の同情厚く、共存の運命、共同の志望、等の連鎖ありて一致統合せる民衆を稱するものにして、所謂國民性(nationalitiè)に據れる集團なれば形貌上若しくは言語上に差異あるを妨げず。

因に紀す、民族、國民の如き集團中には往々カスタ(casta)(純族)即ち種姓の存するあり、國中自ら團を爲せるも其の性質均一ならずして或は單に人種的、政治的、宗教的、職業的なるに過ぎざるあり、或は人種、政治的、政治宗教的、政治宗教職業的なるあり。

(丙)生存的性質　食衣住の狀況を觀察研究して生活程度の高下を判知し、又生業の情況を調査して生存上の進化を認知するに至るなり、抑、各自の生活に必要なる資料を得んには先づ自然界に就きて天產を採取するに始まりて、伐採獵漁起り、便利と安全とを慮りて農牧の如き助成的の生業現はれ、尙ほ進みて工商の盛なるに及びて各般の分業は發達するものなり、

(丁)道義的性質　道義は人類自衛の大則にして善惡は理論上に於ては絕對たるべきものなるも、其の實際に現はるる所に依れば比較的と成り、他人

の所有權を犯して恥と爲さざる盜賊も相互の間に於て之を行ふを以て惡と認むるが如き、臺灣の生蕃は迷信的に首狩を行ひて他より大罪惡視せらるるを知らざるが如き、其の他、賭博、裸體等に對する感想の如きあり、要するに同一の行爲も社會の狀態、宗教、口碑、等に依りて善と認められ、惡と厭はれ、又不問に附せらるることあり、斯の如く善惡の標準一定せざれども吾人の能力に關係あるは事實にして、廣く善と稱せらるるか狹く惡と唱へらるるかを問ふことなくして人種を差別するの材料とは爲し得べし、所有權に關する觀念、生命に對する尊敬、名譽を重んずること、禮儀を心得居るが如き種々の點を考察するに於ては意外なる好果を收むるに至るなり、殊に文化の進みたる國民に罪惡の存在するは遺憾なるも亦高尙優美の思想が案外にも下層の蠻人中に現はるることあるは大に慰むに足るものならん。

(戊)信仰的性質　凡そ世界の各處に居住する人民は土地の狀況、生存の情態、心性若しくは知識の發達等を異にするに拘らず、敬神的信念、宗教的思想を有せざるもの殆んど罕にして之に報恩、恐怖、敬愛、等の念慮の加はるありて遂に

各種各派の宗教を現出せしめたるが如し蒙昧の時代、無知の人民には拜物宗、偶像宗、等の如き精靈教(Animisme)行はれ、半開の世には多神教(Polythéisme)あり、文化の進める人は一神教(Monothéisme)を奉ぜりと爲して信教の進化を示せるも、各教の優劣は容易に判し難きを以て其の特徴を了知せんと務め、之に由りて人種を差別するに適用するなり、例へばキリスト教徒の間に於けるユダヤ信者の如く、甲種族中に乙種族の雜居せるを明にすることを得るが如きあり、又キリスト、マホメット、ユダヤの三教徒は概ね白種に屬せるが、佛教を信奉する者は殆ど黃種に限れるが如きあり、某宗派は某種族に限れるが如きあり、而して高等宗教の信徒たるに拘らず、依然として劣等宗教の嗅味を存するの故を以て本來の族性を表示することあり、例へばギリシア正教の信徒中にシャマン的嗅味を保持するものあるが如く、マホメット教信者にしてフェチーシュ式なるものあり、殊に低度の部族種姓に關しては迷信の解釋に注意を拂ひて穩健なる斷案を下ださんことを要す。

以上記述し來れる事項に基づきて人類の種別を試みたるもの少なからざるが、大別して人爲分類法(Classification artificielle)に屬せるものと自然分類法(Classification naturelle)に屬せるものとの二種と爲すを得るなり、甲者は前記の事項に就きて重要と云はんより寧ろ觀察し易きもの例へば身長、頭骨、毛髮、體色(皮色、虹彩、等)等の一を選み、之に據りて人類の種別を行ふにあり、乙者は既得の知識を整理するのみならず、自然を系統的に表示せんとするにあり、されば甲者は簡易なるの利ありて一の事實を摘發するに便なるが、乙者は各種の事項に就きて輕重を考察して根底的性質(Caractères dominateur)と副次的性質(Caractères subordonnés)とを分別し、之に基づきて共存並に從屬に關する原則を實現せしめんとするにあり、即ち人類を單種と認め、皮色、頭形、頭髮、鼻、眼、等主要なる形貌的性質に基づき言語を斟酌して大體の別を立て人種(Races)、派(Embranchemen's)群(Groupes)を設け而して社交及び生存に據り、信仰、道義、等を參照して民族(Familles, peuples)、部族(Tribus)、氏族(Clans)、等に區分するものとす。

種別の實際

各種民族の種別に就きては古來學者間に幾多の論議あり、今に歸一確定を觀るに至らざるが、茲に諸説の中にて著名なるものを

揭げんにフランスのベルニエー(Bernier)(1625—1688)は皮色に據りて白黃黑赤の四式(Types)說を唱へ、スエリゲの有名なるリンネ(Linnaeus)(1707—1778)は皮色及び毛質に基づきて人類(Homo sapiens)にヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカの四變種(Variétés)あるを認めたり、又ドイツの人ブリューメンバハ(Blumenbach)(1752—1840)は始めて皮色にコーカシア(白)、モンゴリア(黃)、エシオピア(黑)、アメリカ(赤)、マライ(褐)の五人種(Races)說を主張し、フランスの人キュビエー(Cuvier)(1773—1838)はコーカシア、モンゴリア、アフリカの三種(Races)說を採り、同國のヴィレイ(Virey)(1776—1849)は白黑の二種(Espèces)と爲し更に各種を若干の副種(Sous-espèces)に細別したり、其の他デムーラン(Démoulins)の十六種(Espèces)說、ボリード、セントヴィンセン(Bory de Saint-Vincent)(1780—1846)の十五種(Espèces)說、ジェオフロワセンチレール(Geoffroy Saint-Hilaire)(1772—1841)の四人種十三派說、ヘッケル(Haeckel)の四人種十三派說、ドカートルファージュ(de Quatrefages)の五幹(Troncs)十八枝(Branches)說、ハクスリー(Huxley)の五人種說、トピナール(Topinard)の三人種、十九派說、ドニケー(Deniker)の十七群(十七變種)說、モーリー(Maury)の三

本種六亞種說等ありて悉く枚擧するに遑あらず。

前記の各種分類法に就きて一二を揭げて方法の大要を記さんとす。

皮色別　ブリューメンバハは一八二五年に於て專ら皮色の差異に基づきて人類を白色人種即ちコーカシア人種、黃色人種即ちモンゴリア人種、黑色人種即ちエシオピア人種、褐色人種即ちマライ人種、赤色人種即ちアメリカ人種の五人種に分ちたり、白色人はヨーロッパを主としアジアの一部、他の三洲に於ける殖民地に居り、黃色人はアジアの要部を占め、太平洋の沿岸地に點在し、黑色人はアフリカの中部幷に南部に亘り、北アメリカの南部にも住み、褐色人はマライ群島、ポリネシア、臺灣、マダガスカル等に棲息し、赤色人はアメリカの各地に散逸せり、されば皮色別には精確を缺けるの嫌あるを免れざるも、各人種が各大洲を以て夫々根據的住域と爲すが故に地理的たるの長所あり、然れども皮色に判然たる區別のあるが如くに思考せしむるの缺點あるを遺憾とす、而して現時の世界人口の總數十六億を皮色別にすれば白種の九億、黃種の五億四千萬、黑種の一億二千五百萬、褐色の二千五百萬、赤色の一千萬